官能のプリマ

ヴァージョンX

巡　礼

アカマル

目次

１．築三百年の屋敷・・・・・・・・・・・　5
２．ピアニストと呼ばれた少年・　18
３．鉱山の町・・・・・・・・・・・・・・・・・　28
４．ｸﾗﾌﾞ・ﾍﾟｲﾝｸﾘﾆｯｸの集い・・・・・　38
５．過去から届いた薬・・・・・・・・・　52
６．海炭市へ・・・・・・・・・・・・・・・・・　63
７．父の妄執・・・・・・・・・・・・・・・・・　73
８．海辺の情景・・・・・・・・・・・・・・・　87
９．旅立ちの予感・・・・・・・・・・・・・　99
10．夕日のきれいな街・・・・・・・・・　105
11．心を病む人・・・・・・・・・・・・・・・　115
12．物語の始まり・・・・・・・・・・・・・　125

メール

　僕は進太、十五歳になります。三月に中学校を卒業しましたが、まだ進路は決めていません。いわゆる無業者です。

　市の辺境に位置する山地の独り暮らしは、切なくなるほどさみしい。十年間を一緒に暮らした、Ｍのにおいが染みついた蔵屋敷も広すぎます。

　何よりもまだ、Ｍがいなくなった事実を受け入れられずに戸惑っているのが現実です。明日の朝になれば、Ｍがフッと帰って来るような気がして、日々が過ぎていきます。

　そんな僕を心配して、市街地に住んでいるテキスタイルデザイナーの祐子が、二日おきに食材や日用品を届けに来ます。その度に祐子は、早く進学先を決めろと言って説教します。説教は必ず、Ｍの思い出話に続いていきます。Ｍの容姿の美しさから始まって、他者を思いやる優しさに行き着く賛美は、自分自身の責任と人格で自立して生きるヒロインを羨望することで完了します。

　三十年近くＭの生き方を見続けてきた祐子には、養子の僕の軟弱な態度が我慢ならないのでしょう。まるで、父の偉業を讃える母の役割を演じているような口振りなのです。僕の目には、Ｍの子分としか見えなかった祐子に、母親役を演じられては、たまったものではありません。Ｍがいなくなった後、茫然自失の体をさらけ出したのは、他ならぬ祐子だったのです。今もなお、生ける屍のように、無気力に暮らしています。三十七歳の年齢を笠に着て、僕に憂さ晴らしをしているに過ぎません。でも、Ｍの不在を耐えきれずにいる、祐子の気持ちは理解できます。

　僕だって、所在なくＭの帰りを待つ日々が耐えられません。しかし、僕は祐子のようにはなりたくない。たとえ祐子の目に、一人で進路を決めかねている僕の姿が、同類のように映ったとしても、僕は祐子の同類ではない。Ｍの不在にたじろぐことなく、Ｍと一緒に生きる道を捜し出したいのです。

　あれこれと、考え続ける時間だけが、無為な暮らしの上に積もっていきます。

　考えが行き詰まると市へ出掛け、サロン・ペインを訪ねます。

　サロン・ペインは酒を飲ませる店ですが、店主のチーフがおいしいレモンスカッシュで僕を迎えてくれるのです。

　チーフもＭの子分のような女性ですが、本人はＭの愛人のつもりでいるようです。ご主人の天田さんの前で、Ｍへの求愛の言葉を平気で口にします。きっと、天田さんの嫉妬心をくすぐり、いつも

優位に立っていたいからなのでしょう。けれど天田さんは、同性への愛なんて、いっこうに気にしません。チーフを熱愛した自信が、彼のおおらかな性格を育んでいったと、Ｍが話していました。

天田さんは、Ｍが結婚したピアニストの、高校時代の同級生です。都会の大学を卒業し、市に戻ってきて市役所に勤めています。大の子供好きで、幼いころからサロン・ペインに出入りしていた僕を、とてもかわいがってくれました。小学二年生のとき、僕がＭの養子になって山地の蔵屋敷に引き取られた後は疎遠になりましたが、刑務所で自殺してしまったピアニストの戸籍上の子になった僕を、ずっと見守っていたと言って自慢します。どう考えても滑稽な自慢ですが、開けっぴろげで恩着せがましくない態度が憎めません。最近は、僕のことを大人と認めてくれているようで、好んで性的な話題を持ち出します。露骨な話に戸惑う僕を、うれしそうな顔で見ているのです。

一月前の、桜の花が散り始めたころ、天田さんとチーフが山地の蔵屋敷を訪ねてきてくれました。

おいしい手作りの料理と酒を庭に並べ、僕を慰めるための花見の宴が始まりました。その席で、天田さんは、Ｍの性を肴にして酒に酔ったのです。「Ｍは、娼婦みたいにセックスが好きな変態女だった」と、あけすけに僕に告げました。横で聞いていたチーフは怒り狂いました。僕も仰天し、むっとしました。しかし、天田さんの話しぶりには、Ｍを貶めようとする悪意は感じられません。ありのままのＭを愛でているような口調でした。

衝撃を受けた僕も、遠く去っていったと思っていたＭが、急に身近に感じられたような気がしたものです。でも、正直言って面食らいました。祐子の目に映ったＭの対局に天田さんのＭがいます。そして、チーフが愛人として慕うＭまでいるのです。一瞬、頭が混乱してしまいました。

目をつむると、僕の養母として毅然として立つＭの姿が浮かび上がりました。そのＭの背に、折に触れて逃げ込んでいった僕の後ろ姿が見えます。これまで見えなかった画面が見えたとき、動じようとしなかったＭのイメージがぼやけていました。

この半年間、だれを待っていたのか分からなくなってしまいました。僕が待ち続けていたＭは、一体どんな姿をしていたのでしょう。心の中が空っぽになり、情けなさが身に染みました。

僕は進学をやめます。

しょせん一人で生きなければならないのだとしたら、悔いだけは残したくないと決意したのです。

昨夜、Ｍに手紙を書きました。出すあてのない手紙ですが、僕の気持ちを整理してみたかったのです。

前略

Ｍがいなくなってから六か月が過ぎました。

初めての独り暮らしにも、ようやく慣れたようです。毎朝六時半に起き、ご飯を炊いて味噌汁を作ります。昼にはハムトーストと生野菜。ミルクコーヒーとオレンジも欠かしません。夕食には、午後のうちに下拵えをした、フィッシュやミートのメインデッシュが食卓を飾ります。料理の腕は、すでにＭを越えましたよ。でも、蔵屋敷の大きなテーブルで食べる、ひとりぽっちの食事は味気ない。Ｍが一緒にいてくれたらと、食事の度に思います。そして、Ｍが話してくれた独り暮らしの時代を思いやってみるのです。

僕の知らない若々しいＭがいます。完璧にひとりぽっちの、空虚な寂しさが伝わってきます。同じひとりぽっちでも、僕には側にいて欲しいと熱望するＭがいるのに、Ｍにはだれもいなかったのですね。漠とした人恋しさに惑う姿を想像すると、やり切れなくなります。恐らくＭは、心の隅にどうしようもない感情の吹き溜まりを抱えていたのでしょう。その大きさはともかくとして、僕の心の中にも吹き溜まりがあります。焦りや怒り、欲望や憎悪、そして堪らない悲しさが風に舞い、渦を巻いています。その吹き溜まりは、成長に応じて大きくなっていくような気がします。やがて等身大になり、身体を突き破って溢れ出すかと思うと、本当に怖い。

なぜＭが、僕をおいて出ていってしまったか、問いたいとは思いませんし、責める気持ちも失せました。ただ、Ｍが僕に話してくれた物語が、日を追って胸の中で膨らんでいきます。

家を出る運命に追い立てられるように、身を持って体験してきた事実を、Ｍは時をたどって話してくれました。初めて聞くＭの歴史を、僕は真剣に聴いたのです。そこには、思いもしなかった世界が大きく広がっていました。僕もいつしか、そんな世界の中に踏み出していかなければならないのかと思い、全身に鳥肌が立ったことを覚えています。

Ｍが語ってくれた様々な事実を、僕はひそかに「Ｍの物語」と呼びました。その長い物語が終わった十一月の朝、去年と同様、初氷が張りましたね。市へ行くと言って出掛けたＭは、そのまま戻ってきませんでした。一人で山地に取り残された僕は、「物語」を何度も反芻してみました。

最近になってやっと、事実だけを見据えてきたＭの生き方が、うっすらと見えて来たような気がします。だから、僕は写真家になろうと決意しました。

コントロールできない感情の吹き溜まりを、レンズを通してフィルムの上に対象化したい。事実を表現することで、身体から流れ出てしまう感情を凝縮させたいのです。

Ｍに見捨てられて、一人で生きていく僕にとって、カメラは最大の武器になると思います。けれど、当面カメラは要りません。何よりも、事実を見極める視点が欲しいのです。

僕は、明日から旅に出ます。

写真を撮る目で「Ｍの物語」をたどろうと思っています。これまでＭが出会ってきた人たちが、Ｍをどのように理解していたかを聞いて歩きます。物語を実際に検証し、Ｍを捜し出す旅です。

天田さんに聞いたショッキングなＭの姿。異常な性にまみれ、ひたすら官能を追い求めたという、もう一つのＭの素顔に直面する勇気もあります。

これまで知らなかったＭに会えるようで、いまから胸が躍ります。旅の途中で、現実にＭと会えるかも知れませんね。楽しみにしています。

くれぐれもご自愛ください。　　進太

1　築三百年の屋敷

「Mの物語」は、微かなヴァイオリンの音色とともに始まりました。二十八年前の夏のことです。

市の繁華街にある広告代理店に勤めていたMは、アパートの窓辺に流れてきたバッハの調べに聞き耳を立てます。

眼下に見える都市公園の葉隠れから聞こえてくる、無伴奏ソナタの音色に魅せられたMは、磁力に引き付けられるように公園に向かいました。でも、公園に演奏者の姿はなく、心地よいバリトンで話す中年男がMの前にあらわれます。男は、精神に障害がある少女の弾くヴァイオリンの素晴らしさを告げて立ち去ってしまいます。

会社からタウン紙の編集を命じられたMは、駅前のデパートで行われていた写真展の取材に出掛けます。もちろん初めての取材でした。会場の一隅で、都市公園でヴァイオリンを弾く少女の写真を発見します。素晴らしい写真の作者は、公園でMに少女を愛でたバリトンの男でした。Mは中年カメラマンの作品と声に魅せられてしまいます。

会場に来た客とトラブルを起こしたカメラマンを、Mは愛車のロードスターで山地へ送っていきます。カメラマンの家は、築三百年の屋敷と呼ばれる旧家でした。古色蒼然とした屋敷で写真のモデルを頼まれたMは、その場で快諾します。当然のように、カメラマンはヌードを要求することになります。写真撮影はやがて、暗黙の了解を得て、性の舞台に移行します。二十六歳のMは、カメラマンに導かれて官能への階梯を上っていったのです。

たまらなくセクシーなバリトンがMの心を潤し、性の誘いによって、肉体が解きほぐされていきました。しかし、二か月続いた情愛の果てに、Mは会社を辞め、カメラマンはヴァイオリンを弾く少女を殺してしまいます。

殺人のショックで精神に変調をきたしたカメラマンは、Mに依存し、殺人現場からの逃走を懇願しました。Mはカメラマンの願いを受け入れ、車のトランクに少女の死体を積み込み、二人で日本海へ向かってドライブします。

旅の終わりは、陸地が海に落ち込む崖の上でした。

カメラマンはMの目の前で素っ裸になり、自らの手で裸身を縛り上げます。愉快そうな顔でMを振り返ったカメラマンは「夢のような話をしようか」と言い残し、断崖から海へ身を投げて自殺してしまいます。

取り残されたMは、土地の警察に出頭し、少女の死体を提示しました。

Mは死体遺棄の罪に問われて罰せられますが、刑の執行を猶予されました。そして、それ以前の出来事。どこで生まれ、どのように育ち、どうして市で独り暮らしをしていたのかという二十六年間の来歴を、Mは僕に話しませんでした。

「Mの物語」は突然始まったのです。

僕はやはり、広告代理店の正社員だったMが、なぜ物語の主人公になってしまったかを知りたいと思います。何よりも、若々しいMの姿に触れてみたい。

幸い、Mが勤めていた会社でアルバイトをしていた木村さんと連絡が取れました。木村さんは当時、業態の多様化を目指す会社からタウン誌の編集を命じられたMの、よきアシスタントだったと聞いています。

僕は、Mと中年のカメラマンが少女の亡骸を伴ってたどり着いた、日本海に面した地方都市を訪ねました。偶然この地方が、木村さんの生まれ故郷だったのです。

二日前に電話で得た情報によると、木村さんの実家は、この土地で代々続いた蒲焼き屋でした。家業を嫌って故郷を離れ、市の工学部に進学しましたが、卒業と同時に病弱な父に泣きつかれて帰郷し、嫌々家業を継いだそうです。けれど、現在の木村さんは鰻屋をしていません。フランス料理店のオーナーシェフをしていると言っていました。

ランチタイムが終わる時刻を見計らって、僕は古びた駅舎のベンチから立ち上がりました。

駅員に教えられたとおりにメインストリートの奥に向かいます。静かな、落ち着いたたたずまいの町並みを十分ほど歩いたところに、瀟洒なフランス料理店がありました。小振りな店構えですが、四台分の駐車スペースを設けた白塗りの建物はとても明るい雰囲気です。五つのテーブルの他に、広いカウンターがあります。白いシャツブラウスに黒いエプロンを巻いたウエートレスに案内されて、ウオールナットの重厚なテーブル席に座りました。

しばらく待っていると、プレスのきいた白衣を着た、恰幅のいい男が近寄ってきました。鼻の下に蓄えた髭は、白と黒の品のよいメッシュになっています。訝しそうな目で僕を見下ろしてから、向かいの椅子に腰掛けました。

電話の声は若々しい感じでしたが、目の前の木村さんは立派な中年男です。

僕は、立ち上がって挨拶します。

「お忙しいところ、時間をとってくださって恐縮です。さっそくですが、二十八年前に、市で学生アルバイトをしていたころの話をうかがいたいんです」

ずうずうしく用件を切り出すと、木村さんが鷹揚にうなずきました。

「Mを、覚えていますか」

座ると同時に、Mの記憶の有無を尋ねました。木村さんが目を丸くします。

電話ではMの名を出していません。広告代理店の古いエピソードが聞きたいと、社史編纂の仕事を装ってインタビューを依頼してあったのです。それが、どう見ても高校生にしか見えない子供が、はるか昔の女性の記憶を問いただしたのです。驚かない方がおかしいのかも知れません。しかし、確かな反応があったのです。

僕は慌てて言葉を付け足しました。

「電話で嘘を言って、ごめんなさい。僕は、Mと一緒に暮らしている者です。でも、半年前に、Mは黙って家を出てしまいました。ぜひ、捜し出す手掛かりが欲しいんです。Mを覚えているんですね」

膝を乗り出して、必死に木村さんの目を見つめました。硬かった表情が穏やかになり、口元が緩んでくるのが分かります。懐かしそうな視線を僕の頭越しに投げてから、大きくうなずきました。

「ああ、覚えているよ。ずいぶん昔の話だが、今でも、さっそうとした姿が目に浮かぶ。まぶしかったね」

さわやかな声が返ってきました。別れたばかりの人を思い起こすような、鮮やかな答えに期待が高まります。

「Mは、そんなに美しかったんですか」

思わず詠嘆の声が出てしまいました。陳腐な問いを聞いた木村さんが、はにかんだように下を向きます。冷やかしの言葉と誤解されたようです。僕はどぎまぎして、身を縮めてしまいました。

短い沈黙の後、木村さんが顔を上げ、挑むように僕を見ました。

「つまらないことを聞くなよ。今だって美しいだろう。当時は、俺も若かったから、年上のキャリアウーマンがとてもまぶしく見えたんだ。大きくて、美しい人だったよ。俺も身長は百七十センチメートルあって、この歳では低い方じゃない。でもMは、俺より背が高

かったね。踵が五センチはあるハイヒールを履いていたんだ。服はいつも、身体にぴったりしたスーツだった。体格もいいし、プロポーションもいいからよく似合った。おまけに仕事ができたから、俺みたいな若造はMの前ではコケみたいだったよ。よく俺のことを覚えていてくれたと思うね。感動もんだ。一緒に暮らしていたと言うあんたは、Mの子供なのか。そういうことなら、俺は、あんたの親父さんを恨むよ」

一息にまくし立てた木村さんの目が輝いています。熱気の向こうから、自信に溢れた若々しいMの姿が立ち上がってきました。ジーンズとトレーナーを着古していた、近年の印象からは想像できない華やいだイメージです。Mに付きまとっていた、苦しいほどの悲しさも伝わってきません。妙にアンバランスな気持ちがうまく整理できずに、僕の返事は少し遅れました。

「いえ、実子ではありません。養子です。七歳の時に、Mに引き取られたんです。でも、僕の知っているMは、いつも地味な格好をしていて、人目も気にしなかった。どちらかというと、古風な女性に見えました。苦しみも悲しみも、みんな一人で耐えてしまって、人知れず死んでしまうような不安があったんです。いなくなってからも、ずっと心配でたまらなかった。だから、今のお話はすごく新鮮でした。Mを捜し出す希望が湧いてきます」

誠意を込めて答えると、木村さんの口に微笑が浮かびました。

「ふーん、養子かい。それじゃあ、遠慮しながら話すこともないな。それに、あんたは見掛けより大人のようだ。Mも行方不明なだけで、亡くなったわけでもない。もっとも、俺にはMが死ぬなんて考えられないがね。まあ、美人薄命というから、外見から見ればやばいかも知れないが、Mは恐ろしいほど戦闘的だった。不死身の女だ。殺しても、死にはしないよ。なんでも自分の思いどおりにしないと気が済まないんだ。仕事はおろか、私的な付き合いでもそうだった。いつだって一等賞だよ。二等になるくらいなら、始めからしないのがMのポリシーに見えたね。冷酷と言えるほどの仕事ぶりだから、当然敵は多い。だが、能力も容姿もずば抜けていたから、真の敵になる者はいなかった。俺はそんなMが内心得意でならなかったよ。あんな上玉は都会にしかいないと思っていたから、地方大学に進学した俺には誇らしいくらいだった。きっと、腰巾着みたいに、くっついていたんだな。よく、酒を飲ませてもらったよ。Mは酒が強い。どこの酒場に行っても最高に華があったね」

Mと出掛けた酒場の空気を懐かしむように、店の内部を見渡してから、木村さんは口を閉じてうつむきました。二十八年前の自分を貶めているような話しぶりです。Mへの憧れ

を越えた、嫉妬と欲望のにおいが漂ってきました。

若かったころのMが醸し出していた雰囲気の根元が、ちらっと見えたような気がしました。もっと詳細に知りたいと思い、木村さんの白髪混じりの頭に問い掛けました。

「Mを、好きだったんですか」

直截に尋ねると、即座に木村さんが顔を上げました。微かに頬が赤く染まり、うろたえた目つきになっています。

「もちろん好きだったよ。でも、高嶺の花さ」

さり気ない答えが返ってきました。溢れ出そうになった感情を、これまで生きてきた膨大な時間で圧殺したような掠れ声です。

「Mに、恋人はいなかったんですか」

畳み掛けるように尋ねました。

「そんな者はいないさ」

木村さんが即答しました。でも、どことなく焦りが感じられる態度で目を伏せます。膨れ上がってきた悔いが、口元まで上がってきたような顔をして、唇を歪めました。右手でテーブルのカップを取って、ぬるくなったコーヒーを飲み干しました。口の端から尾を引いて、茶色の液体がテーブルの上に落ちます。

僕は構わず話を続けます。

「でも、木村さんが話すMは、とっても魅力的です。僕が言うのも変ですが、男にもてないはずがない」

「そりゃあ、もてたさ。けれど、言い寄っていく男はいなかった。馬鹿な男は一人もいなかったんだ。だって、Mと釣り合いがとれるはずがない。それを分かっていて、みすみす惨めな思いをしたいという奇特な男はいなかったね。みんな、遠くからMを見上げていたんだ。そう、俺もその一人だよ。それでよかったんだ」

自分に納得させるように断言して、木村さんは黙り込みました。もうMのことは話したくはないといった風情です。僕は用意してきた言葉を投げ付けます。

「カメラマンの恋人がいたと聞いています」

「嘘だ、Mはあいつに騙されたんだ。恋人なんかであるものか」

すかさず怒声が返ってきました。怒りと悔恨が混ざり合った目で僕を睨みます。やはりカメラマンはキーワードでした。怖い顔で僕を睨み付けながら、問わず語りに話し始めました。

「確かに、Mとカメラマンは付き合っていたよ。あの中年男が写真賞をもらった記念の個展に、俺はMと一緒に取材に行ったんだ。カメラマンとも会って話した。見え透いた変態野郎だったね。けれど、Mは騙されてしまった。セクシーなバリトンがすてきだなんて言っていた。詐欺師は声を武器にするんだ。大したことのない写真でも、ネコナデ声で大層な作品に言いくるめる。残念なことに、Mはアーティストを知らなかった。田舎町には芸術家がいなかったんだ。Mが知っていたのは芸術論だけだ。その弱点をやつは突いた。卑怯者だよ。Mは男社会のなかで男と渡り合って仕事をしていた。ライバルはいない。さっき話したように、男たちにも遠慮があった。だから、性に無防備だったんだな。簡単に転んでしまった。今でも、俺は悔しい。あっけないくらいに平然と、あんな男と寝てしまったんだ」

先ほどの怒声が嘘のような、静かな声でした。まるで独り言みたいに聞こえます。Mの姿も驚くほど変わってしまいました。自信溢れた大人の女が消え失せ、女衒に騙された、世間知らずの小娘が出現したみたいです。僕は思わず苦笑してしまいました。

「Mが利口だったか、馬鹿だったのか、分からなくなりますね」

意地悪な感想を聞いた木村さんが眉をしかめ、首を左右に振りました。口を突いた言葉は上擦っています。

「いや、俺は中年男が騙したと言っただけだ。Mに責任はないよ。あんな事件が起こって、結果が出てしまったんだ。もう、取り返しはつかない。俺はかけがえのないものを失い、Mは遠くへ行ってしまった。悔いだけが残った。だから、だれかを悪者にするしかないじゃないか。確かに、俺はMの恋を認めたくないのかも知れない。だが、あいつとの関係が深まっていくに連れて、ぼろぼろになっていったMを見ている俺は、死ぬほどつらかったんだ。Mには、あいつが初めての男だった。それなのに、あの変態野郎は芸術と性をない交ぜにして、Mをたらし込んだ。何がアートだ。俺はMが会社を辞める前に、アパートを訪ねていったことがある。荒みきったMに会った。いや、見たんだ」

断言した木村さんが口をつぐみました。先を話してよいかどうか迷っている様子です。

「僕なりに覚悟を固めて会いに来たんです。言いにくいことでも遠慮せず、ありのままを話してください」

促すと、木村さんが力なくうなずきました。唇を舐める仕草が卑猥に見えます。いよいよMの性が語られるのでしょう。何を聞いても驚かないように、僕は身構えます。

「俺に仕事を押し付けっぱなしで、Mはあいつの屋敷に入り浸りだった。すでに有給休暇

もなくなり、解雇されるのは時間の問題だった。それまでにも俺は、何度となく意見をし、嫌味も言ったんだが、Mは聞き入れてくれなかった。あいつとの恋が最高だとうそぶいていたんだ。俺は、Mに怒鳴られるのを覚悟で、職場に復帰するように頼みに行った。無性にMに会いたかったんだ。ドアチャイムを鳴らしても答えないので、無断でアパートのドアを開けた。ちっぽけなワンルームだった。俺は、仰天して息を呑んだ。リビングにいる素っ裸のMが目に飛び込んできたんだ。Mは姿見の前に立っていた。俺に気付いた様子もない。遠くを見る目で、鏡に映る自分の裸身を見つめていた。真っ白な美しい肌に、赤黒い筋が痣のように無数に走っていた。特に尻がひどかった。慌ててドアを閉めたよ。振り返ったMと、一瞬目があったが、これといった表情は浮かんでいなかったね。どこか遠くを見ているような、我を忘れた目をしていた。悲しいほど美しかった。あんなに美しい裸身が、悲しく見えたことが不思議でならなかった。外に出て、青く澄んだ秋空を見上げたら涙がこぼれた。悲しさの理由が分かった気がした。Mは完璧に独りぼっちだったんだ。鏡に映る孤独を見つめるように、自分の裸身に見入っていた。その肉体には官能の余韻と、性の喜びが刻み込まれていたはずなんだ。けれど、それも空しかったのだろう。あんなに誇り高かった女の深奥を、盗み見てしまった気がしたよ。俺は、泣きながら会社に帰った」

話し終えた木村さんの目が、涙目になっていました。僕の目頭も熱くなってきます。でも、遠くにある思い出は甘い味がするものです。たかだか十五年しか生きていない僕がそう思うのですから、木村さんが辛い記憶を美しく飾ったとしても、無理はありません。生々しい事実を見つめてもらうのが一番です。

「素肌に無数にあった傷は、なんなのでしょう」

さり気なく問い掛けると、木村さんの頬が真っ赤に染まりました。しばらく迷った後、話したい欲求に負けたように口を開きました。

「鞭打ちの痕だよ。会社に帰ってから、俺はその事実に思い至った。目に焼き付けてきた裸身を思い浮かべると、手首や胸にも縄の跡が残っていた。Mは毎日のように縄で縛られ、鞭打たれていたに違いないんだ」

恥ずかしい秘密を明かすように、木村さんが言葉を落としました。しかし、見開いた目は異様に血走っています。僕の目にさえ、性の高ぶりが感じられます。情け容赦なく、追い打ちをかけることにしました。

「想像したことに、欲情は感じませんでしたか。勃起はしないんですか」

僕の問い掛けに、木村さんは目を大きく見開いて口を開けてしまいました。黙って答えを待っていると、さもつらそうに僕を見返します。

「参ったなあ。そんなことまで聞くのかい。まるでMが目の前にいるみたいだ。とても養子には見えない。Mの子供に責められているような気分になる」

つぶやくように言って目を伏せました。確かに、Mの子供に話せるような話題ではありません。けれど、Mが木村さんに与えた性の衝撃は、ぜひとも聞き出したい事実の一つです。素顔のMを捜し出す旅に出た僕にとって、避けては通れない関門です。

僕は深々と頭を下げて、依頼の言葉を吐き出しました。

「四半世紀も昔のことで、責められる道理はありません。ぜひ、事実を話してください。個人的な秘密であっても、僕は知りたい。Mを捜し出すための貴重な情報になります。見当はずれの場所を捜さないように、Mのすべてが知りたいのです」

大きな声になっていました。頬がかっと熱くなります。

ゆっくり顔を上げると、木村さんの辟易とした顔が見えました。でも、口許に苦笑が浮かんでいます。

「あんたの言うとおりだ。昔のことで恥ずかしがるほどの歳じゃないな。Mの魅力を裏付ける資料の一つとして、聞いてもらおう。だが、聞いてから後悔しても、責任はとれないぜ」

「いいえ、後悔はしません。聞かせてください」

最後のあがきのように念を押した木村さんに、短く答えました。木村さんが、唇の端を舌で舐めてから口を開きます。

「正直に言ってしまえば、俺は欲情したよ。焦りに似た欲情を抱いて会社のトイレに駆け込み、勃起したペニスを指先でなぶったんだ。つむった目の裏には、素っ裸で鞭打たれるMが見えた。俺の知らないMだ。性の喜びに震えている最高の女だった。堕ちていく覇者を見るのはだれでも楽しい。性の喜びに泣くMは、俺にとって堕ちた覇者だ。俺は暗い喜びと共に射精した。惨めな官能を感じると同時に、悔恨が押し寄せてきた。少し遅れて嫉妬が襲い掛かった。俺は変態じゃないが、Mを素っ裸にして縛り上げ、鞭打つこともできる。それでMが喜び、我を忘れた目をしてくれるなら、きっと俺にもできたはずだ。けれど、それをしたのは俺ではなく、あいつだった。だから俺は、あの中年男に、Mが騙されたと言ったんだ」

木村さんの答えは最初の断定に戻っていました。

完璧な孤独がMを官能に誘ったと言う木村さんは、自分でMを縛り上げ、鞭打つことで、その孤独を共有したかったと打ち明けてくれました。くたびれた中年男の向こう側に、今も熱く燃え上がっている若々しい官能の炎が見えるようです。

なぜMが、木村さんでなく、中年のカメラマンを選んだのかは分かりません。でもいつか、Mが木村さんを訪ねて来る可能性はあります。離れて二十八年経った今でも、全身でMを理解しようとする木村さんの気持ちは、確実にMの悲しさと繋がっているような気がするのです。

僕は感謝の言葉を述べ、失礼を詫びてから木村さんの店を後にしました。

さわやかな風が、少し火照った頬を快く撫でていきます。時刻はまだ午後三時を回ったところです。

ここから二駅先にある警察署を訪ねたくなりました。そこは、精神障害者の少女の死体と一緒に、ロードスターに乗ったMが出頭したところです。

Mは死体遺棄の罪で現行犯逮捕され、留置所に収容されて取り調べを受けました。そのときMを担当した婦人警官が定年になり、交通安全センターで嘱託職員として勤務しているのです。あまり気が進まなかったので、電話で所在を確認しただけなのですが、やはり訪ねることにします。

この事件から十四年後のMは、三年も刑務所に収監されていたのですから、今から婦人警官を敬遠していたのでは、先が思いやられてしまいます。

僕は二両編成の電車に乗って、次の証言を求めて隣町に向かいました。

交通安全センターは、警察署から百メートルほど離れたところにある二階建ての小さな事務所でした。

運転免許証の更新手続きなどをするところですが、四時近い時刻は訪問者もいません。案内を請うと、警察官と似た紺色の制服を着た中年の女性が出てきました。六十歳を過ぎているはずですが、若々しい身ごなしです。僕の偏見でしょうが、どこか見下した、意地悪そうな素振りが気に掛かりました。僕の自己紹介にも応えずに先に立ち、暗い廊下の奥に案内していきます。

扉を開いて招じられた小部屋は、窓のないコンクリートの箱のような部屋でした。黒い

ビニール張りの応接セットが置いてあるのですが、テレビ・ドラマで見た警察の取調室のような雰囲気です。

山形と書かれた名札を胸に付けた元婦人警官は、正面のソファーに座って無表情に僕の話を聞きました。うなずきもしなければ、聞き返しもしません。ひとしきり話させた後、怖そうな目で僕の目をのぞき込みます。

「進太さんの用件は分かりました。二十八年前に警察署に留置されていた、あなたの養母の当時の様子を調べ、捜索の手掛かりをつかみたいというのね。私は退職しても守秘義務があるし、ずいぶん昔のことよ。覚えていないと言って帰ってもらうのが普通だけれど、あなたは養子だし、行方不明の養母を捜し出したいという気持ちも立派だ。できる限りの協力をします」

山形元婦警は尊大な態度で協力を申し出てきました。僕の方が面食らってしまいます。

「婦警さん、ありがとうございます」

まるで、何か悪いことをやらかした少年のように答えていました。それも元婦警ではなく、現職の婦警に言うようにです。山形婦警は、少年課にも在職したことがあるのかも知れません。当たり前な顔でうなづいて、先を促しました。

「Mは、生まれて初めて一週間留置され、婦警さんのお世話になったと言っていました。婦警さんはMを覚えていますか」

「二十六歳の女性が留置場に入れられたんだから、初めてでなかったらよほどの犯罪者よ。もちろん覚えているわ。Mは私が留置場の担当になった年に入ってきた初めての女性よ。あのころの私は三十歳を過ぎたばかりで若かったし、野心もあった。いずれは捜査課に配属されて、女性刑事になる希望を持っていたのよ。だから、犯罪者を間近に見られる留置場勤務を志願したの。よく覚えているわ。経験を積んだ後から思い返すと、Mは普通の犯罪者と比べて一風変わっていた。私はMを担当したのが最初の仕事だから、どうしてもMを標準にしてその後留置した犯罪者を見てしまったの。その基準を変えるのに、ずいぶん苦労したわ」

山形婦警は意外に多弁でした。普段話し合う相手がいないのかも知れません。容疑者を犯罪者と断定した口振りに、偏狭な性格があらわれています。僕は我慢できずにそのことを指摘しました。

「留置されたときのMは容疑者で、犯罪者とは違います。申し訳ないですが、言葉に気を付けてくださいませんか」

「結果的にMは犯罪者でしょう。有罪になったんだから間違いない。私は刑事を希望したほど、犯罪者には厳しいのよ。その私がMを甘やかすと思う。話が聞きたくなかったら、帰ってもいいのよ」

威圧的に答えた山形婦警が僕を睨み付けました。思わずオシッコをちびりそうになるほどの迫力です。けれど、僕だって負けられません。尻尾を巻いて帰ったら、Mに会わす顔がなくなります。

「いえ、なんでも話してください。Mのどこが変わっていたのですか」

踏みとどまって答えると、山形婦警は舌なめずりをしそうな笑顔を浮かべました。もちろん食べようと狙っている獲物は僕に決まっています。

「留置場に、犯罪者を入れるときはね」

話し始めた山形婦警が、言葉を切って僕を見ました。口許に意地悪そうな笑いが浮かんでいます。僕は仕方なく、肩をすくめて応えました。

「危険物や薬物を房内に持ち込まないように、素っ裸にさせて身体検査をするのよ。Mにも裸になるように命じたわ。Mは恥ずかしがって抵抗した。でも、羨ましいほど美しい裸身を見て、びっくりしたのは私の方だった。身体中に鞭で打たれた痕があった。両足を開かせて肛門を調べると、かわいそうなくらいに腫れて、括約筋が裂けていたわ。白い肌を真っ赤に染めて、Mは消え入りそうなくらい恥ずかしがっていた。私には、そう見えたの。だから、優しく留置場の規則を言い聞かせ、守らないと懲罰することも教えてやったわ。留置場は旅館じゃないからね。徹底して、規則を守らせるわ。故意に規則を破ろうものなら、メンツにかけて懲罰する。あなたの養母も、私が懲罰したのよ。どう、もう聞きたくなくなったでしょう」

山形婦警が、怖い表情で問い掛けてきました。僕は背を正して身を乗り出します。

「いいえ、先を続けてください」

あごを引いて答えました。山形婦警には、ふてぶてしい態度に見えたのかも知れません。射るような視線で睨み付けてきました。ここで恫喝に負けるわけにはいきません。じっと視線を受け止め、沈黙に耐えます。

「あなたも、強情な子ね。どうしても、養母の恥を聞きたいというのね」

あきれた声で山形婦警がつぶやきました。

この勝負は僕が勝ったようです。大きくうなずき返すと、山形婦警が再び話し始めました。

「Ｍも、あなたと同様、強情な女だったわ。留置した翌朝から、私に反抗を始めた。朝食の時に、三度も味噌汁をこぼしたのよ。もちろん、故意にしたことよ。私も軽んじられたと思って、厳しく罰することにした。汚した服を脱がせて、素っ裸にしてやったわ。後ろ手に手錠をかけ、房の中央で正座しているように命じたの。Ｍは命じられたとおりにしたわ。全身を赤く染め、屈辱と羞恥に耐えているようにも見えた。でも、どこか変なのよ。妙に高ぶった雰囲気があった。小用を足すときには、大きく両足を開き、私に股間を見せ付けるようにしたのよ。固く目をつむった顔が喜んでいるように見えた。まるで、性の極まりを迎えている雰囲気だったわ。悩ましそうに尻を震わせていたのよ。後になって気が付いたんだけど、Ｍは変態だったのね。マゾヒストだから、屈辱と苦痛の果ての快楽を求めたのよ。私が、あなたの養母のＭを覚えているのは、その狂気のためよ」

恐れ入ったかというように、話し終わった山形婦警は薄い胸を反らしました。しかし、僕は平然と婦警を見つめ返します。

「どうしてＭは、マゾヒストになったのでしょう。長い経験を積んだ婦警さんの、現在の見解を聞かせてください」

冷静に問い掛けた声に、婦警はびっくりした顔で応えました。けれど、さすがに犯罪者に厳しく接してきた経験は動じません。諭すような声で説教が始まりました。

「どうしてって、決まっているじゃないの。ひねくれた心で大人に甘えていたのよ。Ｍは、きっと寂しい環境で育ったのね。だれも相手にしてくれない独りぼっちの幼・少年期を過ごしたはずよ。どうにか大人になって、だれにも負けないような美人に成長した自分を発見した。もう、相手に不自由することはない。特に男はね。でも、人との交わりを経験してこなかったから、男と交流することが怖い。そんなときに、一方的に責め立てられる性を体験したのね。自分は受け身でいるだけで、絶頂に導いてもらえるのだから、怠け者の寂しがり屋には最高のパターンよ。変態のマゾヒストになるには、努力は要らないのよ」

断言した山形婦警が、すっくと立ち上がりました。僕の反論などには耳を貸さないといった素振りです。当然、僕に反論はありません。山形婦警の推論を覆す根拠がないからです。Ｍが自分の生育史を語らなかった以上、幼少時の心の傷も見えませんし、性向に反映した体験も分かりません。ひとつの説として、ありがたく拝聴することにしました。

その代わり、山形婦警の職歴について質問することにします。

「婦警さん、あなたは捜査員になれたのですか」

僕も立ち上がって、正面から問い掛けました。山形婦警が、真っ直ぐ僕を見つめ返しま

す。

「なれたわけがないでしょう。世の中はそんなに甘くない。進太さんも、早く心の整理をつけて勉強し、いい大学に入ることね」

苦渋の答えと説教を背中で聞いて、僕はコンクリートの部屋を出ました。僕もMと同じように権力に反感を持ってしまうようです。しかし、山形元婦警は自分に忠実な人だと思いました。その一点でMと繋がっているような気がします。

交通安全センターの外には、もう夕暮れが迫っていました。

真っ赤に染まった雲が闇に紛れると、Mが心の底に抱いていた悲しみのような夜が訪れます。「Mの物語」をたどる最初の旅は結構疲れました。でも旅は、まだ始まったばかりです。

来週は都会へ行き、ピアニストのピアノ教師と会うつもりです。僕の戸籍上の父にあたるピアニストと、Mとの出会いの様子が聞けそうで、今から楽しみにしています。

２　ピアニストと呼ばれた少年

築三百年の屋敷の事件のあった翌年。市で夕刊紙の営業をしていたＭは、広告を取るためにピアノ教室を訪れ、レッスン室で自習していた少年に会いました。その少年を、Ｍは「ピアニスト」と呼んだのです。

Ｍは二十七歳。ピアニストは十八歳で高校三年生でした。

ピアニストの弾くショパンを賞賛したＭは、急に歯痛を訴えます。激しい痛みに苦しむＭを案じたピアニストは練習をやめ、山地で歯科医院を開業している父親の診療所にＭを案内します。

歯科医と波長の合ったＭは、その日の内に情愛を交わし合いました。一目で大人のＭの魅力に捕らわれてしまっていたピアニストは、父とＭの関係に疑心暗鬼になります。しかしＭは、悪びれることなく、歯科医との仲をピアニストに告白しました。未熟な性を容赦なく挑発したのです。

性の誘惑に翻弄されたピアニストは、Ｍと歯科医が繰り広げる官能の世界に誘い込まれてしまいます。歯科医の妻が市へ外出する日を見計らって、歯科医院の敷地にある蔵屋敷で痴態を演じていた三人は、突然帰ってきた妻に現場を押さえられます。怒りに燃えてＭを折檻した妻も、異常な官能の誘惑に負けてしまいます。Ｍは、性の奴隷として歯科医夫妻に奉仕することになり、この日から二か月間を、蔵屋敷で暮らしました。

ピアニストは音楽大学の受験を断念し、性愛にまみれた家族と、Ｍへの愛に苦悩します。都会の歯科大進学を決意したピアニストは、Ｍに求愛し、都会への同行を訴えました。Ｍはあっけなくピアニストの願いを拒絶し、蔵屋敷に残ることを選択します。しかし、ピアニストが都会へ出発する前夜、Ｍはピアニストの部屋を訪れます。明日、ドライブに出掛ける日本海で、性に爛れた暮らしを精算しようとする歯科医夫妻に殺されると告げたのです。

Ｍの言葉を信じかねていたピアニストも、両親からＭを守ることを決意して、車の前に立ちはだかります。後部座席には、素っ裸で鎖に繋がれたＭがいました。ピアニストはＭの横に座り、ドライブに同行します。

行き着いた果ては、因縁の日本海の崖上です。歯科医とその妻が車から降りた隙を突き、Ｍはピアニストを泣き落として拘束を解かせます。一人で逃げ出したＭは、親子三人の目

をくらまして、乗ってきたベンツを奪います。

早春のまぶしい日射しを浴びた素っ裸のMが、ピアニストに別れを告げます。

「情けないショパンをありがとう。絶対忘れないからね」

この言葉のとおり、Mとピアニストのねじ曲がった関係が続いていきます。

歯科大に入学したピアニストは医科に転学し、Mへの思いを断ち切るように社会改造の夢を抱くのです。そして、次々にMの物語が展開していくことになります。

残念ながら、僕はピアニストに会ったことがありません。

お父さんの歯医者さんとは、彼が亡くなるまでの七年間、山地で家族のように暮らしました。無欲を絵に描いたような好々爺でした。僕とMは本当の家族のように歯医者さんと接していました。もっとも、Mはピアニストと結婚したのですから、義父にあたる歯医者さんはMの家族に他ありません。しかし、Mとピアニストが一緒に暮らした時間は、結婚するはるか前の、出会いの瞬間だけだったのです。やがて義父になる歯医者さんと、その妻を含めた四人が一緒に暮らしたのは、わずか二か月余りのことです。

今年五十四歳になるはずのMにとって、二か月という時間は、瞬間と呼ぶべきものでしょう。

「Mの物語」を聞かされた僕の目には、ピアニストはその後、Mとの出会いの時間に、短い生涯を束縛されてしまったように見えます。このときを含め、ピアニストは三度、Mに求愛しました。最後の求愛は三十三歳の時です。青年医師のピアニストは死刑囚となって、果たせぬ愛を請いました。Mは、このときになって初めて、ピアニストの愛を受け入れ、結婚したのです。

獄中結婚という、悲痛な言葉が僕の脳裏を去来します。どのような希望が二人の間にあったか、想像することもできないほど哀切です。そして、ピアニストが獄中で自殺した後、歯医者さんの妻も事故で死亡しました。

それから三年が経過した夏、小学校一年生だった僕は母に見捨てられ、非行少年として教護院に収容されました。行き場のなくなった僕を、ピアニストの遺産を相続したMが引き取り、養子にしてくれたのです。

それまで市で独り暮らしをしていたMは、僕のために、蔵屋敷に住むことを決意します。義父の歯医者さんと三人で、山地で一緒に暮らすことになりました。今から八年前のことで、Mは四十六歳でした。

二年前には歯医者さんが死に、Ｍも家出して半年余りになります。

今や、滅びの家と呼びたいような蔵屋敷には、僕一人が取り残されてしまいました。この家には、Ｍを含めたピアニスト一家の愛憎と官能が漂っているような気がします。築三百年の屋敷の物語とは別に、もう一つの物語の始まりが、Ｍとピアニストの出会いにあったような気がしてならないのです。

僕は、歯医者さんの親戚の文学少年に扮して、ピアニストのピアノ教師を訪問します。家族小説の取材を装って、Ｍとピアニストの出会いの場面を検証してみるつもりです。

市でピアノ教室を主宰していた三井一子さんは都会の出身でした。

牧師のご主人に先立たれてからも、しばらく市に留まっていましたが、十年ほど前に都会に帰りました。現在は都下の専門学校でピアノを教えるかたわら、音楽大学進学を目指す受験生を相手に、自宅のマンションで個人教授をしています。ピアニストを教えていたころ四十歳でしたから、もう七十歳近くなっているはずです。

三井先生は、満面に笑みを浮かべて僕を招き入れてくれました。

通された部屋は十五畳ほどもある広いレッスン室です。フルコンサートのグランド・ピアノが置いてあるため、さしもの広い部屋が手狭に感じられます。先生と僕は、窓際に置かれた白い布張りの椅子に向かい合って座りました。テーブルにおいたハーブティーのカップから、ふくよかな香りが漂ってきます。窓の外は走り梅雨の雨脚で煙っていました。

「遠くからよく来てくださいましたね。市から来た方とお会いするのはしばらくぶりです。本当に懐かしいわ」

歌うような声で先生が言います。少しかん高いけれど、若やいだ声です。とても七十歳になるとは思えません。肌も艶やかで、アイボリーのシルクニットの部屋着がとてもよく似合っています。

「電話でお願いしたとおり、先生の教室の生徒だったころのピアニストのことを知りたいのです。ずいぶん昔の話で申し訳ありませんが、覚えていらっしゃいますか」

僕の依頼を待っていたように、先生が身を乗り出します。

「そう、ピアニストよ。忘れるもんですか。あの子は本当の天才になれた子よ。ピアノを弾く姿を見た人は皆、あの子をピアニストと呼んだわ。アシュケナージはともかく、エッシェンバッハくらいなら、なれたはずよ。ピアノを続けていればね。それは素直で、透明

な音が出せたの。お父さんに反対されたそうだけど、お陰で医者になれたのだから、文句は言えないわね」

情熱的に話し始めた先生の言葉は、歯切れ悪く終わってしまいました。期待をかけた弟子の挫折を悔やんだのでしょうか。それとも、不肖の弟子を改めて叱責したのでしょうか。どちらにしろ、若かったころの記憶は、まだ鮮明のようです。

僕は素直に、先生の見解を確かめることにしました。

「先生は今、本当の天才になれた子だとおっしゃいましたが、おもしろい表現ですね。特に意味があるのでしょうか」

言葉尻を捕らえるように問い掛けると、先生の上品な顔に苦笑が浮かびました。膝に置いた両手の長い指先を意味もなく絡ませています。上目遣いに、鋭く僕の目を見ました。

「あなたは礼儀正しいだけでなく、鋭いことも言うのね。小説家志望と言うから、きっと、頭の回転がいいのでしょう。あのころのピアニストとよく似ていますよ。そう、確かに私の言ったことには社交辞令があります。天才に本当も嘘もない。いくら努力しても、なれるものでもないわ。ピアニストには、まだ向上の余地が残されていたと言いたかったのよ。もう、音楽をやめて医者になったのだから、本当のことを言っても怒らないでしょう」

「演奏家には、なれなかったということですか」

「そうでもないわ。上手に弾くだけの演奏者もいますからね。でも、天才とはちょっと違う。天才というのは、生まれつき表現する何物かを持っているということなの。表現の手段がピアノであっても、絵画であっても、文学や建築であってもいいのよ。大切なのは、表現する何物かを持っているという特殊な能力。もちろん能力には大小があるわ。能力がない人もいるのだから、生まれつきの差別があるの。私にも、ほんの少しの能力がある。でも、豊かな能力を持った人を羨んでも仕方ないわ。後は努力でカバーするしかないのよ。人の能力は絶対に平等ではない。私の夫は牧師だったから、だれとでも平等に接したわ。平等という言葉は、そんな風に使うものなの」

興奮気味に、先生は自説を語り始めました。けれど、ピントが少し外れてきてしまいました。このままでは、終日、芸術論が展開されてしまいそうです。話をピアニストに戻さなくてはなりません。

「つまり、ピアニストは上手にピアノが弾けるようになる可能性があったけれど、しょせんそれだけのものだということですか」

「あまりにも身も蓋もない言い方だけれど、結論を言えばそういうことよ。問題は、ピア

ニストが自らの喜怒哀楽を、ピアノで表現したいと思ったことなの。でも、喜怒哀楽は表現のベースとなる暗黒とは違うのよ。さっきの話に戻るようだけれど、これは大事なことなの。能力といったり、暗黒といったりしているけれど、それは表現の動機のようなもので、能力がある人には分かるの。そして、能力がない人でも、喜怒哀楽で感動することはできる。ピアニストは、生まれつき持っていないものを、喜怒哀楽に置き換えて理解したのね。普通の人の発想でしょう。医者になってくれて、本当によかった。そうそう、確か、ピアニストが最後の発表会で弾いた曲を録音したカセットがあったはずよ。口で説明するより音楽を聴いた方が早いわ」

一人でうなずきながら立ち上がった先生が、壁に造り付けた書棚の奥から黒いカセットテープを取り出してきました。指先で埃を払い、ラベルを読みます。

「これは、午後の部の始めね。ちょうどピアニストのショパンから入っているわ。さあ、聴いてみましょう」

先生は、棚の中央に置いてあるラジカセに無造作にテープをセットしました。音楽家の持ち物とは思えない、東南アジア製のちっぽけな機械です。思わず苦笑すると、先生がスイッチを入れました。とたんにスケルツォ第二番変ロ短調の冒頭の音が耳に飛び込んできました。思った以上に録音がよく、会場の雑音も混じりますが、曲が生き生きと聴き取れます。

透き通った美しい音色でした。健康的で癖がない、弾く人の人柄をしのばせるような調べです。ピアニストの穏やかな心根が胸の底まで染み込んできました。しかし、少しもスリリングではありません。

「心が落ち着く、きれいな調べだけれど、それだけでしょう。けして癒されるわけではないわ」

先生が僕の感想を代弁して、批評しました。おまけに曲の途中でテープを止めてしまいます。

「最後まで聴いても同じなのよ。素晴らしく繊細で、努力の後も分かるけど、聴いていてつらくなるの。人を表現に駆り立てる魔性と縁がなかったのね。ピアノと同じように生真面目で純真な子だったから、かわいそうよ。それでいて傷つきやすいんだもの、放っておけなくなるわ。ずいぶん悩んでいた様子だったけれど、頭脳を生かして医者になれてよかったと思う。あなたもピアニストくらいの年齢なんだから、気を付けなくちゃだめよ」

教育者が本業になってしまった先生が、本領を発揮しました。当時のピアニストは僕よ

り三歳も年上です。けれど、初めて聴いたピアニストのピアノは、僕が羨ましくなるほど牧歌的でおおらかな調べでした。たとえピアニストが悩みきっていたとしても、発せられたピアノの音は、聴く者の心を温かく抱き留めてくれるのでしょう。

心の傷が癒えていなかったMは、その音色に惹かれたに相違ありません。当然ピアニストにとって、Mは初めての女性です。僕と比べ、のどかとさえ思える性の出会いに嫉妬を感じました。しかし、ピアニストが奏でる純真な調べにも関わらず、熱い官能の炎が蔵屋敷を焼き尽くしたのです。少年ピアニストの、さわやかなイメージを抱いて帰るわけにはいきません。

次は、性に戸惑うピアニストを引きずり出す番です。

席に戻った先生の目をじっと見つめました。先生も訝しそうに見つめ返します。

「先生は、ピアニストと仲のよかった新聞社の女性を覚えてますか。Mという名で、ピアノ教室の広告を取りに来たはずです」

問い掛けが終わる前に、先生が露骨に眉をひそめました。やはり先生は正直です。嫌な記憶でも、忘れた振りができませんでした。

「覚えているわ。図々しい広告取りの女でしょう。いくら断っても、しつこく訪ねて来た。最後には、断ってばかりいると地位と名誉に傷が付くと、脅しまがいのことを言ったのよ。たかが五千円の広告よ。根負けして了承したら図に乗って、発表会のプログラムの製作まで請け負っていったわ。Mはハイエナのような女よ。けれど、ピアニストと仲がよかったなんて、初耳だわ」

上品な振る舞いが一転し、怒りにまかせて過激な言葉を口にした先生は、かろうじて弟子のピアニストのことでは白を切りました。けれど、頬が赤く染まっています。どう見ても怒りの色ではありません。思い出した事実が恥ずかしくて仕方ないのでしょう。待っていたとばかりに、僕は切り込みます。

「そのハイエナのような女とピアニストが、先生のレッスン室でデートをしていたという噂を聞きました」

聞いている先生の顔が青くなり、続いて真っ赤に染まりました。当時の噂を口にする僕を疑う気持ちなど、すっかり無くしています。まるで、二十七年前にタイムスリップしてしまったみたいです。

「あれはデートじゃないわ。レイプよ。かわいそうに、ピアニストはMという三十女に犯されたのよ。私は一部始終を見ていたのよ」

叫ぶように言って、先生は口をつぐみました。小さな肩が震えています。二十七歳だったMも三十女にされてしまいました。でも、間違いを正す気はありません。最後まで話させるのが先決です。

「先生がご覧になったことを話してください。どうぞ、ありのままを聞かせてください」

僕の言葉に先生が小さくうなずきました。幾分冷静さを取り戻したようですが、妙に高ぶった声で先を続けます。

「あれは発表会を控えた冬のことだわ。ピアニストがレッスン室でスケルツォを練習していたの。彼の家にはヴェーゼンドルファーのアップライトがあったけど、フルコンで弾きたいと言って学校の帰りによく来ていたのよ。私は奥の事務室で確定申告の書類を作っていた。テンポが狂ってきたのでおかしいなと思っていたら、大きく音を外したの。それっきり反復練習もしないので、のぞき窓の所まで行ってレッスン室をのぞいたのよ。びっくりしたわ。開いた口がふさがらないというのは、こういうことかと思った。見たくないのに一部始終が見えてしまうの。恐ろしかったわ」

ついさっき見た情景を思い出したように、先生は口をつぐんで眉をひそめました。目撃した事態を、心底怖れているように見えます。ここで黙り込まれてしまっては元の木阿弥です。

「ピアニストがレイプされたのですね」

励ますように問い掛けると、先生が小さく溜息をつきました。

「そう、ピアノの前にピアニストが立っていたわ。すぐ前にMがひざまづいているのよ。私が声を掛けようとしたとき、Mがピアニストのズボンを踵まで下ろしたの。かわいそうに、ピアニストはスッポンポンで震えていたわ。でも、ペニスは大きく勃起していた。Mは両手でペニスを支え、口に含んだわ。三回ほどペニスをなぶられただけで、ピアニストは泣きそうな顔になった。ペニスを放したMがスカートを捲り上げたわ。驚いたことに陰毛が密生した股間が現れたの。そのままピアニストを押し倒して、上からのし掛かっていったわ。Mが腰を使う間もなくピアニストは射精してしまった。涙をぼろぼろ流して泣いていたわ。Mはひどい女だ。純真なピアニストを無理矢理犯したのよ。ショーツも穿かないでいたくらいだから計画的よ。確信犯だわ。私は絶対Mを許さない」

話し終わった先生は、目を真っ赤にして肩を震わせています。ピアニストに抱いていた感情が目に見えるようです。けれど、先生が目撃した事実は、Mに聞いた話とずいぶん違っていました。

Ｍは素晴らしいショパンに感動し、思わずピアニストにキスしてしまったと、出会いの瑞々しさを語ったのです。しかし、どちらにしろ三十年近く昔のことです。今は、先生の心に焼き付いている場面を尊重し、先生の目に映った往時の印象を聞き出すことが肝心です。

僕は話を合わせ、先生の心証へ踏み込んで行くことにしました。

「先生のおっしゃることは分かりますが、僕には、ピアニストも無防備すぎたように思えます」

努めて冷静な声で、感想を口にしました。先生の肩が怒りに震えます。

「何を言うの。無防備なくらい無垢なところが、ピアニストのいいところじゃない。人をほっとさせるものがあるから、そこにＭがつけ込んだのよ。悪人はＭで、ピアニストは被害者だわ」

鋭い声で断定しました。べそをかいたピアニストを背後に隠しているように見えます。僕は経験したことがないのですが、母性愛という言葉が頭に浮かびました。また、これは経験があるのですが、虐めという言葉も浮かんできました。とにかく、ピアニストの人格の中には、女の攻撃を許してしまう部分があるようです。それを弱さと呼ぶのか、優しさと呼ぶのかは分かりません。先生の意見を聞いてみましょう。

「先生はピアニストを、男としてどう見ていたのでしょう」

問い掛けたとたんに、先生が眉を吊り上げました。

「失礼ね。ピアニストは私の弟子よ。男として見たことなんかないわ」

「男として、魅力がなかったということですね」

突き放した僕の口調が先生のガードを破ったようです。小さく息を吸って僕の目を見ました。

「そういう意味じゃないわ。ピアニストは頼りないくらい純真だったけれど、けして弱々しくなかった。いつも胸襟を開いてくれていたのよ。飛び込んでいけば、しっかり抱き留めてくれる。それが女にとって最大の魅力よ。ピアニストは魅力的だったわ」

反論する声が妙に艶めいて聞こえました。Ｍを嫌悪する理由も分かります。きっと先生は、最大の魅力に向かって飛び込んでいく勇気が欠けていたのです。

ことのついでに、先生という女性が見た歯医者さんのことも尋ねてみたくなりました。

「よく分かりました。確かに、ピアニストは犯されたようです。きっと魅力的すぎたのかも知れませんね。お父さんの歯医者さんとは似ていないのですか」

急に転換した問いに、先生は当たり前のようにうなずきました。ほっとした気持ちが伝わってきます。

「ええ、歯医者さんは教室の父母会にも積極的でした。無欲で率直な、頼もしい人です。ピアニストとよく似ているけれど、正反対なところもありましたね。さっき言った魅力にたとえれば、歯医者さんは積極的に押し包んでくれるタイプね。抱き留めてくれるピアニストと、押し包んでくれる歯医者さん。魅力的な親子だわ。今になって思い出しても、羨ましくなります」

語尾がしんみりと聞こえました。二十七年もの時間を感じさせないリアルな答えに、僕はつい感動してしまいました。

蔵屋敷に引き寄せられたMは、三井先生が指摘した二つの魅力に挟まれ、ぬるい温泉に浸かるようにして、自らの傷を癒したのでしょう。進路の岐路に立っていたピアニストが求愛を拒絶されてしまったことも、タイミングが悪かっただけのような気がしました。

Mはすでに、自らの責任と人格で、大きく広がった世界と対峙していく予兆を感じ取っていたのでしょう。ピアニストの純粋な愛に抱き留められて過ごす喜びを、自ら拒絶したに相違ありません。将来に備える心持ちの差が、経験の質量の差によって決まってしまったのです。ささいな違いかも知れませんが、運命的なものを感じさせます。二人の行く道は、完全に分かれてしまったのです。

僕の目から涙が溢れました。

「あなたが泣かなくていいのよ。久しぶりにピアニストを思い出してうれしかったわ。ずっと便りがないけれど、もう結婚して、子供がいるのでしょうね。近況が知りたいわ。今度は、あなたが話してくれる番よ」

先生が僕の目を睨み付けるようにして催促しました。不覚の涙につけ込まれてしまったようです。

慌てて目を拭って立ち上がりました。

三井先生は、死刑囚として獄中で自殺したピアニストの末路を知らなかったのです。音楽に明け暮れて過ごす充実した日々が、先生を世俗から遠ざけていたのでしょう。七十歳近くなる生涯のすべてを、音楽というひとすじの道に集中して生きた態度がまぶしく見えます。「Mの物語」の世界に比べ、羨ましくもありました。けれど、いまさら先生に、過酷な現実と対面してもらう必要はありません。僕は恐縮した風を装って身を縮めました。

「すみません。貴重なお話に夢中になって、次の約束に遅れてしまいそうです。必ずまた

お邪魔しますから、今日は許してください」

緊張した声で詫びを言って、最敬礼しました。ゆっくり顔を上げると、立ち上がった先生が微笑んでいます。年相応の、余裕に溢れた表情が戻っていました。

「気にしなくていいのよ。私は、若い人のお役に立てれば、それで十分。毎日、そうして暮らしているの。私の見たところ、あなたはピアニストより筋がよさそうよ。どう、今からでも遅くないわ。私について、ピアノを弾いてみない」

突然の申し出に、僕は返事に窮してしまい、どぎまぎして玄関に向かいました。背中に先生の笑い声が降ってきます。天才が宿る先生の言葉に間違いはありません。僕がピアノを練習すれば、きっと最高のピアニストになれると確信しました。

マンションから駅に続く道を、霧雨に濡れながら歩きました。ことのほか冷たい雨です。でも、僕の心の底には温かいものが残っています。今回の旅には善意が満ちていたようです。華やいだMの気持ちが伝わってきます。ピアニストたちを置き去りにして去ったMが、少しばかり憎らしく感じられました。

次は、鉱山の町を訪ねます。

僕の祖母が住む町です。けれど、まだ会うつもりはありません。当時の祖母は祖父と離婚して都会にいたのです。そして、僕の父の修太は、少年ピアニストと同じように、祖父と二人でMと一緒に暮らしたのです。

つらい旅になる予感がします。

３　鉱山の町

暗い空から、絶え間なく雨が降りしきっています。

白い傘を伝った滴が肩に落ち、薄いサマーセーターに染み込みます。梅雨の終わりの雨は温気をはらみ、粘着質の微粒子となって肌にへばりついてくるようです。時刻は正午を回ったところです。僕は傘を上げて、雨脚に煙る水瀬川の対岸を見つめました。

廃墟となった精錬所の全貌は、視界に入りきりません。

リキュールの瓶のような、滑稽な形の煙突の上を白い霧が流れていきます。荒廃した雰囲気は漂ってきますが、鉱山の町の負の遺産である精錬所は、どことなくユーモラスにも見えます。この町で生まれ育った父の修太も、祖母のナースも、環境保護を訴えた祖父の陶芸屋でさえ、心底怒りを持って眺めた風景であるとは思えません。僕の身体の中にも、そんな父祖の血が流れているのでしょう。

身構えてやって来た僕は、裏切られたような気分になってしまいました。しかし、Ｍは違いました。同じ精錬所の廃墟を目にしたＭは、煙害で禿げ山にされた山塊を背にして横たわる廃墟に、我が国の公害の原点が発する、邪悪な意志を感じ取ったと話してくれたのです。

Ｍが鉱山の町を訪れたのは、二十五年前の早春でした。ピアニストに別れを告げた翌年のことです。水瀬川の下流にある市と鉱山の町は、車で約一時間三十分ほどの距離です。

市の広告会社が請け負った、町の観光パンフレットの製作担当者になったＭは、編集方針を決めるために鉱山の町に向かいました。寒風の中を、スポーツカーをオープンにして、颯爽と町役場を訪れます。役場の観光課に勤める村木さんの案内で、Ｍは初めて精錬所の廃墟と対面しました。

村木さんの恩師である、チェロを弾く住職の寺に招じられたＭは、そこで祖父の陶芸屋と出会うのです。

傲岸不遜な陶芸屋の態度は、Ｍの自負心を激しく刺激したそうです。陶芸屋は十年前にナースと離婚し、小学校六年生の修太と二人で暮らしていました。陶芸屋の性の渇きを見て取ったＭはその夜、二十九歳の肉体を武器にして陶芸屋を誘惑すべくアトリエに押し入ります。

積極的に官能を追うMの態度が、陶芸屋の秘められた性に火を点けました。性の嵐が吹き荒れた後で、Mは幼い修太に関心を寄せます。官能を基盤にした三人の暮らしは、半年間も続きました。その間Mは、陶芸屋一家の住む元山沢を産業廃棄物の処理場にする計画に反対して行動することになります。

計画企業の手先である産廃屋と、その妹のカンナの強引な立ち退き工作のため、半年後の廃校が決まっている元山沢の分校に通う修太のたった二人の同級生、祐子と光男が廃坑の中に拉致されます。闇に閉じ込められた冷たい坑道の奥で、Mは産廃屋たちと生死をかけた戦いを演じました。

Mとの死闘の末、闇の底で死を迎えた産廃屋とカンナの遺体は、町の助役の提言で、陶芸屋の登窯で跡形もなく焼かれてしまいます。

Mはこの事件を契機にして、自らの責任と人格に基づき、自由に生きていく道を選び取ったのです。

鉱山の町で暮らした短い間に、Mは大勢の人たちと出会いました。数々の対人関係が入り乱れ、織りなしていく世界の中に入り込んだとき、初めて自分自身の座標が見えたと言っていました。それまでのMは、向かい合った一人と形作る関係の中で生きていました。鉱山の町は、Mに社会と立ち向かわせてくれた町です。

今や住む者のない元山沢に集い会った人たちはきっと、Mが歩んだ道に強い影響を投げ掛けたはずです。とりわけ、修太、祐子、光男の三人の子供たちは、Mに重い責任を負わせました。

その鉱山の町の案内人になったのが、役場の村木さんでした。僕もMのひそみにならい、廃寺になった山門横にポツンと残る電話ボックスから、役場に電話をかけてみました。

五十歳台の半ばになった村木さんは、総務課長の要職に付いているそうです。職名を告げると、交換手の声が緊張したように硬くなりました。

「村木です」

しばらくして、落ち着いた低い声が受話器を当てた耳に響きました。

「お忙しいところをすみません。僕は市でMと暮らしていた者で、進太と言います」

「えっ、M、Mと暮らしているって。ずいぶんかわいい声じゃないか。悪いけど、Mと代わってくれないか。」

最後まで僕に話させずに、村木さんがさえぎりました。電話に出たときと違った、若々

しい声が弾んでいます。

「いえ、僕はMの養子で陶芸屋の孫です。進太と言います。Mがいなくなってしまったので、鉱山の町にいたころの様子をお聞きして、捜し出す手掛かりにしたいんです」

村木さんの期待を裏切るようで気が引けましたが、急いで事情を告げました。

「へえ、先輩の孫じゃあ、修太の息子かい。懐かしいな。市から電話してるのか。祐子は元気にしてるかい。いつでもいいから、こっちに来いよ。何でも話してやる。そうか、Mはいなくなってしまったのか。でも、きっと、毎度のことなんだろうよ。なあ、進太。ばあさんのナースは、今じゃ町立病院の婦長さんだ。帰って来いよ」

僕の立場を確認した後、村木さんはオートマチックに言葉を繰り出してきました。Mの失踪にも動じた風がありません。不可思議な信頼感が伝わってきます。声の調子は家族のようです。あげくの果てに、僕の帰郷まで促しました。

忘れられないMのにおいが、受話器から漂ってくるようです。

「じつは僕、精錬所が見えるお寺の前にいるんです。これからお邪魔して構いませんか」

「えっ、恩師の寺の前か。そこは、最初にMを連れていったところだ。よし、すぐ行くから、電話ボックスの中で待ってるんだ。十五分で着く」

強引な答えが返ってきました。有無を言わさない響きがあります。しかし、温かさの溢れた、高揚した声です。つい、冷やかしたくなってしまいました。

「お仕事はいいのですか。助役さんに叱られますよ」

「ハハッハハハ、Mから何を聞かされたか知らないが、助役さんは、もう寝たきりで、市の特別養護老人ホームに入所しているし、俺がいなくても役場の仕事は進むんだ。心配は要らないよ」

楽しそうな笑い声と共に電話が切れました。僕に早く会いたいという、村木さんの熱い思いが痛いほど伝わってきました。なんとなく尻のあたりがむず痒く、鉱山の町に来たことを後悔したくなります。僕ばかりではなく、これから話を聞く対象のMさえも、この町では自由でいられない予感がしました。しかし、待つほどもなく、白いクラウンが水しぶきを蹴散らして電話ボックスの前に止まりました。素早く動くワイパーの向こうに、満面に笑みを浮かべた丸顔が見えます。少しも警戒心のない無邪気な笑顔でした。とても、総務課長の要職にある人とは思えません。僕はあっけに取られ、不似合いな車に乗った村木さんを見つめてしまいました。

「進太、早く乗れよ」

助手席の窓が下り、かん高い声が響きました。

僕は背を突かれたように電話ボックスを飛び出し、クラウンのゆったりしたシートに座りました。オートエアコンのきいた車内は快適な環境です。村木さんが身体を横にして、まじまじと僕を見つめます。

「ほう、修太よりよっぽどいい男だ。背も高いし、顔もいい。ずいぶんMにかわいがられたんだろうな」

はしゃいだ声で感想を口にしました。語尾には、嫉妬の気持ちがあらわになっています。僕は思わず吹き出してしまいました。

「かわいがられたといっても、Mは僕の実母より十七歳も年上ですよ。昔なら、祖母と呼んでも不思議はない」

答えを聞いた村木さんの頬が赤く染まりました。年齢を実感して恥ずかしくなったのでしょう。でも、村木さんにとってMは、今でも二十九歳の若さを保っているに違いありません。村木さんが幼いのでなく、過ぎ去っていった時間が残酷なのです。

しんみりとした空気が車内に漂ってしまいました。僕は大きく息を吸い込み、元気を奮い起こして聞き取りを始めます。

「Mは、鉱山の町で多くの人に出会ったと言っていました。村木さんや和尚さん、陶芸屋に緑化屋さん、分校の先生、助役さん、修太、祐子、光男の三人の子供たち、死んでしまった産廃屋と妹のカンナ、そして多くの住民の皆さん。でも、現在の鉱山の町には、村木さんしかいないのですね。祖母のナースは、この町で暮らしたMを知りません。Mの記憶を聞かせてくれるのは一人きりです」

改めて現実を実感して、僕は口をつぐんでしまいました。運転席に座る村木さんの横顔をうかがってみます。村木さんはハンドルに両手を当てたまま、黙って前を見つめています。薄くなった頭の向こうに、雨に煙る精錬所の廃墟がかすんで見えました。

「いや、そんなことはない。Mの記憶は、この土地の至る所に残っているよ。人の数など問題じゃない。Mが去ってしまったことが問題なんだ。進太だって、Mがいなくなってしまったから、ここを訪ねてきたんじゃないか。ただの話なら、祐子にだって聞けるさ」

突然、村木さんが荒々しい口調で断定しました。沈黙が落ちます。二十五年間に渡るMの不在が、車内を埋め尽くしそうです。無気力に生きる祐子の姿が脳裏を掠めました。鉱山の町の孤独が、僕の心に伝わってきます。

村木さんが横を向きました。対岸に横たわる精錬所の廃墟を見つめて言葉を落としまし

た。

「たとえば、あの精錬所だ。Mが先輩の陶芸屋の家で暮らし初めて一か月が過ぎた、穏やかな四月の夜のことだ。ここから見える構内の桜の木に、Mは素っ裸で後ろ手に緊縛されて吊されていた。ちょうど花が満開で、妖しいくらい美しかった。桜が美しいというより、花吹雪になぶられる裸身が、凄惨な美をかもし出していたんだ。そこは花見コンサートの会場だった。俺はここから双眼鏡で見て、カメラを片手に走り出したんだ。恩師や町医者の奥さんたちで編成した、弦楽五重奏団が奏でるモーツァルトの調べが今も聞こえる。あの光景も音楽も、この精錬所の廃墟や水瀬川に封じ込められているんだ。Mの記憶はあらゆる所にある。昔、Mを案内したように、今日は進太を案内してやる。Mから登場人物の名を、あれほど聞いているんだ。元山沢を見て回れば、俺の記憶など要らないことが、進太にもきっと分かる。Mは今でも、相変わらずここにいるんだ。さあ、行こう」

話し終えた村木さんの態度が、急に生き生きとしてきます。僕まで、Mに会えるような気分になってきました。

「さあ、行こう」

大きく掛け声をかけ、村木さんがクラウンを発進させました。そぼ降る雨の中を、僕たちは元山沢へ向かいます。

水瀬川を渡り、精錬所の大きな門を過ぎると、道は山の中に入っていきます。峠を越えてしばらく走ると、ちっぽけな集落が見えてきました。かつて殷賑を極めた元山鉱を支えた、住民たちの暮らしの跡です。町にも鉱山会社にも、廃屋を取り壊すお金はありません。半世紀を越えた栄華の跡は、自然に包まれて立ち腐れていくだけです。廃校になった小学校の分校さえ、この二十五年間を子供の声を聞かずに過ごしてきたのです。光男の家があり、祐子の住んだ官舎があり、父の修太が生まれ育ったアトリエもありました。

僕は雨に濡れた車窓から、じっと風景を見ていきます。村木さんは、何一つ記憶を語ろうとしません。目に映る事物や建築の固有名詞をぶっきらぼうに告げるだけです。しかし、それで十分です。「Mの物語」の出演者たちは、荒みきった風景の中で、あのときの動きを、まざまざと僕に見せてくれるのです。鮮明な記憶は土地に染み通り、土地と共に当時の時間を呼吸していました。

元山沢に架かった赤錆びた吊り橋が見えてきました。渡りきった先には坑道へ続く入口の扉があります。

「あれが元山鉱の通洞坑だ。産廃屋たちは、ここで死んだ」

村木さんの素っ気ない声が響きました。声と同時に、僕の脳裏に映る光景が変わりました。見る間に雨が上がり、蝉時雨の夏景色が出現します。

通洞坑の入口から山道へ向かって、転びそうになりながら走る、幼い父の姿が見えました。坑内に残されたMのカメラを発見した父が、陶芸屋に救いを求めようと急いでいるのです。闇の通洞坑の中では、先生の折檻を受けて傷ついた祐子の尻を、Mが舌で舐めて癒しているはずです。しかし、驚いたことに、若いMも祐子も顔がありません。

往時の記憶がない僕には、知りすぎている二人の、二十六年前の顔を想像することができなかったのです。まるで仮面劇のように、異様な事件が進行するだけです。もどかしさが、心の底から喉元に込み上げてきました。

「村木さん、元山沢に棲み着いた記憶は、やはり村木さん一人のもののようです。Mに聞いた物語は生き生きと進行しますが、僕にはMも祐子も見えません。実体が見えないのです。お願いです。体験したことを、詳しく話してください」

切羽詰まった声で、僕は村木さんに頼みました。村木さんが寂しそうに笑いました。車を止めて僕の顔をのぞき込みます。目が涙目になっていました。

「進太、微妙な細部まで知ろうとしても無駄だよ。俺の身体の中に棲むMは、俺だけのものだ。元山沢で知り合った人すべてに、Mはそれぞれ固有な思いを残していった。その一つを聞いたって、全体に通じることにはならない。一人一人の思い出の集積がMの記憶なんだ。バラバラにしてしまっては、かえってMが歪むだけだよ。だから、この土地にこそ、Mの記憶があると言っているんだ」

村木さんは、歳に似合わぬ抽象的な答えをしました。僕は不満です。この鉱山の町で、初めて社会的に暮らしたMが、様々な表情を残していったことが事実であっても、僕は村木さん個人の思いが聞きたいのです。村木さんの心の中に棲むMの表情を知る必要があります。さもないと、鉱山の町のMはのっぺらぼうになってしまいます。

僕はMをまねて、性を武器にして村木さんに挑むことにしました。

「村木さんはMとセックスしなかったから、淡泊な記憶を守っていたいのと違いますか」

問い掛けは、村木さんの弱点を突いたようです。

見る間に、村木さんの頬が真っ赤に染まりました。口を尖らせ、怒りに燃える目で僕を睨み付けました。一瞬僕は、殴られるかと思いました。しかし、村木さんは力無く肩を落としてしまいます。怖かった目つきが、急にそわそわしてきました。やがて、苦渋を吐き出すようにして、言葉を口から落としました。

「そうさ、今でも俺は、Mのことをセックス・マシーンのように思っている。そのセックス・マシーンが俺の上だけ素通りしていった。俺に勇気がなかったからいけないんだ。悔いは残る。今もって俺は、M以上の女に巡り会っていない。好きになった女も、好きになってくれた女もいたが、現実と妥協をするのが嫌で、独り暮らしを通してきた。だがな、Mの記憶に縛られていたからじゃないんだ。俺がMに求めたものと、Mが俺に残していったものが違っていたことに気付いたからだ。今になって考えれば、Mが結んでくれた関係は、まんざら捨てたもんではない。Mは友達として接してくれた。いつでも、どこで会っても、Mは同じように接してくれるだろう。Mと俺は友達なんだ。なあ、進太、色眼鏡をかけてMを見るのはよせ。確かにMは異常な官能を追い求めたが、悲しさに敏感だった。Mにとって、性は重要な問題だったかも知れないが、それは一面に過ぎない。Mの持つ底知れない悲しさが、解きほぐされる場所として性を選んだのだろう。何よりMは、人の悲しさに殉じることを自らに強いた。あのエネルギッシュな活力の源泉は悲しさなんだ。そして俺は、Mの友達として、悲しさを共有したんだよ。多種多様な関係が入り乱れた中で、Mは躍動したんだ。少なくとも、鉱山の町で暮らしたMはそうだった。今の俺に友達はいないが、Mの記憶を誇らしく思っているよ」

熱のこもった声で話し終えた村木さんの目から涙がこぼれました。日本海で会った木村さんもそうでしたが、Mと知り合った男の人はよく泣きます。Mも涙腺が弱かったから、みんなに伝染したのかも知れません。とりわけ村木さんの言った友達に弱かったようです。性と官能と邪悪な意志に強かったMにとって、不思議なことの一つです。

お陰でMの表情も見えました。穏やかな顔です。その端正な顔が、時には怒り、時には泣き、時には悲しみに曇ります。一心に官能を追い求める表情は浮かび上がってきません。時として性の喜びに震える横顔がうかがえただけです。鉱山の町はMに、自立して生きる方向を指し示してくれたようです。

「よく分かりました。村木さんのおっしゃるとおり、Mを色眼鏡で見ていたかも知れません。その方が分かりやすいので、楽をしていたようです。今日は本当にありがとうございました」

僕は素直に頭を下げて村木さんに感謝しました。

「いや、俺の方がMの史跡巡りを楽しんでいたようだ。最後に元山神社に付き合ってくれよ。あの当時から廃社だったから、今では俺は、M神社と呼んでいるんだ。一緒に行こう」

村木さんは、狭い山道で強引にUターンしました。くねくねと曲がる坂道を無造作に運転して元山神社に向かいます。無人の元山沢には先行車も対向車もありません。植林の進む山並みが雨に煙っているだけです。

元山鉱の購買所の廃墟の前で、僕たちは車を降りました。神社に続く長い石段を、一つの傘に入って上っていきます。僕の女持ちの白い傘は小さくて、二人の肩の半分を冷たい雨が濡らしています。擦り寄せた肩から村木さんの温もりが伝わってきます。僕の温もりも村木さんに伝わっていると思うと、何となく安心した気分になります。この肌の温もりを追い求めていくと、官能に繋がるのでしょうか。ちょっと、違う気がします。やはり、心に開いた大きな空洞を埋めるために官能はあるのでしょう。僕にも空洞はあるのですが、まだ埋める動機が訪れません。そして、隣を歩く村木さんは、空洞を埋めることを放棄してしまったようです。それで、悲しさに耐えられるのでしょうか。僕には疑問です。僕は耐えられそうもありません。人の暮らしはいつも、悲しさでいっぱいなのです。

まだまだ続く「Mの物語」をたどる旅路を思いやると、気が重くなります。僕が知っているMが恋しくなってしまいました。

目を上げると、暗い空の中に黒い鳥居が溶け込んでいました。金属を鋳込んだ鳥居は、煙害に痛め付けられた半世紀と、風雪に耐えた半世紀の重みで、今にも倒壊してしまいそうに見えます。

「この鳥居をくぐって、裸御輿が境内に入場したんだ」

村木さんのつぶやきにうなずいて、僕は荒廃しきった境内に足を踏み入れました。

裸御輿とはよく言ったものです。二十五年前のこの神社で、手製の御輿を担いだ村木さん、緑化屋さん、陶芸屋の三人の大人も、御輿を先導した修太、祐子、光男の子供たちも素っ裸でした。そして、御輿の上にはこれも素っ裸のMが後ろ手に縛られ、足を左右に大きく開いて直立していたのです。おまけにMは無毛です。黒々とした長い髪も、股間に密生していた陰毛も、産廃屋の妹のカンナに剃り上げられてしまったのです。そのカンナと産廃屋の死体を焼き尽くした登窯で製作された、二枚の大皿が裸御輿の御神体なのです。

Mの裸身が二つの大皿を踏み締めています。足裏を通してMは、どんな悲しみを耐えていたのでしょうか。今の僕には、想像することさえできません。

「裸御輿を練り歩いている最中に、先棒を担いでいた俺がつまずいたんだ。御輿がかしいだとたんに、Mの股間から径血が流れ落ちた。どろっとした血が元山沢の大地に染みついた瞬間、自閉症の祐子が声を上げた。私はMが好き、M、バンザイと叫んだんだ。俺は感

動したね。幼い心に数々の傷を持った祐子が心を開いた。それも、同じように傷ついたMの勇気に共鳴したんだ。奇跡だった。俺は奇跡に立ち会っていると思った。俺たち全員が叫んだ。M、バンザイ、バンザイ、バンバンザイってね。それで終わりだった。その後俺は、Mに会っていない」

問わず語りに話す、村木さんの肩の震えが伝わってきました。村木さんは、Mの勇気に祐子が共鳴したと宣言しました。自閉症だった祐子が、Mバンザイと叫んだのです。その感情のボルテージの高さは、推し量ることができないほどだったに相違ありません。まさに、奇跡と呼べるものでしょう。

祐子は、鉱山の町を去った三年後に、次の物語のヒロインとなります。Mの勇気に激情した幼い祐子は十四歳の少女に成長し、市の繁華街を舞台にして光り輝くのです。でも、僕は現在の祐子を知っています。祐子はMに見捨てられたと思い込み、生ける屍のように無為な日々を送っているのです。

なぜ祐子は、Mの歩んだ道を進めなかったのでしょう。

僕は急に、祐子が気掛かりになってきました。Mに従い、Mのことを心配して暮らしてきたと思っていた口うるさい祐子が、Mを捜し出す鍵を握っているような気がしました。これまで、余りにも身近にいて気付かなかったのですが、祐子はMが生きてきた道に一歩を踏み出し、その道を断念した過去を持っているのです。突然、いなくなってしまったMと、表裏一体のような気がしました。

何よりも祐子に、思いの丈を語らせることが必要です。けれど、僕を子供扱いし、M同様に心配してくれている祐子に、どう問いただしたらよいのか、機会さえ見いだせそうにありません。でも、幸い、この鉱山の町には、ヒロインになった祐子とMを知っている祖母のナースがいます。

これまで会ったこともない肉親と会うのは気が重いのですが、これも僕の旅路の試練でしょう。祐子と対決するチャンスをつくるためにも、ナースの見た祐子とMの姿を検証する必要があります。

僕は、ナースを訪ねる決意を固めました。

傘を持つ手を上げて村木さんの横顔を見つめます。村木さんも僕を見ました。

「村木さん、申し訳ないですが、帰りに町立病院に寄ってください。せっかく来たのですから、祖母のナースに会ってから帰ります」

突然の頼みに、村木さんは右手で僕の肩を抱いて応えました。妙な力強さが、村木さんの勘違いを伝えてきましたが、もう取り返しはつきません。

「いいとも。やっと決心したか。ぜひ、会っていきなさい。Mが知ったら、きっと喜ぶ。進太の身の振り方は決まっていたんだ。遅くなったらナースの家でも、俺の家でも泊まっていけばいいさ。さっそく行こう、ずぶぬれになってしまうよ」

泊まっていくのはともかく、この分ならナースとの対面に村木さんも立ち会ってくれそうです。僕は大歓迎です。早くも、次の旅が始まりそうです。

４　クラブ・ペインクリニックの集い

町立病院は四階建てのこじんまりとした建物でした。

内科、外科、皮膚・泌尿器科、整形外科と診療科目を表示してありますが、村木さんの解説によれば、温泉療法を利用した老人向けのリハビリテーション施設が現在の売り物だそうです。病院の横手に見える大きな平屋建ての建築がその施設でした。県外からも多くの患者が訪れるということで、薄いグリーンに塗られた建物は病院本体より、よっぽど立派に見えます。

「リハビリ部門は、赤字病院の花形施設だ。ナースはそこの婦長だから忙しい。だが、病棟勤務に戻りたいとは絶対言わないよ。あの婆さんは自分の資質をよく知ってるんだ」

玄関の大きな自動ドアを通りながら声高に話す村木さんは、いかにも町幹部といった態度が溢れ出ています。受付にも寄らずに玄関ホールを突っ切り、真っ直ぐ事務長室に向かいます。仕方なく僕も従っていきましたが、ホールのベンチに座っている大勢の老人の視線が射るように僕たちに突き刺さります。この町では確かに、村木さんは権力者の一人なのです。僕は居心地の悪さに冷や汗をかきながら、事務長室に入っていきました。

「リハビリの婦長に会いたいんだが、どっちにいるかね」

大きな事務机の前のソファーに腰を下ろした村木さんが、机の主にぞんざいに声を掛けました。背広姿の初老の男が慌てて立ち上がります。

「相変わらず、課長さんはせっかちだね。今、医局に聞いてみますよ」

男は立ったまま机上の受話器を取って、ダイヤルをプッシュしました。胸の大きな名札には事務長と記してあります。事務長室なのですから当たり前ですが、僕は目を白黒させて立ちつくしていました。

「進太、早く座れよ。ここは役場と同様遠慮は要らない。だが、コーヒーも出ないぜ。もっとも、俺が経費節減で予算を削ったんだから、文句は言えない」

大声で言った村木さんが僕を手招きました。たかが六畳ほどの狭い部屋です。気恥ずかしさで頬が赤く染まってしまいましたが、村木さんの前の椅子に浅く腰をかけました。目の前の村木さんはポケットから煙草を出し、デュポンのライターでおもむろに火を点けます。ここは病院です。灰皿など、どこにもありません。そのうえ村木さんは、煙草の灰を床に落としたのです。僕は目を丸くしてしまいました。

「村木さん、病院は禁煙ですよ」

たまらず身を乗り出して注意しました。初老の事務長さんが受話器を耳に当てたまま、横目で僕たちを見つめています。

「知っているさ。でも、この病院には肺ガンを治せる医者なんていない。禁煙をさせるほど高尚な施設じゃないんだ。俺から予算をふんだくることしか考えないケチなところさ」

平然と言って、村木さんは煙草をくゆらせ続けます。権力のにおいが部屋中に立ちこめてきました。町立病院に来てからの村木さんの振る舞いは、元山沢を案内してくれていたときとまったく違ってしまいました。Mにまつわる史跡巡りに目を輝かせていた村木さんは、Mの懐かしい友達に見えたものです。けれど、目の前に見る村木さんは別人のようです。

Mは権力を嫌っていました。個性から遊離した人格を職業が人に強いるのでしょうか。職を持たない僕には理解できませんし、Mも定職を持ちませんでした。Mが抱いていた悲しみの一端に触れたような気がしました。

「課長さん、ナースは本院の婦長室にいるそうです。ここに呼びますかね」

送話口を手で覆った事務長さんが村木さんに尋ねました。

「いや、俺たちが行くよ。ナースは偉いからな」

ほんの少し目をつむってうつむいた村木さんが顔を上げ、短く答えました。目が笑っています。僕の顔を見て小さく舌打ちしました。

「リハビリの婦長は医者より権限があるんだ。患者のベッドを握っているからな。婦長室だって、施設と病院に二つもある。ドル箱施設だから威勢がいい。でもナースだって、五年前にリハビリ部門ができるまでは泣いて暮らしていたんだ。古くからある病院は上下関係が厳しい。風俗上がりの看護婦が、キャリアを積んだ病棟の婦長に楯突けるはずがない。下積みで泣いていたんだよ。だが、新しいリハビリ部門は、言ってみればサービス業だ。患者の満足と成果が優先される。経営センスが問われる部署なんだ。ナースはうまくはまった。今じゃあ、肩で風切る婦長様だ。総婦長と並んだ部屋まで手に入れてしまった。すまじきは宮仕えだよな。なあ、事務長」

唐突に事務長さんに声を掛けて、村木さんが立ち上がりました。僕に同意を求める風もありません。祖母のナースの悪口を言ってしまったと思ったのでしょう。保身の心がけは立派なものです。僕も立ち上がって事務長さんに頭を下げました。村木さんは、煙草の吸い差しを床で踏み消し、平然とドアを開けて出ていきます。僕は頬を真っ赤にして後に続

きました。どれほど村木さんが偉いか知りませんが、非常識な人と同行する恥辱がたまらなかったのです。また、世俗を知らない僕が、村木さんを不当に嫌悪しているような気もしました。難しいものです。

婦長室は三階の北隅に二室並んでありました。

リハビリと書かれたドアを村木さんが無造作に開きます。ノックもしません。村木さんの肩越しに見えた部屋は、四畳ほどしかありませんでした。

「村木さん。いくら役場の課長さんでも、入る前にはノックをしてください。ここは女性の部屋ですよ。いくら役場が金を出しているからと言って、女まで買ったわけじゃないでしょう」

低く厳しい声が響きました。目の前にある村木さんの背がビクッと震え、棒のように固くなりました。僕は痛快で仕方ありません。さすがに我が祖母だと誇りたくなります。

「大層なご挨拶で参ったな。謝りますよ。婦長さんの孫を連れてきたので、喜んでもらおうとして、慌てたんです」

言い訳を聞いた婦長さんの目が光りました。怖い顔で僕を見ました。

「孫ですって。進太なの、進太が来たのね。課長さん、あなたは早く脇に退いて進太を通してください。私は初めて会うのよ」

婦長さんが、大声で言って椅子から立ち上がりました。ドアに手をかけたままの村木さんが、慌てて部屋に入って隅に避けます。婦長さんの視線が真っ直ぐ僕の目に注がれています。僕も鋭い視線を受け止めました。とたんに温かな眼差しに変わります。何とも言えない通い合う気持ちが往復しました。僕の目が潤んできます。視線の先で、婦長さんの目から涙が落ちました。ドアから三メートルの距離に机があります。婦長さんは机の前に回り、両手を僕に差し出しました。僕は思い切って前に進みます。婦長さんから視線を外し、幾分うつむき加減に歩きました。

「進太、進太なのね」

名を二回呼んで、婦長さんが両手を僕の肩に置きました。思ったより柔らかな手の感触が、肩先から伝わってきます。

「進太、よく来てくれたわね。初めて会うのよ。顔を上げて、よく見せてちょうだい」

言われたとおりに顔を上げました。涙に濡れた婦長さんの目が見えます。喜びと悲しみがない交ぜになった大きな目でした。生真面目で献身的な情熱が顔一面に溢れています。どこか見覚えのある懐かしい表情は、とても初めて会う祖母とは思えません。きっと、M

の話してくれたナースの印象が僕の心の中に焼き付いているのでしょう。僕の目からも涙がこぼれました。

「初めまして婦長さん。進太です。でも、初めてお会いした気がしないのです。ずっと前から知っているような気がします」

「それは、祖母と孫だもの。血が繋がっているのよ」

僕の挨拶への答えは、僕が知っているナースらしくありません。急に、見知らぬ初老の女性があらわれたようで、照れくさくなってしまいました。

「いえ、養母のMから聞かされた印象と、現実の婦長さんがぴったりなので感動してしまったんです。でも、話してくれたMは、半年前に、家を出ていってしまいました」

弁解するように付け足しました。聞いている婦長さんの眉が曇りました。でも、仕方ありません。僕は肉親の血に惹かれたのではなく、「Mの物語」に出てくるナースの生の姿に出会って、改めて感動したのです。

村木さんが手を伸ばし、僕の脇腹を突きました。

「進太、お祖母さんと初めて会って、婦長さんはないだろう。もっと家族らしく喜べよ」

無愛想な僕の態度を責める、村木さんの言葉は正当です。

婦長さんの表情が一瞬輝きましたが、苦いものを飲み下すように目をつむりました。再び目を開いて僕の顔を見ます。さっぱりした献身的な表情が戻っていました。

「進太は、Mと暮らしていたのよね。それが家族というものよ。私が進太を引き取らなかったのは事実だから、家族らしくなくても仕方がない。Mの家出をいいことに、いまさら、お祖母さんと呼ばせるほど恥知らずではないつもりよ。けれど、婦長と呼ばれるには抵抗がある。私のことをMが話題にしたのなら、きっとナースと呼んだはず。進太、私をナースと呼びなさい。ここに来たのも、私に尋ねたいことがあったからでしょう。Mと出会ったころの話でしょうね。私は構わないわ。肉親としてではなく、ナースとして話してあげます」

張りのある声から誠意が伝わってきました。僕は婦長さん、いやナースに深々と頭を下げました。目尻からこぼれた涙がリノリウムの床に落ちます。

「話は決まったわ。これでもう、課長さんの務めは済みましたね。村木さん、進太を連れてきてくださって、本当にありがとうございました。これから進太とプライベートな話をするので、どうぞ席をお外しください」

ナースが村木さんに向かって慇懃に声を掛けました。村木さんは泡を食ったように、目

を白黒させています。救いを求めるように僕の顔を見ました。僕は知らない振りで頭を下げ、視線を足下に落としてしまいました。

「先輩の陶芸屋と同様、この家族はどことなく冷たいんだよな。まあ、俺はつんぼ桟敷には慣れているから、陽子さんの好きにすればいいさ。進太、俺は事務長室にいるから、話が済んだら寄ってくれ。駅まで送るよ」

部屋を出ていく村木さんが、捨てぜりふのように言いました。けれど、少しも権力的ではありません。先輩の妻だったナースの名を口にした声は、意外に若々しく響きました。ナースの口元に苦笑が浮かびます。大きな音をたててドアが閉まりました。僕の表情を見て、ナースが大きくうなずきました。

「進太の目には、村木さんが横柄に見えたかも知れないね。私でも、しゃらくさいと思う。でも、あの人は鉱山の町から出たことがないのよ。このちっぽけな町と運命を共にするのだから、かわいそうだ。その一点で町民は彼の振る舞いを許しているの。同じ立場の人たちが自分の生涯を信託しているわけ。町に未来がない証拠だけれど、だれもが明るい将来に向かって歩いていけるわけじゃない。縋り付くことができる現在が大切なのよ。その意味で言えば、Mと出会った二十年前の私は、村木さんより、もっと尊大に見えたかも知れない。あのころの私は、生死の境を彷徨っている人のすぐ隣にいたの。今では少し離れたところに身を置けるけど、やはり同じ地平に立っているわ。Mのように高みから見下ろしてはいない。物見遊山の観光客はお断りよ。だから、Mと私は、生き方も考え方もまったく違うの。進太には、まずそのことを知っておいて欲しいの」

ナースは真っ向から本題に切り込んできました。さすがにベテランの医療技術者です。無駄がなく、遠慮もありません。念を押された僕の方が、問題の整理に追いつけません。慌ててうなずいてから首を左右に振り、たまらずMを弁護してしまいました。

「ナースも村木さんも、常に現場にいることは分かります。でも、だからといって、Mを観光客と断じるのには抵抗があります。Mは自分の責任と人格で現場に入り、皆さんと同じ地平で行動したじゃないですか」

ナースを非難する口調になっていました。しかし、ナースは動じません。

「現場に入り込んで行動する根拠のことを、私は言っているの。Mの場合は、行きずりの人が勝手な価値観を現場に押し付け、混乱を楽しんでいたとしか言えないわ」

はっきり、断言しました。

話は始まったばかりなのに、もう終幕を迎えたような雰囲気です。焦りと悔しさが込み

上げてきます。泣きべそをかいている自分の顔が脳裏に浮かびました。

ナースの口許に苦笑が浮かびます。

「せっかく進太と話し合えるのに、結論を急ぐことはないわね。さあ、この椅子に座りなさい。ゆっくり話し合いましょう」

優しい声で言って、ナースが折り畳みのパイプ椅子を広げてくれました。緩急自在の対応に翻弄されてしまいそうです。

大きく息を吸って、僕は勧められた椅子に座りました。しばらくうつむいて「Ｍの物語」を思い返してみます。

Ｍとナースが出会ったのは二十年前。Ｍが鉱山の町を立ち去ってから五年後のことでした。場所は、市の歓楽街にあるスナックのサロン・ペインです。

それまでナースは、都会の病院で看護婦をしていたのです。終末医療の看護が得意でした。それも、ナース独特の看護法です。末期ガンの患者の全身を襲う激痛を、自らの性で癒そうというものです。患者に残されたはかない生が、今生の思いを込めてナースの肉体を求め、官能を追います。極まりに向かう官能がガンによる苦痛を忘れさせ、死の恐怖を癒し、生への希望をかき立てるのです。このナースの看護の理解者が、医師の卵のピアニストでした。ピアニストは都会の医大で学びながら、ナースの勤める個人病院で、夜勤医のアルバイトをしていたのです。

二人が勤める病院に、心中未遂事件で骨折したＳＭショーの女優が入院します。この女優が、現在のサロン・ペインの女店主のチーフです。病室で付き添っていたスキンヘッドのママとチーフは、偶然ナースの体当たりの看護を目撃して、感激してしまいます。ピアニストとママは肉体の苦痛を癒す看護を、精神の苦悩を癒す事業に拡大することを夢想しました。チーフの演じるＳＭと、ナースの看護体験を利用した会員制クラブの設立を決意します。

ママとチーフ、ナースの三人は市を訪れ、ピアニストの父の歯科医の資金援助を得て、会員制クラブ・ペインクリニックを開設しました。そのクラブの階下に開店したのがサロン・ペインでした。

夕刊紙の記者をしていたＭは、にわかバーテンダーのチーフがつくるマティニが気に入って店を訪れるようになったのです。六年振りに、Ｍがピアニストと再会したのもこの店でした。

「Mは、サロン・ペインの客に過ぎなかったわ。たまたまピアニストと知り合いだったから、下半身の不随と性的不能の障害を抱えていたバイクの治療に立ち会っただけよ。どう見ても、興味本位の傍観者としか言えない態度でね。それが、鉱山の町で面倒を見た祐子が、治療の協力者になったら急変した。クラブ・ペインクリニックを目の敵にしたのよ。自分本位に行動していた証拠だわ。最後は非を認めて祐子に鞭打たれることを受容したけれど、その時はもう、一切が終わっていた。ママとピアニストが夢を捨ててしまっていたの。Mが巻き起こした混乱の結果よ」

会話の先を促すように、ナースがまくし立ててきました。

僕は、力なく顔を上げてナースを見ました。小さくうなずいてから、またうつむいてしまいました。ナースの言ったことは、大筋で事実と相違ありません。急いで祐子とバイクの関係に思いを馳せます。

バイクは、ピアニストと天田さんの高校時代の同級生で、抜群の成績を誇っていた優等生でした。学校は、市の進学校として有名な私立の命門学院です。オートバイ好きをからかわれて、バイクとあだ名を付けられましたが、東大進学まではハンドルを握らないと決心していました。

大学進学を控えた三年生の夏休みに、命門学院高等部の伝統行事だった二十四時間補習をサボり、三人はピアニストの家の蔵屋敷に集まりました。男子生徒の憧れの的だった映子も一緒です。ただし、天田とピアニスト、映子の三人は中等部からの同窓で、バイク一人が高等部からの入学でした。映子に焦がれていたバイクは天田の挑発に乗って酒を飲み、コンビニエンス・ストアの駐車場からオートバイを盗み出します。

映子を誘い、念願の夜のライディングを二人で楽しんでいたバイクは激突事故を起こしてしまいます。一瞬のうちに映子は死亡し、バイクは重傷を負い、下半身不随の後遺症が残りました。

事故から五年が過ぎ、車椅子に乗った失意の生活を続けるバイクは、命門学院中等部に通う三年生の祐子と知り合います。二人は近所同士でした。バイクの家の前にある、イベント会場の煉瓦蔵と向かい合って建つマンションの最上階が、祐子の住居でした。

祐子は、父の仕事の都合で市へ転居してから五年になります。鉱山の町でMの勇気に激情した祐子も、日々の倦怠を持て余しながら思春期を迎えていました。せっかく再会した

Ｍも、夕刊紙記者に甘んじているような態度がなじめません。五年前の高揚した自分を、なんとかして取り戻したいと焦る毎日です。

祐子に映子の面影を見出したバイクと、バイクに生きる目的を見出そうとする祐子は、互いに好意を抱きます。プラトニックラブという言葉がぴったりでした。

都会の大学を卒業し、福祉事務所のケースワーカーとして市に戻ってきた天田は、クラブ・ペインクリニックにバイクを誘い出します。

ピアニストとママ、ナースとチーフの四人が運営する、苦悩を取り除く性の実験室に、バイクは投げ込まれたのです。そこでバイクは、ＳＭの刺激で性的不能を回復することに希望を見出してしまいます。祐子を抱き締めたいという欲望が、性の回復の希望と短絡したのです。そして何よりも、無為に流されていく自分を変える道に踏み出そうと決意しました。しかし、クラブ・ペインクリニックの治療台で、素っ裸になってチーフとＳＭに興じる無惨な姿を、Ｍと祐子に見られてしまいます。

祐子への愛と、性の欲望を巡って、バイクの苦悶は深まっていきます。その苦悶の淵に灯ったまま揺れる欲望の火を、祐子は見逃しませんでした。

絶望から立ち上がろうとするバイクの意志を、祐子は全身で受容することを決意しました。蒸し暑い夏の夜のことです。祐子はＭの反対を退け、バイクの家を訪ねます。異臭の漂うバイクの部屋に、祐子は十四歳の裸身をさらけ出しました。

後ろ手に緊縛された祐子が、必死になってバイクの不自由な肉体に挑みます。官能に彩られた気迫が、失われたバイクの性を甦らせようとして真っ赤に燃え上がります。歓喜と戸惑いを抱いて屹立したペニスを、祐子は進んで体内に迎え入れました。バイクと一体になれたという喜びが、バイクと共に変わり、一緒に生きていく自信を祐子に与えたのです。純愛が官能に昇華した瞬間でした。

精神と肉体の苦悩が性によって癒され、弱々しかった二人は、新しい祐子とバイクに生まれ変われるはずでした。

「ナースの看護法のとおり、祐子とバイクは官能の喜びによって新たな生を生きる希望が持てたのだと思います」

つぶやくように、僕は答えていました。

性の高まりに震える、幼い祐子の裸身が目に見えるようです。でも表情は、神経質で口うるさい今の祐子以外に浮かびません。思わず苦笑してしまいました。

ナースは黙ってうなずきます。僕は言葉を続けました。

「でも、お祖母さんと二人暮らしだったバイクは、結局、彼女の死によって祐子と引き離され、施設で暮らす道しか残されませんでした。容赦ない現実が、二人の希望を簡単に摘み取ってしまったのです。バイクは祐子の見ている前で、高等部の屋上から身を投げて自殺してしまいます。せっかく開いた扉が、見る間に閉ざされたことに絶望したのかも知れません。天国の映子と性を結ぶことを祐子に書き残し、これまでの誠意の証として、千切れたペニスを祐子に贈りました。残酷な話です。僕には耐えられません。やはり、Mの言うように、何かが間違っていたとしか考えられないのです」

祐子とバイクに対する痛ましさが込み上げてきて、声が詰まってしまいました。ナースが冷たい視線を床に落としました。

「残酷と言うより、滑稽な話ね。すべてがうまくいっていたのに、バイクのお祖母さんの死で台無しになってしまった。事故みたいなものだわ」

つぶやいた言葉の向こうに、微かな悔恨のにおいがしました。僕は、再び口を開きます。

「そうでしょうか。僕は納得できません。バイクが自殺した高等部の校庭で、祐子の傍らにいて一切を目撃したMは、二人の復讐のためにペイン・クリニックへ向かいましたね。欺瞞に満ちた性の仕組みが許せなかったと、Mは話してくれました。祐子とバイクが、人為的な性の仕組みに強いられて、無理に官能を求めたと理解したのでしょう。性を選ばず、愛を育む道があったと悔やんでいました。その思いは僕にも理解できます。サロン・ペインに殴り込んで、暴力的に店を破損したMの行為は直情に過ぎますが、障害者と少女の淡い情愛を破壊された怒りは納得できます。やはり、精神的な苦悩や無為な生活を、性が癒すという考えは虚しかったのではないでしょうか。バイクは死に、祐子は今もって無為に生きているように見えます。僕はナースに、Mのことより、とりわけ二人の悲劇の原因を聞きたいと思っていました」

気掛かりだったことを言えて、ほっとしました。

じっとナースの目を見つめます。けれどナースは、何事でもないように答え始めました。

「道が二つに分かれたということよ。祐子とバイクが性によって生きる希望を見出したことが事実なの」

尋ねる前に答えが用意されていたようで、僕はうろたえてしまいます。耳に神経を集中させて次の言葉を待ちました。

「心身に苦悩や苦痛を持った者は、楽観的に無視するか、悲観的に落ち込むかのどちらか

なの。私は悲観的な者を相手にしてきた。祐子とバイクはいくら愛情ごっこに励んでも、二人で落ち込むしかないタイプよ。愛を育むどころか、滅亡を育むのがせきのやま。二人とも無気力で、日常を否定的に考えていたでしょう。そして、なんとかその状況を変えたいという焦りに身を焦がしていた。問題を解決するには、自分が変わっていくしかないの。私たちは変化の契機を性に求めることを勧めたのよ。官能を追い求めたバイクの性は復活し、祐子はその性を自ら受け入れたわ。二人は見事なほど変わった。生きていく希望が見えたはずよ。この事実が真実なの。確かに、バイクは自殺してしまった。でもね、あの世という彼岸に希望を繋ぐことも、一つの選択肢なの。そして、バイクと一緒に見出した希望が死に彩られたと思って逼塞してしまった祐子も、一つの選択肢を選んだということなの。選択肢は幾つでもある。二度と選び直せないバイクには無理だけど、祐子はいつだって道を変えることができる。何をいまさら性を怖れるのか、私には分からない。きっと、Mの本性を勘違いしていたのね」

ナースは淡々と話しました。明快な答えです。祐子とバイクはせっかく開通した道に入ったとたんに、迷子になってしまったというわけです。医療器具に触れたような冷たさを感じました。自己責任という言葉が頭に浮かびました。そして、最後の言葉が気に掛かります。

「Mの本性という意味が分からないのですが、性格のことですか」

ストレートに、疑問が口に溢れました。ナースが厳しい表情を返します。沈黙が部屋に落ちました。やがて、ナースの口許がはにかむように動きました。幾分リラックスした声が返ってきます。

「セックスのことよ。養子のあなたが聞くことではないわ。養母に対して失礼でしょう」

「いいえ、Mはセックスを恥じたことはありません。逆に積極的だったと思います。ナースが、僕に遠慮する必要はありません」

僕が真剣な顔で断定したのでしょう。ナースが吹き出してしまいました。頬が赤く染まっています。

「あなたは私の孫よ。孫にセックスの話をせがまれれば、だれだって面食らうでしょう。けれど、そんなに真剣な顔になるのなら、私も看護婦として話すわ。進太が、セックスをどれほど理解しているか知らないけれど、一つの経験話として聞いてくれればいい。実際は、自分で体験しなければ結論は出せないの。そのことは踏まえておいてちょうだい」

ナースが表情を引き締めて答えました。謙虚な申し出が好感を与えます。僕は背筋を正

してしっかりとうなずきました。

「セックスには、二つの側面があるのよ。一つは肉体の快楽を求めること。もう一つは想像力によって心の快楽を求めること。性欲に基づく肉体の快楽は言うまでもないけれど、人はすべてそれで満足しているわけではないの。性を求め合う者は、互いの官能を確かめながら極まりに向かうわ。肉体を借りて対話をしているようなものね。一人で快楽を求めるマスターベーションでも、想像力で性を夢想するでしょう。夢精も無意識が性夢を想像することで始まる。つまり、二つの側面のバランスが個性的なセックスを創り出すの。だから、人のセックスは千差万別とも言える。どれが正しいとか、悪いとかはない。セックスには、なんでもありなの。でも、傾向として分類することはできる。医学や心理学の仕事ね。そして、偏りが大きすぎる場合を異常というのよ。それだけのことだけれど、個人の社会生活には影響がある。異常なセックスは、性の現場に混乱をもたらすのよ」

「Mのセックスが異常だというのですか」

とっさに問い掛けていました。

元婦警の山形さんと同様、専門的なキャリアを持つナースがMを異常者扱いするのです。問いたださずにはいられませんでした。

ナースの口許に苦笑が浮かびます。

「結論を急いではだめよ。私は、Mが異常者とは言わない。それは医学が判断することよ。でも、さっき話したとおり、人のセックスには傾向がある。Mはセックスを社会的に捉える傾向があったわ。人が出会い、共感を持ち、理解し合う。また、反目し、争い、傷付け合う。それが日常の社会生活だわ。だれでも経験していることだけれど、それをセックスにまで持ち込む者は多くないの。Mはセックスで社会生活に参加することに快楽を感じたのよ。官能を日常に取り込み、快楽を見出せば、毎日がお祭りみたいでしょう。それは生き生きときらめいて見えるかも知れない。けれど、周りにいる者には迷惑になるの。その人たちが迷惑を自覚できない場合は、滑稽なことになるわ。ひたすら振り回されるしかなくなってしまう。混乱の極みよ」

「僕や祐子が、Mに振り回されているというのですね」

「今もって、希望の道に進めないという祐子は間違いないわね。進太も、行方不明になったMの足跡を追っているくらいだから、要注意よ。けれど、最初に断っておいたとおり、私はMと立場が違う。二十年も前の経験で話しているだけ。Mに振り回されているかどうかの判断は、進太や祐子が自分ですべきことよ」

ナースが断言しました。結論を出されてしまったようです。僕にはもう、反論するだけの資料も経験もありません。やはり現在の祐子と対決するしかないようです。最後に、ナースの経験話の根拠を尋ねてみました。

「ナースが、Mのセックスの傾向を断定したのは、いつのことなのですか」

「断定はしないわ。理解したのよ。バイクが自殺した後、サロン・ペインにMが殴り込んできたときよ。チーフまで巻き込んで、さんざん暴れ回ったわ。店を破損された後で、ようやく二人を取り押さえた。ママは怒り心頭に達して、Mとチーフを素っ裸にして縛り上げたの。クラブ・ペインクリニックの舞台の上に二人を吊り下げたわ。両手両足を一つにして吊り下げたから、尻の割れ目が剥き出しになった悲惨な姿よ。二つ並んだ尻を、ママと天田さんが鞭で打ったわ。乱暴者を懲らしめるという日常の場が、異常に偏ってしまったのね。Mは、その場を上手に捕まえた。チーフは、たわいもなく泣き出したけれど、Mは違った。目を閉じて歯を食いしばっていたわ。最初は、気丈に折檻を耐えているのかと思った。でも、なんとなく艶めかしいのよ。よく見ると股間が濡れていたわ。最後に、祐子が鞭で打ったときは歓喜の声を上げた。衆人環視の中で、日常を官能に変えてしまったのね。セックスを社会生活の武器にして戦っていたわ。Mの裸身を鞭打つ祐子は、感激して涙を流していた。あの場で覚めていたのは、私とピアニストと、祐子が連れてきたチハルという少女だけ。後は皆、Mが創造したセックスの世界に巻き込まれていた。祐子は、一番重傷だったと思う」

「なぜ祐子はMを鞭打ったのでしょう」

返ってくる答を予期した上で、あえて尋ねました。

「初めて身体を賭けて挑んだセックスを、Mにないがしろにされたからよ。Mも、そのことを認めていた。残念なのは、祐子がMのセックスの傾向に気付かず、温かく見守られていると錯覚したこと。その時点で祐子は、セックスを捨て去ってしまったのでしょう。Mを鞭打つことで、辛く苦しかった勇気ある戦いを癒してしまった。性が苦悩を癒すのでなく、苦悩が性を癒すと誤解したの。今までしてきたことが逆立ちしてしまったのよ。後はもう、Mに希望を繋ぐしかない。Mは勝ち誇って、最後の攻撃にでた。素っ裸で吊り下げられたまま排尿し、脱糞したのよ。さぞかし快楽の極みだったでしょうよ。チーフもMに倣って連帯した。祐子は、その醜態を感動して見つめていた。鼻を摘んで笑っていたチハルの感性が普通なのよ。あの場を逃げ出していったピアニストの気持ちがよく分かるわ。とんだ茶番ね」

忌々しそうに言って、ナースが口をつぐみました。

キャリアを積んだナースの話は説得力があります。水と油のように見えたMとチハルの関係も得心できました。僕も祐子も、Mとチハルの双方に憧れ、惹きつけられていたのです。けれど、反論する立場になったMはいません。やはり、僕と祐子が判断するしかないようです。

僕は、大きくうなずいて腰を上げました。

「貴重な話を聞かせてくださって、ありがとうございました。経験話と謙遜していましたが、非常に役立ちました。ありがとうございます」

心の底から礼を言って、深々と頭を下げました。立ち上がったナースが優しく頭を撫でてくれました。肉親の温かさが心に染みます。Mのいない市に帰るのが嫌になってしまいそうです。

祖母の声が、静かに落ちてきました。

「進太。あなたは、辛い道を歩こうとしているようで、心配になるわ。でも、私がいることを忘れないで欲しい。そして、生きることだけが大切だとは思わないで欲しいの。万が一、辛くて苦しくて死にたくなったときは、私に連絡なさい。楽に死ねる方法を教えます。けして、片方に偏ってはだめ。選択肢は幾つでもあるのよ。死もその一つ」

どっきりすることを、ナースは僕に伝えました。慌ててナースを見上げました。穏やかな顔が微笑んでいます。当惑した僕には返事ができません。

「ドアまで送りましょう」

温かな声で僕を促します。しかし、ドアまでは三メートルもありません。並んで三歩歩いてドアを開けます。

立ち止まった僕の肩をナースが片手で抱き、首を曲げてうつむきました。うなじにナースの唇が触れます。伸ばした舌が素肌を這い回ります。くすぐったいような恥ずかしさが込み上げてきて、股間が熱くなりました。ペニスが勃起してくるのが分かります。頬が真っ赤に染まりました。ナースの手が股間に触れます。うなじを這う舌が耳の裏に回りました。もう、全身が火照ってどうしようもありません。

ナースは僕の祖母なのです。孫をなぶるナースも異常だし、祖母になぶられて勃起する僕も異常です。高らかに笑っているMの顔が目に浮かびました。

「分かったでしょう。これが異常なことなの。肉親同士の性は日常ではないわ。でも、他人が行えば、異常も日常も境界があやふやになる。Mの攻め口なのよ。だから、Mは異常

者ではない。覚えておきなさい」

ナースが解説して、身を離しました。どこの祖母も、みんな説教好きなのでしょう。しかし、体当たりの説教がナースの面目をあらわしています。僕は黙って頭を下げるだけです。

「行ってらっしゃい」

不思議な挨拶と共に、婦長室のドアが閉まりました。僕は、口の中でさようならと答えました。

十分な成果がありましたが、翻弄されっぱなしの対面でした。全身が疲れ切っています。村木さんにわがままを言って、市まで送ってもらいたい心境になりました。

5　過去から届いた薬

市に帰ってくるまでに、雨は上がりました。

夕闇が迫った駅前広場は、黒く濡れたアスファルトの上で水銀灯の青い光が輝いています。見上げた高架の上を、光の帯となって電車が走り抜けていきました。

それほどの人出ではないのですが、先ほどまでいた鉱山の町に比べると都市の雑踏を感じさせます。市まで送るという、村木さんの好意を断ってよかったと思いました。

別れてきたばかりのナースの言葉を借りれば、村木さんは鉱山の町と運命を共にする、かわいそうな人です。きっと、市なんかにはいられねえと悪態をついて、そうそうと帰ってしまったことでしょう。そして、Ｍの言葉を借りれば、市は多くの死に彩られた街ということになります。けれど、僕はこの市が嫌いではありません。なんとなく悪魔的な雰囲気があって、正直に言うと蔵屋敷がある山地よりも好きです。山地に逼塞して、僕を育てることを決意した、Ｍの誤解を正したくなります。

僕も幼いころ、この市で実母の睦月と暮らしていたのです。Ｍと出会ったのも、歓楽街にあるサロン・ペインのアルコールのにおいの中でした。きっと、Ｍも市が好きだったはずです。「Ｍの物語」が輝きを増すのは、なんと言っても市が舞台になったときなのですから。市で暮らしたＭが、輝いていた証拠です。

村木さんの悪態を聞かなくて本当によかったと思いました。疲れ切った気持ちさえ、この街は浮き立たせてくれるのです。だれもいない山地に帰るのが嫌になってしまいました。足が自然に歓楽街の方向に向かっていきます。

サロン・ペインに行って、チーフと天田さんを相手に冗談を言い合い、二階の会員制ルームに泊めてもらえばいいと思いました。

不景気風に吹かれた歓楽街は、人影も疎らです。

赤と黒を斜めに染め分けたサロン・ペインの看板灯の横に、赤いＭＧ・Ｆが駐車してありました。祐子の車です。失踪したＭが愛用したＭＧ・Ｆを、愛おしむように使っている祐子は痛々しくてかないません。荒みきった姿に会うことを考えると、回れ右をして帰りたくなります。しかし、ナースの話を聞いた直後に祐子と会えるのも悪い運ではありません。

祐子との対決を嫌がって先送りにしていては、僕の将来まで無為に流れていってしまいそうな気がします。何よりも僕は、祐子のような弱虫ではない。Mがいなくても、現実に立ち向かっていく勇気があるつもりです。

足早に歩いてサロン・ペインの扉を開きました。

「お帰りなさい」

エントランスからガラスの自動ドアを通って店に入ると、チーフの声が響きました。今や、サロン・ペインは、僕の実家のようなものです。

カウンターの中のチーフへ、手を振って応えました。無邪気に微笑んでいるチーフの顔からは、この店の二階でMと一緒に素っ裸で吊り下げられ、糞尿を振りまいて抵抗したという、二十年前の武勇伝は想像もできません。

「進太、早くお座りなさい。おいしいレモン・スカッシュをつくるわ。どう、ナースは元気にしていた。みやげ話を、ゆっくり聞かせてちょうだい」

ホールの中央に立っている僕を、チーフが促しました。チーフの前のスツールに座っている祐子は振り向きもしません。うるさそうに長い髪を揺すって、右手に持ったカクテルグラスを口に運びました。壁の大鏡に祐子の顔が映っています。酔って赤くなった目で、僕を鋭く睨みました。

「進太、Mの足跡を追っているんだってね。お前は、嫌なやつだ」

吐き出すように祐子がつぶやきました。聞こえよがしの大きな声です。三人しかいないホールにつぶやきが響きました。

「そうだよ。祐子の言うとおりさ。今日は鉱山の町に行って、ナースから祐子の話を聞いてきた。バイクのこともね」

何気なく答えたつもりですが、祐子の背筋がブルッと震えました。気忙しくグラスを口に運びます。祐子はMがいなくなってから、強い酒を覚えたのです。無理をして、ドライマティニを飲む姿が無惨に見えます。

「それがなんだというのよ。Mとバイクはなんの関係もないわ。私の過去まで掘り返す権利は、進太にはない」

叱声が返ってきました。

マティニを飲み干した祐子が立ち上がります。着古したジーンズと、白いトレーナーを着た肢体が左右に揺れています。少しも構わない格好で素顔のままですが、すらっとした長身は僕の目にも美しく見えます。今にも崩れそうな危うさが漂ってきました。

僕も負けずに、祐子を睨み付けます。
「権利じゃないよ。Mに対する義務を果たしてるんだ。けして、祐子の過去を掘り返してるわけじゃない。でも、ナースの話を聞いた後では気掛かりもある。今の祐子は、当時のバイクと瓜二つのようだよ。ただ一点を除いてね。一切を失ってしまったバイクは、祐子のお陰で、生きる希望を見出してから死を選んだ。だが祐子は、せっかくの希望を捨てて、夢をMに繋いだんだ。その夢が消え失せてしまったので、立ち腐れの死を選ぼうとしている。そんなのなしだよ。今の祐子には希望がない。バイクとは違う。一度希望を見出した祐子が、怖じ気づいてしまうなんてあんまりだ。バイクの性を受け入れた、十四歳の祐子が僕は好きだ。尊敬している」
言い切ると同時に、祐子の頬が真っ赤に染まりました。手に持ったカクテルグラスを、僕に思い切り投げ付けました。胸に当たったグラスから、残ったマティニが顔に飛び散りました。きついジンのにおいが鼻孔を打ちます。
「祐子、進太はあんたの弟みたいなもんでしょう。弟に意見されたからといって、ムキになるのは大人げないわ。お酒も祐子には似合わない。あんたが店の売り上げに貢献する必要はないのよ。さあ、進太、座りなさい。レモン・スカッシュを飲みながら、ナースのことを話してよ」
赤い顔をして肩を怒らせている祐子を取りなしてから、チーフがカウンターの上にグラスを差し出しました。ガラスの表面に浮いた白い霜を見たら、急に喉の渇きを覚えました。僕は祐子が座っていたスツールから椅子一つ離れて座りました。祐子は立ち尽くしたまま、カウンターの隅に置かれた水槽を見つめています。暗い水の中を、妖しい光を放って無数のネオンテトラが泳いでいます。闇の中を彷徨う様は、まるで祐子のようです。
「さあ、話しなさいよ。ナースは元気だったの」
祐子を無視して、チーフが促します。
「ああ、元気だった。リハビリテーション施設で、看護婦長をしている。老練なキャリアウーマンだった。自信たっぷりで、とても祖母には見えなかったよ。第一線の現役にいるんだから、立派なもんだ」
「そう、ナースらしいわ。ここにいたときもエネルギッシュで、若い私が負けそうだったものね」
「そうそう、若いころのチーフの話も聞かせてもらった。ずいぶん元気がよかったんだってね。Mと一緒に折檻されたことも聞いた。僕も、母の睦月のＳＭショーは覚えているけ

ど、チーフのショーも見てみたくなったよ」

媚びるように言って、チーフの顔を見上げました。羞恥で赤く染まった頬が若やいで新鮮に見えます。

「何を言うの。私はもう四十七歳よ。乳房が垂れて、お尻も下がってしまったわ。恥ずかしいことを言わないでよ」

怒ったように答えましたが、目は遠くを見ています。この店でMと演じた狂乱を思い起こしているようです。チーフの脳裏では、若くて美しい裸身が乱舞しているのでしょう。目を細めて、一層頬を赤く染めました。まるで少女のようです。

「思い起こすのも恥ずかしいと思っていたけれど、進太のお陰で当時のことを思い出してしまった。やはり懐かしいものなのね。ナースから聞いたのでは、ずいぶん露骨な話だったでしょうね。あのころの私たちは、セックスがすべてだったのよ。身を持って抵抗したのはMだけだったわ。だから私は、Mに惹かれた。Mのように生きたいと思ったものよ。祐子とは違うわ。祐子は、Mに庇護されていたかっただけ。Mを巡るライバルだと思ったこともあったけれど、見当はずれだったわ。Mを恋人と見るか、保護者と見るかの相違だった。ねえ、祐子、そうでしょう」

チーフの矛先が急に祐子に向かいました。Mを巡る相克が、とんだところで再現されてしまったようです。キッとした顔で祐子が振り向きます。

「チーフも進太も、何がおもしろくて私を虐めるのよ。これ以上言ったら、もう許さないわ。確かに、私は無気力な生活をしている。Mがいなくなってしまって、織物だけが残された。斬新な作品を造る能力も情熱もない。もう、みんな嫌になってしまって、死にたくなっていることも事実よ。自閉症が再発しないことが悔しいくらい。でも、これは私一人の苦しみよ。あなたたちに、気安く介入して欲しくない。私の名誉を傷付けるのは大概にしてよ。私だって、Mみたいに生きたかった。自由が欲しかったわ。ただ、能力がなかっただけじゃない。私を軽蔑するのは構わないけど、同情は要らない。ちゃんと自分でけじめるわよ」

肩を震わせて祐子が叫びました。目に涙が溢れています。この場にMがいれば、深い悲しみを感じ、優しく祐子を抱き寄せてくれるのでしょう。しかし、Mはもういません。祐子の叫びと涙が虚しく宙に舞います。

祐子とチーフの暗黙の合意が、僕に発言を求めています。僕はMの代わりはできないし、黙ってこの場の雰囲気に耐える気力もありません。破局を覚悟で口を開きました。

「祐子、同じ死ぬなら、バイクみたいに希望の中で死ねよ。バイクとのセックスは、祐子にも希望を与えたんだろう。たとえ、二十年前の十四歳の身体でも、素っ裸になって後ろ手に縛られ、萎びたペニスをくわえて勃起させた喜びは忘れないはずだ。まして祐子は、バイクの甦った性を、進んで体内に迎えたんじゃないか。二人が一体になれた喜びと、目の前に開かれた希望は、どこに行ってしまったんだい。ナースが言っていたけれど、いまさら性を怖れるのはおかしいよ。Mに希望を求めるのは、お門違いなんじゃないか。いい加減で、昔の勇気を奮い起こせよ」

思いの丈を言ってしまうと胸がスッとしました。チーフが目を細めてうなずいています。しかし、突っ立って聞いていた祐子の肩は、怒りで震えています。身体をふらつかせて右足を上げ、床を激しく踏み鳴らしました。

「うるさい、セックスも知らない子供の説教は聞きたくない。私は自分でけじめると言ったでしょう。ちゃんと希望もあるんだ。チーフ、お水をちょうだい」

断言した祐子が、チーフに向かって手を伸ばしました。チーフが大きなグラスに氷を入れ、水を注いで手渡しました。ちょうどよい水入りです。

僕はホッとして、レモンスカッシュのグラスに手を伸ばしました。祐子が大きく息を吸い込んで、静かに吐き出します。酔いが遠ざかり、表情にも冷静さが戻ってきたようです。ジーンズの尻ポケットから白い封筒を取り出し、カウンターの上で逆さに振りました。赤と白の小さなカプセルが六錠転び出ました。赤が三つ、白が三つの同数です。凶々しい色合いでした。

祐子が赤いカプセルを素早く摘んで、口に入れます。グラスの水を含んで一気に嚥下しました。僕もチーフもあっけに取られて、祐子の仕草を見守りました。

「なんの薬なの、自閉症が再発しそうなの」

チーフが緊張した声で尋ねました。祐子は答えません。じっと目を閉じて何かを待っているような様子です。胃の中で溶ける薬の効力を待っているのでしょう。眉間に小さな皺を寄せています。苦痛と快楽がない交ぜになったような、不安定な表情です。

「まさか、祐子。毒薬じゃないでしょうね」

チーフが衝撃的な言葉を口にしました。恍惚とした表情を見逃さなかったのです。でも、祐子は黙り続けています。不気味な沈黙が立ちこめました。僕の不安が爆発する寸前で祐子が目を開き、緊張した肩をがっくりと落としました。

「希望が去っていったわ。チーフ、なぜ毒薬と分かったの」

今度は、祐子がぎょっとする言葉を口にしました。じっとチーフの目を見つめています。醒めかけた酔いが戻ってきたように、身体が揺れています。

「祐子が余りにも官能的な顔をしていたから、直感的に言葉がでたのよ。でも、よかった。毒薬じゃあなかったのね。間違っていて、本当によかった」

心底ほっとした声で、チーフが答えました。

「ハハハハッハハハ、当たりよ、大当たりよ。さすがにチーフだわ。残った五つのカプセルの中の一つは、本物の毒薬。今日は希望の女神が微笑まなかったけれど、後五日の辛抱よ。次も希望を持って挑めるわ。私は希望の中で死ねるのよ。ねえ、分かったでしょう。ハハッハッハハハ」

祐子が身を捩って笑い、酔いの回りきった声を振りまきました。笑いにむせて、屈み込んで嘔吐しました。酒の混ざった臭い胃液のにおいが立ちこめます。祐子の隙を突くようにして、僕はそっと立ち上がりました。屈み込んだ祐子の後ろに回り、素早くカウンターに手を伸ばします。散らばっていた五つのカプセルをかき集め、握り締めました。

「何をするのよ」

見上げた祐子が大声で叫び、僕の足にしがみついてきます。祐子を引きずったまま一歩を踏み出し、手の中のカプセルを水槽に投げ捨てました。

赤と白の五つのカプセルが、熱帯魚が泳ぎ回る水槽に沈んでいきます。僕もチーフも身体を硬くして水中を見つめました。床に尻を着いた祐子も水槽を見上げています。長い時間が経ったような気がします。

まばたきもせずに見つめる水槽の中で、カプセルが溶け始めました。その瞬間、泳ぎ回っていたネオンテトラの群が、パニックに襲われたように揺れ動きました。それで終わりです。小さな魚が次々に腹を見せて浮き上がってきました。暗い水槽を泳ぎ回っていた妖しい光は、跡形もなく消え失せてしまったのです。

「ウアッー」

足下から絶叫が上がり、祐子が身体を揺すって号泣を始めました。チーフが血相を変えてカウンターから飛び出してきます。祐子の前に屈み込んで、力いっぱい頬を張りました。悲鳴が響き渡ります。チーフはなおも二度、祐子の頬を張ってから立ち上がらせました。

「祐子は、最低の女だ。さあ、はっきりした事情を聞かせてもらうよ」

怒鳴りつけて背を叩き、ボックス席に引き立てていきます。僕は肩を落としてチーフの後に続きました。小柄なチーフの背中が、とても大きく見えます。チーフのキャリアも相

当なもののようです。

「薬は、十錠送られてきたわ。そのうちの一つに青酸カリが入っているの。三万円を口座に振り込んだら、ちゃんと宅配便で届いたわ。今日飲んだのが五つ目よ。五十パーセントの確率でも死ねなかったのだから、運が悪い。十個一緒に飲めばよかった」

「何を言うの。祐子は運がよかったのよ。危うく死ぬところだった。だれから買ったのよ」

ボックス席に座って啜り泣いていた祐子が口を開き、チーフの叱声が響きました。二人は並んで座っています。僕は祐子の前の席で身体を硬くして二人を見守っています。祐子が大きく啜り上げて、諦めたように口を開きました。

「薬を送ってくれたのは弥生のお父さん。海炭市に住んでいるわ」

「えっ」

今度は、僕が大声を上げてしまいました。

市の繭玉会館でオシショウに射殺された弥生の家族が、北の海峡の街に住んでいることは、Mから聞いて知っていました。しかし、十五年も前のことです。弥生のお父さんが、祐子に毒薬を売るなんて信じられません。

僕の声を怪しんだチーフが、睨み付けています。チーフは弥生のことをよく知らないのです。死を選ぼうとした祐子と対決するのは、やはり僕の役目のようです。

「Mの物語」も、新たな展開を迎えます。

海炭市は、佐藤泰志の小説の舞台となった北海道の街です。

海峡の対岸にある都市ですが、現在は海底トンネルで本州と繋がっています。

海炭市で高校教師の父子家庭で育った弥生は、故郷を離れ、祐子や父の修太と一緒に市の国立大学工学部に入学しました。一年浪人しているため、祐子たちより一歳年長です。

弥生は、オシショウと呼ばれる老人が主宰する信仰集団の活動にのめり込んでいきます。惜しまれる人間になることを目指すという、オシショウの教義はエリート学生たちに受け入れられ、工学部に広まっていたのです。祐子も付き合い程度に教義に親しみましたが、内向的な生活を送っていたため、遠くから弥生の行動に憧れるだけでした。

個々人の救いを説いていたオシショウの教義は、やがて、社会改造を目指した思想に拡張されます。学生信者たちの過激な布教活動は、既存の社会と対立を深めていきます。先

鋭化した活動は、反社会的行為として指弾され、信仰集団そのものが市民社会から閉め出されてしまいました。

追い詰められた信仰は、自らを防御するために閉鎖性を深め、外部に対して攻撃的になります。行き着く先は暴力です。組織された暴力のみが、社会改造を実現できるという学生たちの夢想が、現実と交錯することになりました。

学生信者たちは、十二人の幹部を基幹にしたテロ組織を創り上げました。社会改造の一環として、固定資産税の撤廃と義務教育の廃止を市に要求します。当然、要求は無視されました。その報復として、組織は市役所を爆破する暴挙に手を染めました。この組織のリーダーが父の修太でした。弥生は広報担当、母の睦月は総務担当の幹部です。市立病院の麻酔医をしていたピアニストは、活動資金の一切を組織に提供し、自らの社会改造の夢を教団に託しました。

Mは当時、市を離れて都会に住んでいました。祐子とバイクの悲劇を見過ごすしかなかったことを契機に、心の底から疲れと悲しさを感じてしまったのです。小さな葬儀社の社員として、ひたすら目立たないように暮らしていました。大晦日の深夜、宿直をしていたMに仕事が入ります。エイズで死んだ青年の死体を、市へ搬送する仕事でした。その死体は、鉱山の町でMが出会った子供の一人である光男だったのです。搬送を依頼したのは祐子を始めとした、Mのよく知っている関係者たちで、ピアニストの名前もありました。光男の亡骸を霊柩車に乗せ、Mは再び市を訪れます。祐子と二人で光男を火葬にした帰路、Mは市役所の爆破に遭遇しました。

警察は待っていたように、ピアニストと修太を指名手配しました。追われる二人を自首させるべく、Mは隠れ家に乗り込みます。しかし、組織を守るために、二人はMを虜囚にしてしまいます。市役所爆破事件でミスを犯した弥生と虜囚のMは、組織の私刑に呻吟します。山地の果てに造られた山岳アジトに移動した後も、無謀な私刑と軍事訓練が続きました。Mは過酷な毎日を弥生に庇護されて乗り切ります。十五歳も年下の弥生とMの間に、強い友愛の絆が結ばれました。

出口なしの状態に陥った組織は、閉塞状態を打開するために苦悶します。危機的な状況の中へ、ハイテクゲーム機メーカーの幹部社員のチハルを利用して、飛鳥という男がやってきました。飛鳥は、二十億円の現金強奪計画を組織に提示します。オシショウが真っ先に、この計画に飛び付きました。逡巡する、修太を始めとしたメンバーを押さえ、ピアニストが犯罪の実行を決断します。

ピアニストに愛情を抱いてしまった弥生は、積極的にピアニストを補佐する道を選び、Mも弥生に続くことを決心しました。二人は、飛鳥が提供した武器で真っ先に武装します。弥生とMが身を持って示した決意が、メンバー全員の志気を決定付けました。

銃撃と、爆破を交えた苦闘の末、四人の犠牲を払いながらも、組織は競艇場の売上金十五億円の奪取に成功します。逃げ遅れた弥生とM、ピアニストの三人を除いたメンバーは、海外へ逃亡するために市の文化センター・繭玉会館に集結します。

繭玉会館でメンバーの帰還を待っていたオシショウと飛鳥は、いとも簡単に組織を裏切ります。帰還したメンバーの大半が二人の手で毒殺され、修太は警察へ突き出す主謀者の候補として捕らわれてしまいました。

遅れて帰還したMと弥生も、オシショウの奸計に陥って捕まり、全裸で緊縛されてしまいます。

最後にやってきた、負傷したピアニストを、オシショウと飛鳥の銃口が狙いました。この危機を脱しようとして、Mが引き起こした拳銃の暴発で修太が死にます。なおもピアニストを狙うオシショウの銃口の前に、弥生が立ちはだかりました。弥生はピアニストへの愛に殉じ、背後からオシショウに射殺されます。

オシショウと飛鳥は、繭玉会館を爆破し、その混乱に乗じた逃亡を準備します。

Mとピアニストの絶体絶命の危機を救ったのは、司法担当の幹部をしていた極月でした。正面玄関で見張りに立っていた極月は、爆裂の音を聞きつけてホールに突入しました。一切を見て取った極月は、有無を言わせずオシショウを射殺します。

すべてが終わった繭玉会館の舞台に、Mとピアニストが無惨な格好で取り残されました。素っ裸で拘束されたMは、極月にピアニストとの性の介助を依頼します。弥生の死を悼んだMが、成長したピアニストに、初めて身体を開いたのです。

この事件に関係した十六人の中で、生き残っているのは、Mと睦月、極月、そして霜月の四人だけです。ピアニストも生き残りましたが、事件の全責任を取り、死刑囚となって自殺してしまいました。

多くの死と暴力に彩られた、この「物語」の中で僕の命も生まれたのです。避けては通れない道です。

「どうして弥生のお父さんと連絡を取ったんだい」

早口に尋ねた僕の顔を、祐子がぼんやりした目で見返しました。もう涙は止まっていま

すが、悪い酔いが残っている様子です。

「工学部の名簿に、弥生の帰省先が載っていたのよ」

ひどく現実的な答えが返ってきました。祐子の神経はほとんど切れかけているようです。Mがいなくなった半年の間に、祐子の心にそれほどの負荷がかかっていたとは、思ってもみませんでした。見捨てて行ったMが憎らしくなります。

「違うよ。どんな思惑があったか、聞いているんだ」

「恨み辛みよ。Mは、弥生の所へ行ってしまった。でも、弥生は死んでしまったから、代わりにお父さんに文句をぶちまけてやった」

「十五年も前に死んだ弥生に、なんの恨みがあるのさ」

大きな声で問い返しました。祐子の言動は普通ではありません。しっかりと仕事を積み重ねてきた、三十七歳のテキスタイル・デザイナーがぼろぼろになってしまったのです。ナースは、Mは異常者でないと言いましたが、Mの不在が巻き起こした影響は異常です。どうしたら事態を収拾できるか、Mに尋ねたくなる気持ちを我慢して、祐子の目を見つめました。

促された祐子が渋々口を開きます。聞こえてきた声には妙な明るさがありました。

「Mが心を開き、心を通わせた女性は弥生だけよ。私と一つしか歳の違わない弥生がMの心を捉えてしまい、そのまま死んでいなくなった。私が望んでいた地位を奪って、逝ってしまったのよ。残された私に、何ができるというの。Mに甘えて迷惑をかけることしかできないじゃないの。そのMがいなくなってしまったのよ。きっと弥生の所に行ってしまったんだ。だから私は、思いの丈を弥生のお父さんにぶちまけてやった。私も死んでしまいたいと訴えたのよ」

残酷な話です。僕の背筋を冷たい風が掠めていきました。十五年前に死んだ一人娘を嫉妬し、死にたいという便りを、娘の父はどのような思いで読むのでしょうか。祐子の行為は非常識に過ぎます。しかし、祐子は、明るい声で先を続けました。

「速達で返事があったわ。Mはここにいないが、私も死んでしまいたいと書いてあった。死ぬときは、いつでも海炭市を訪ねてくるようにとも書いてあったわ。その余裕がないなら、毒薬を譲ってくれるというの。私は、指定された口座に三万円を振り込んだ。三日後に、あの薬が宅配便で届いたわ。説明書も付いていた。十錠のうち一錠に、致死量の五倍の青酸カリが入れてあるというの。一度に全部飲めば、すぐ死ねるし、一錠ずつ飲んでも、十回のいずれかで死ねる。方法は選択しなさいと書いてあった。私は、毎日一錠ずつ飲む

ことにしたの。赤と白を交互に飲んだわ。五日間飲み続けたけれど、日を重ねるごとに死への希望が高まっていった。でも、もう終わってしまった。まるで生ける屍だわ。海炭市に行きたいな。弥生のお父さんの家に霜月も住んでいるんですって。漁師をしているそうよ。懐かしいわ。狭いキャンパスだったから、同学年はみんな友達なの」

死の先を見るような、虚ろな目をして祐子が口を閉じました。死に至る病という言葉がぴったりです。けれど、その治療が自分でできることに、まだ祐子は気付いていません。

僕の脳裏に、眉をひそめているMの姿が浮かびました。迷い抜いた末に訪ねてくる、僕たちを待っているような悲しい姿です。求められれば与えるという、強固な意志も伝わってきます。祐子が言ったように、Mは海炭市にいるかも知れないと思いました。

僕は、即座に決心しました。

「祐子、一緒に海炭市に行こう。死ぬか死なないか、行ってから決めても遅くはないよ。僕は、Mを捜してみる」

僕の提案を、祐子はぼう然とした顔で聞いていました。やがて、言葉の意味がやっと分かったように、目を輝かせました。

「ええ、Mを捜しに行きましょう。弥生のお父さんが、隠しているのかも知れないわ。もし、本当にMがいなかったら、きっと弥生の所に行ったのよ。その時は、弥生のお父さんに頼んで、もう一度毒薬をもらえばいい。私も、海炭市に行くわ」

横で聞いているチーフが、不安そうに眉間に皺を寄せました。

僕は、大きな声で言い放ちます。

「さっそく行こう。祐子はお金持ちだし、僕も金持ちだ。飛行機の手配は僕がするよ。あっちは梅雨がないから、きっと爽快だ」

決断した、僕の心も爽快でした。無性に喉が渇いています。両足に力を入れて立ち上がりました。

カウンターに残してきたレモン・スカッシュを、一息に飲み干そうと思いました。

６　海炭市へ

海炭市に向かう飛行機は、満席に近い状態でした。

黒っぽい背広を着たビジネスマンに混じって、お年寄りと若者の姿が目立ちます。むしむししした鬱陶しい梅雨を抜け出し、オフシーズンの観光を楽しもうという魂胆のようです。お陰で、僕のカジュアルな格好も目立たないで済みそうです。僕は、ブルージーンズと黒いラガーシャツを着て、三つ並んだ座席の中央に座っています。

通路側に座った祐子は、ワンピース姿です。麻と絹の糸で織り上げた、細かい矢絣を散らした服地は、祐子の作品だそうです。遠目には全体が淡いパープルに見えます。品がよく、とても祐子に似合っていますが、身体にぴったりとフィットしたノースリーブのデザインは、やはり目立ちました。おまけに素足の足元が白いサンダルなのですから、ファッショナブルに過ぎたようです。

性を遠ざけて暮らす祐子が、時にびっくりするほどセクシーな装いをするのですから、不思議なものです。抑圧された欲求が無意識に溢れ出るのでしょうか。僕には理解できません。

祐子を盗み見する視線が飛び交います。

好色そうな男たちの目が不快です。僕の隣の窓際の席からも熱い視線を感じました。席にいるのは少年です。僕より小柄で童顔ですが、ほとんど変わらない歳に見えます。引き締まった健康的な身体に、白いオックスフォードのシャツと紺のチノパンツが似合っています。

飛行機が離陸してシートベルトを外したときから、少年はずっと僕たちの方をうかがっていました。一人旅がつまらないのでしょうが、僕を通り越して祐子に注がれる視線は嫌になります。

僕は意識して、彼を非難するように横を向きました。即座に少年が顔を背けて窓を見ます。小さな窓の中に銀色の翼が大きく見えています。翼の先は一面の青空です。つまらない風景でした。視線を落とし、外を見つめている少年の胸元を観察しました。隣りに座ったときから気掛かりだったアンティークなカメラは、ライカＭ２に間違いありません。白いクロームボディが、真珠のような光沢を見せ付けています。レンズはスーパー・アンギュロン２０ミリを装着しています。喉から手が出るほど欲しくなるカメラです。まだ一枚

も写真を撮っていませんが、僕は写真家志望なのです。そしてライカは、ぜひ使ってみたいカメラでした。

「Ｍ２は実にいいよ」

突然声が響き、少年が振り向きました。僕の熱い視線に気付いたに違いありません。声にうなずいた瞬間、少年が身を乗り出して祐子にカメラを向けます。小さなシャッター音が連続して三回聞こえました。

「勝手に写さないでよ」

祐子の硬い声が飛びました。

「撮られるうちが花だろうが。ねえ兄さん、兄さんの母さんは固すぎるよ。チャーミングだからシャッターを切ったんだ。お袋にはもったいないほどセクシーだよ。きっと、この兄さんをつくったころと変わらないぜ」

「なに言ってるのよ。許さないわ」

少年のぞんざいな言葉に切り返して、祐子が席を立ちました。怖い目で少年と僕を睨んでトイレに向かいます。周囲の乗客が、おもしろそうに聞き耳を立てています。退屈しのぎの、ちょうどよい見せ物を提供してしまったようです。僕は、思わず頬が赤くなってしまいました。

「ねえ、兄さん。君の母さんはヒステリーなのか」

少年がとぼけた声で、再び問い掛けてきました。ますます頬が赤くなります。

「母じゃないよ、友人だよ。それに、僕は君の兄さんじゃない」

思ったより厳しい声が出ました。今度は少年の頬がぱっと赤く染まりました。端正な表情に育ちのよさがにじみ出ています。いくら悪ぶっていても、ピンチに立ったときの脆さは隠せないものです。でも、追い詰められれば、切れてしまうのが僕たちの世代の特技です。祐子と違って、僕は少しも傷ついていないのですから、和解の手を伸ばすのが得策です。

「僕は進太、十五歳になる。君のカメラはすてきだけれど、撮影テクニックもすごいね。モーター・ドライブがないライカで、瞬間的に三回もシャッターを切った。プロ並みだよ」

歯の浮くようなほめ言葉ですが、半分以上本心でした。少年の頬がますます赤く染まり、小さく鼻を鳴らしました。

「あんたは、やはり兄さんだよ。俺は伊東晋介、中学三年生で十四歳。でも、カメラはプ

ロ級だよ。今日は海炭市の写真コンテストに招待されたんだ。ほら、これ、見ておくれよ」

得意そうに言った晋介が、尻ポケットから四つに折り畳んだパンフレットを差し出しました。表紙には、大きな活字で「日本一の夕日・写真コンテスト」と刷られています。

晋介が、小さな活字を指差しました。トップの推薦作品の下に、五つ並んだ優秀作品の一番に伊東晋介の名前がありました。作品タイトルは「夕日のきれいな街」です。カッコ書きのモノクロームの文字が目立っています。

「すごいね。モノクロの作品で一位入選じゃないか。もったいないね。カラーだったら推薦になったかも知れない」

つい大きな声で感想を述べてしまいました。晋介の目が大きく見開かれます。得意満面といった口許から、高ぶった声が響きました。

「モノクロだからいいんだよ。夕日をカラーで撮って、きれいなのはあたりまえ。写真を見る人が持つ、夕日の思い出を喚起させるのが俺の狙いなんだ。タイトルの、夕日のきれいな街は俺の故郷。特定の色で紹介できないほど美しい。兄さんにも、ぜひ見せたいくらいだよ」

晋介が誇らかに言い切りました。少年の奢りは共感できます。僕のように隠そうとしないすがしさが、新鮮な感動を与えました。

「君の言うとおりだ。機会があれば、君の街にぜひ行ってみたい。でも、僕を兄さんと呼ぶのはやめてくれ。進太でいいよ」

親しみを込めて答えると、待っていたように晋介が身を乗り出してきました。

「いや、兄さんは俺より一個年上だから、進太さんと呼ぶよ。俺は晋介でいい。見掛けによらず、俺は礼儀正しいんだ。いいだろう」

提案を聞くと同時に、僕は吹き出してしまいました。怪訝な顔で晋介が見つめていますが、なかなか笑いが止まりません。やっと笑いを納めて口を開きます。

「参ったな。確かに、晋介は礼儀正しいんだろう。でも、先ほど祐子に見せた態度からはうなずけないよ。まるで喧嘩を売っているみたいで、はらはらさせられた」

「ふうん、あの人は祐子というの。俺は女性差別が信条だから、俺の礼儀からは外れていない。進太さんも祐子と呼び捨てにするくらいだから、俺と同じだ。祐子はヒステリーなんだろう。写真を撮ったくらいで、ムキになって突っかかってくる女も珍しい。もし、生理中でないのなら、根っからのヒステリーだよ」

晋介が真顔で答えました。僕は、また吹き出してしまいます。
「祐子はヒステリーじゃないよ。死にたくなるほど、世の中が嫌になっているだけさ。晋介にも、思い当たるところがあるだろう」
「別に、急がなくたって死ぬときは死ねるよ。俺は死にたいと思ったことなんてない。たとえ思ったとしても、思わなかったことにしている。進太さんも俺と同類だろう」
シビアな答えが返ってきました。即座に応えることができません。けれど、晋介の言ったことは事実です。黙って小さくうなづきました。晋介の口許に笑みが広がります。大きな目の輝きが増しました。
「進太さんは、高校生なのか。今時、どうして海炭市に行くんだい。俺も、一緒させてもらって構わないか」
矢継ぎ早に聞いてきました。初対面なのに、ずいぶん好かれてしまったようです。僕の方が面食らってしまいます。意地悪な質問をしてみることにしました。
「答える前に、一つだけ聞きたいことがある。晋介には、友達がいるのかい」
「いないさ」
即座に答えが返ってきました。怒りもせず、傷つきもしません。自信に溢れた声で先を続けます。
「俺の友達は、カメラと空手だけだよ。空手は二段を取った。でも、俺は武道家より、写真家を選ぶことにしたんだ。中学校を卒業したら写真の専門学校に進む。親父が金持ちだから、好きなことをさせてもらうんだ。親父は医者で、俺の知らない女と暮らしている。高校に進学して医大を目指せと説教したから、ぶっ殺してやると言ってやったよ。あんな親父でも命は惜しいらしい。すぐに折れてきて、好きなだけ金を出すと言った。お袋は、顔も覚えていないころに死んだ。あんな親父と寝たお袋は馬鹿なやつだ。祐子に言ったことに嘘はないよ。俺をつくったころのお袋を、写真で表現しようと思っているのさ。だから、蔑視していても女は撮りたいんだ。さあ、次は進太さんの答える番だよ」
晋介は、さり気なく自分の来歴まで話しました。頭の回転も素早いようです。僕の答えをあいまいにさせないように、事前に手を打ってきたのです。意地悪な質問が裏目にでてしまいました。真剣に答えることにします。
「僕は高校生ではなく、無業者なんだ。晋介と同じように、写真家になりたいと思っている。一緒に暮らしてきた、Mという養母がいなくなってしまったんだ。今はMの歴史を尋ねて歩いている。海炭市に行くのもそのためだよ。Mという女性を見極めない限り、写真

家になれないと思うからだ。僕は写真を撮ったことがない。まず、ものを見る目をつくろうとしているんだ。プロ級の腕を持っている晋介と一緒に旅をするのは大歓迎さ。これが僕の答えだよ」

「ようし、決まったね。でも、祐子はうんと言うだろうか」

喚声を上げた晋介が、トイレの方を振り返って心細い声を出しました。僕はたまらず吹き出してしまいました。もう、これで三度目です。晋介のエネルギーは相当なものです。彼のお父さんが、殺されると確信しても無理がないほどです。晋介は言ったとおりに殺したでしょう。怖いくらい純粋なのです。

「晋介と一緒に行くのは僕だよ。祐子とも一緒に行く。それだけのことさ。それから、僕の父は死んだけど、母は生きている。もう十年も会っていないが、母が僕をつくったときのことは話しに聞いているよ」

聞かれなかったことを、わざわざ口にしてしまいました。トイレから帰ってくる祐子の姿が見えます。晋介が目で先を促しました。僕は大きく息を吸い込みました。

「僕をつくったときの両親は、素っ裸で後ろ手に縛られていたそうだよ」

「えっ」

小さく叫んで絶句した晋介の目が、妖しく光りました。背筋を真っ直ぐ伸ばした祐子が、席に座ります。なぜか、丸い尻が卑猥に見えてしまいました。

飛行機は大きく旋回して、海峡から陸地へと突っ込んでいきます。

西に面した窓から、真っ赤な夕日が射し込んできました。晋介の横顔が黒いシャドウになり、斜光を浴びた輪郭が黄金色に輝いています。一瞬、機内全体が射し込んできた夕日で赤く染まりました。着地のショックが全身に伝わってきます。山の端に日が隠れ、薄暮の滑走路を照明灯の光が照らし出しています。空中の夕日は余りにも短命でした。

僕たちは乗客の列に紛れてターミナルに向かいます。

「肌寒いわ。進太も上に何か着なさい。風邪を引くわよ」

気忙しい声が、耳元で響きました。祐子が、受け取ったばかりのボストンバッグを開いて、黒いカーディガンに袖を通しています。僕は聞こえなかった振りをして、ディバッグを右肩にかけました。確かに肌寒さを感じますが、僕のラガーシャツは長袖です。ノースリーブの祐子は標準になりません。

横にいる晋介は、手荷物すら持っていません。首から下げたライカと、ウエストバッグ

だけの身軽ないでたちです。

「晋介は、着替えも持ってこないのか」

口うるさい祐子を無視するように、晋介に声をかけました。

「着替えなんて、どこでも売っているさ。ライカと金があれば十分。金は持っているよ。みんな親父の泡銭だ」

つまらなそうに答えた晋介が、ウエストバッグのファスナーを開いて中を見せます。エルマーの９０ミリ交換レンズがひときわ輝いています。三本のイルフォードのフィルムの横に、シルバーのマネークリップで留めた一万円札が見えました。二十枚以上あるようです。ジッポーのライターと紺色のショート・ピースの箱も入れてあります。

「煙草を吸うのかい」

思わず聞いてしまいました。晋介の頬が赤く染まります。

「吸うのは食後だけだよ。今時、煙草を続けているなんて恥だよね。調子に乗って見せるんじゃなかった」

中学三年生の台詞です。僕はまた吹き出してしまいました。晋介は本当にユニークです。祐子が怖い目で睨み付けています。

僕と晋介は肩を並べて、祐子に追われるようにしてタクシー乗り場に向かいました。

タクシーで二十分ほど走ると、もう海炭市の駅前です。

「へー、わりと都会的だ。路面電車が走ってる。レトロだよね」

闇の中でスパークする架線の火花を見上げて、晋介が叫びました。

僕たちも晋介も、宿の予約はしてありません。今夜の宿は駅前のビジネスホテルに決まりました。ツインとシングルの部屋を頼んで、僕と晋介が同じ部屋に泊まることにしました。

祐子は晋介のことを無視しています。しかし、同行することに文句は言いません。明朝の、霜月との再会に気持ちが行っているのでしょう。僕には好都合です。ナーバスな祐子の相手をまぬがれるうえ、愉快な晋介と一緒の部屋に泊まれるのです。

部屋に通る前に、祐子の指示で、ロビーで予定の確認をすることにしました。小さなテーブルを挟んで僕と晋介が、祐子と向かい合います。不満顔の晋介が、真っ先に口を開きました。

「まず、飯だよ。進太さん、イカソーメンと味噌ラーメン。俺は腹が減って、死にそうな

んだ。さあ、街に出ようよ。予定の確認なんて、食べながらでもできる」

晋介らしい健康的な提案です。僕も空腹感が込み上げてきて、即座に同意したくなりました。祐子が僕を見つめて、首を左右に振ります。

「進太、明日は、霜月と弥生のお父さんに会うのよ。土地の人たちが自慢する夜景を見ておいた方がいいわ。Mも、見たかも知れない。美しい夜景を見てから、私は弥生の所に行きたいの。ねえ、進太、行きましょう」

僕を誘う祐子の声には、感傷的な響きがありました。特に夜景という言葉がくせ者です。海峡に面した標高三百八十九メートルの山頂から望む海炭市の夜景は、全国的に有名です。しかし、祐子の心を捕らえているのは、甘美な死のイメージに相違ありません。Mの名を出されたとしても、たやすく共感者に仕立て上げられるわけにはいきません。完璧に晋介を無視した態度も、自分の世界にこもっていたい願望を証明しているようで鼻につきます。

「僕も、腹が減っているんだ。晋介と食事してくる」

無愛想な声で答えていました。さみしそうな目で、祐子が僕を見ました。

「決まったね」

晋介の勝ち誇った声が響きました。祐子が眉をひそめて席を立ちます。

「いいわ、あなたたちは食事に行けばいい。私は一人で夜景を見る。デリカシーのない人と、夜景なんか見たくないわ。でも、明日の朝は六時に、漁から帰った霜月と会うのよ。いいわね、忘れないで。ちゃんと起きるのよ。私と進太は、写真コンテストを見に来たのではないわ」

厳しく言い残して、祐子は自分の部屋へ向かいました。

「やっぱり、ヒステリーだ。霜月っていうのは別れた彼氏なのかな。未練がましいな」

晋介が大きな声でつぶやきました。祐子の名誉のために、僕は霜月や弥生、そしてMの話を晋介に話すことにしました。

たっぷり、一時間はかかってしまいました。もう腹ぺこです。

駅の横手に広がる市場の迷路にある店で、僕と晋介はイカソーメンを食べました。不思議な味の名物は、Mがシェリーを片手に食べるのがふさわしい料理でした。若い僕たちの口には合いません。

そうそうにラーメン屋に入り直しました。さすがに本場物の味噌ラーメンは腰があっておいしいものです。煤ぼけたカウンターで食べる味は、また格別でした。午後八時半を回

った店内は空いています。同じカウンターの隅に、高校生に見える二人連れの男たちがいるだけです。さっと店内を見回した晋介が、ウエストバックからショート・ピースの箱を取り出しました。両切りの煙草を一本抜き取り、口にくわえて、シルバーのジッポーで火を点けます。カシーンと金属音を響かせてジッポーの蓋を閉めると、気持ちよさそうに白い煙を吹き出しました。

「ウー、うまい。食後の一服は堪えられない。これだから、煙草はやめられないんだ」

爺むさいことを言って、指先の吸い差しから立ち上る青い煙に目を細めました。とたんに、レジにいる小母さんが、怖い顔で僕たちを見ました。二人の高校生も身を乗り出して睨み付けてきました。なんだか険悪な雰囲気が立ちこめています。けれど、晋介は一向に気にしていません。

「進太さんも吸ってみれば」

平気な顔で煙草を勧めます。もう辟易です。

「僕は煙草を吸わない。さあ、もう帰ろう」

大きな声で言って立ち上がりました。真っ直ぐレジへ向かい、うつむいたまま二人分の勘定を払いました。晋介は煙草をくわえたまま、先に扉を開けて外に出ます。

「ごちそうさま、おいしかったよ」

上機嫌な声で言って煙草を吸います。僕は答えずに歩き始めました。横に並んだ晋介に小声で注意します。

「人前で、煙草は吸わない方がいいよ。トラブルの元だ」

聞こえているはずなのに、晋介は答えません。小さく肩を揺すってから、吸い差しを路面に投げました。憎々しげに右足で踏み消します。

「おい、子供が煙草を吸っていいのかよ」

突然、ドスの利いた声が響き、肩を怒らせた二人連れが晋介の前に立ちはだかりました。先ほどラーメン屋にいた高校生です。ずり落ちたズボンを穿いた姿は、相当崩れている様子です。慌てて周囲を見回しましたが、僕たちのいる路地に人通りはありません。十メートル先にちっぽけな街灯が灯っているだけです。ラーメンを食べて熱くなった身体が、急激に寒くなってきました。

「よう、いいのかって聞いてるんだ。返事をしろよ」

体の大きい方が、晋介が首から下げたライカの下げ紐を掴んで、なおも因縁を付けます。高校生は、晋介より頭一つ大きな身体をしています。微かに、アルコールのにおいがしま

した。自分たちは隠れてビールを飲んでいたに違いありません。とんだ言い掛かりです。小銭目当ての恐喝なのでしょう。

「オラッ、口がねえのか」

叫ぶと同時に、カメラの下げ紐を揺すりました。その瞬間、晋介の全身から強い怒りが放射されたのが分かりました。発散されたエネルギーが、僕の身体まで伝わってきます。

「ウルセイ、ゴミに説教されるいわれはねえんだ」

大声で叫ぶと同時に、晋介が高校生の股間を蹴り上げました。ウッと呻いた高校生が股を押さえて路上に屈み込みます。その顎を素早く蹴り上げました。のけ反って倒れた仲間を見て、もう一人が殴り掛かってきます。さっと身体を下げて一撃を避けた晋介が、立ち上がり様に正拳を突き出しました。ポキッという乾いた嫌な音が響きました。高校生が悲鳴を上げてうずくまります。

「鎖骨が折れただけさ。汚い手でライカに触った罰だ」

倒れた高校生に平然と言って、晋介が僕の手を取ります。足早に路地を抜け、メイン・ストリートに出て、ホテルに向かいます。なんとも手慣れた喧嘩のやり方に、僕は舌を巻いてしまいました。

「あれっ、スーパーアンギュロンのレンズキャップを落としてきてしまった」

ショーウインドウの明るい光に浮かび上がった胸元のライカを見て、晋介が情けない声を出しました。

「俺がぶっ切れるときは必ず損をするんだ。これでもう三度目だよ。嫌になる。ねえ、進太さんも、俺が切れそうなときは止めてくれよ。もう損はしたくない」

とんだところでお鉢が回ってきました。でも、少しも嫌味がありません。気楽に声を返しました。

「晋介とは今日会ったんだ。切れるところも初めて見た。確かに、相当なもんだね。損をするのは当たり前だ。でも、相手は損どころじゃない、重傷だよ」

僕の答えを聞いて、晋介が立ち止まります。お互いに目を見つめ合いました。晋介はなぜか悲しそうな目をしています。Mが見せていたのと同じものです。しっかり見極めようとすると、たちまち悲しみが遠ざかり、けろっとした表情に戻ってつぶやきました。

「進太さんの言うとおりだ」

目を伏せて笑い出します。僕も笑いました。二人の笑い声が海炭市のメインストリートを流れ去っていきます。僕は、極めて壮快な気分になりました。

この半年の間、絶えてなかった痛快な気持ちです。Mを捜しに来た海炭市で、思っても見なかった感情が僕を包み込んだのです。そして、この気持ちをもたらしたのは、知り合ったばかりの晋介に他ありません。心の底から全身に押し寄せてくる、波動のようなものを感じました。変化の予兆のようです。

弥生のお父さんと、霜月の二人に対峙する勇気が湧いてきました。

7　父の妄執

「漁港と方角が違うよ」

朝市の準備に追われる商人たちの間を縫って、空港の方角に歩く祐子の背に晋介が呼び掛けました。

「漁港は公設で、部外者は立入禁止なの。霜月は仕事が終わった後、浜辺の桟橋に来てくれるのよ。それに、あなたに一緒に来てくれとは頼んでないわ。好きにしてくれていいのよ」

僕たちを振り返った祐子が、にべもなく答えました。ようやく明るくなってきた空が、祐子の厳しい表情を青白く染めています。

風向きが変わり、きつい潮の香りが鼻先を掠めました。横にいる晋介が肩をすくめます。くちごたえを呑み込むように息を吸い込み、足を早めて祐子を追い抜いていきました。首から吊ったライカが左右に揺れています。

「晋介が邪魔なら、そう言えばいいじゃないか。陰険な態度はみっともないよ」

祐子に並んで非難がましく注意しました。

「それは、進太がすることでしょう。昨日会ったばかりの子を、どこにでも連れてくるのは非常識よ」

明解な答えが返ってきました。祐子の言うとおりです。応えることができませんでした。黙ったまま歩き続け、祐子の言い分を反芻してみました。

確かに、僕が晋介を連れてきたのです。暗黙のうちに同行を期待し、熱望したような気さえします。これから会おうとしている霜月は、祐子の懐かしい同級生というだけではありません。死にたいと呼び掛けた祐子に青酸カリを売った、弥生の父の身近に暮らしているのです。今朝の訪問が僕たちに、どんな不測の事態を招き寄せるか分かりません。異常な展開が待ち受けていると思うのが普通でしょう。そして、祐子と同じ地平で暮らしてきた僕には、異常事態の発生に冷静に対処できる自信がなかったのです。

危険な予感が現実になったときに、頼れる保険が欲しいと願っていました。そこに、エネルギッシュでパワフルな、ニュートラルな存在として晋介があらわれたのです。頼りたくなるのは必然でした。そして、祐子も、僕と同じような予感を抱いているはずです。しかも、その実現を望んでいる。でも僕は、そんなことはまっぴらです。

海沿いの堰堤をしばらく歩いてから、運河を渡りました。

四車線の埃っぽい道路を横切ると、右手に大きな砂丘が広がっています。祐子が先頭に立って、ハマナスが植栽された砂丘を上っていきます。要所要所に写真を散りばめた霜月の案内図を、インターネットのメールで受け取っている祐子の足は、初めての土地でも自信たっぷりです。

小高い頂から見下ろした正面に、穏やかな海が広がっていました。狭い入り江は、海水浴場のように砂浜になっています。左手の山から顔を出した朝日が波頭で反射して、海面の至る所で輝いています。美しい景色でした。人影一つない、孤独な海です。

「霜月の船だわ」

歌うような声で、祐子がつぶやきました。入り江の右端から伸びた長い桟橋の先に、小さな漁船がもやっています。ヨットほどの大きさもない船は、広い海で頼りなく揺れています。舷側に並んでぶら下がった集魚用のランタンが大げさで、滑稽に見えます。

「ちっぽけな船だね」

晋介が、僕の気持ちを言葉にしました。

「イカ釣り船はあんなものよ。さあ、いきましょう」

根拠もなく断定した祐子が、走るようにして砂浜に下っていきます。僕と晋介は足下に注意して後に続きました。きれいに見えた砂浜は、至る所にゴミや産業廃棄物が投棄されていたのです。古タイヤや錆びた自転車、古雑誌、マットレスの他に小型の冷蔵庫まであります。汀には、朽ちてしまった古い桟橋の杭が放置されています。二本並んだ杭の列が沖に続いている様は、無惨な眺めでした。

「祐子、来たのか」

波の音に混じって、野太い声が浜辺に響き渡りました。初めて聞く霜月の声です。桟橋の先のイカ釣り船に、大きな人影が立っていました。

意外に身軽く桟橋に飛び移った男が、しきりに手を振っています。祐子も手を振って桟橋に駆け上がりました。僕たちもつられて足を早めます。板を連ねた桟橋は、かろうじて二人が並んで渡れる広さでした。三十メートル先で、祐子と霜月がうれしそうに抱き合っています。抱き上げられた祐子の足先で、白いサンダルが揺れています。

霜月は、レスラーのような体躯のおじさんでした。同い年の祐子がおばさんに見えないのですから、三十歳を過ぎた大人の対比は微妙なものです。重ねてきた年輪の大きさが残

酷に映りました。晋介が素早くライカを構え、連続してシャッターを切りました。今日のレンズはエルマー９０ミリです。

「海をバックに、いいコントラストだ。もらったね」

耳元で、晋介の興奮した声が響きました。思わず問い返します。

「美女と野獣ってことかい」

「違うよ。進太さんは古すぎる。性のコンポジションだよ。二人とも、いい味をだしていた」

もどかしい素振りで否定されてしまいました。ものを見るセンスを軽んじられたような気がしました。そっと目をつむって、二人の抱擁の瞬間を思い浮かべてみます。どこにも性的なものは感じられません。逆に、微笑ましいほどの幼さが目立っていました。牧歌的な構図です。

「どこが性的なんだい」

とぼけた質問をしたみたいです。晋介の足が止まってしまいました。

「崩壊を待つ喜びの予兆。性そのものじゃないか」

怒ったように晋介が答えました。突然聞く難解な言葉が、頭の芯に突き刺さりました。他人の考えていることは、本当に分からないものです。僕はあきれて、正面から晋介の顔を見つめてしまいました。

「進太さんも、写真家志望なんだろう。独自の目で被写体を見られなければ、到底プロにはなれないよ」

真剣な表情で断定しました。僕は真剣にうなずくだけです。どれほど身近に感じられる人でも、見くびることは許されません。改めて学びなおしました。

「進太、何してるのよ。早くいらっしゃい」

祐子の声が響き渡りました。横に立つ霜月の大きな顔が笑っています。灰色の作業着を着て、黒いゴム長靴を履いています。魚の生臭いにおいが漂ってくるような格好でした。

「やあ、お前が進太か。親父の修太より背が高くて、立派に見える。いい男だから女にもてるだろう。連れの子供も美形だ。祐子が美少年を二人も連れてやってくるとは思わなかったよ。お互いに、年を食ったもんだ」

僕が自己紹介をする前に、霜月が大声を出しました。父の修太を知っている人たちは、僕と会ったときに判で押したような応対をします。姿形と女性にもてる話です。父がよっぽどだめな男だったのか、Ｍの養子に対する性的なサービスなのか、判断に迷うところで

す。恐らく後者なのでしょう。けれど、Mから性的な影響を受けなかった僕は戸惑ってしまいます。

ひとしきり挨拶を交わしあってから、僕たちは桟橋の上に並んで腰を下ろしました。霜月を真ん中にして僕と祐子が左右に別れ、晋介は僕の隣りに座りました。垂らした足の下で穏やかな波が揺れています。空は真っ青に澄み渡り、照りつける陽射しが暑いほどです。

「あれ、船が動かなくなってしまうよ」

突然、晋介が大声を上げました。全員がイカ釣り船を見つめます。確かに目に見えて喫水が下がり、灰色の貝がこびり着いた汚い船腹が露呈しています。

「ああ、引き潮だからな。こんなちっぽけな桟橋では干潮の時は使いものにならないんだ。でも、今日の漁は終わったからいい。夕方になれば潮が満ちる。今日は大潮だからすごいぞ。あそこに並んだ杭の列の半数が水没する。浜が見えなくなるほど、潮が押し寄せてくるんだ」

得意そうに霜月が説明しました。晋介がライカを構え、杭の間を引いていく潮の流れを一枚だけ写真に撮りました。霜月の説明へのサービスのようです。カメラで語りかける手口は見事なものでした。気分をよくした霜月が先を続けます。

「この入り江は私有地なのさ。浜全体を校長が所有している。校長は、弥生の親父さんの土地固有の呼び名だ。先代までは、この入り江を使って昆布漁の網元をしていたそうだ。半世紀以上昔の話さ。今は海が汚れてしまって、この辺では昆布は採れない。潮に乗って、流れ昆布が打ち寄せる程度だ」

尋ねる前に話は核心に入ってきました。弥生のお父さんの登場です。しかし、弥生の父が校長をしていたとは知りませんでした。

「弥生のお父さんが校長先生だったなんて、初耳だわ」

祐子が僕の疑問を口にしました。

「そのとおり。弥生が市で話していたように、実際は高校の化学の教諭だった。弥生が死んでから校長と名のるようになった。だから、土地固有の呼び名なんだ。親父さんは、まだ一人娘の死を受け入れられないでいる。弥生に工学部を卒業させて、海炭市にできたばかりの私立の工業大学の研究室に入れるつもりだった。四年間手放した弥生をずっと側に置いて、ゆくゆくは教授になってもらうのが夢だったと言う。けれど、弥生は死んだ。夢も雲散霧消してしまった。生きる希望に見放された心のバランスを取るには、自分が偉く

なるしかなかったのだろう。俺が刑期を済ませてここを訪ねてきたときには、もう自他共に校長と呼んでいた。後で案内するけど、ぜひ校長と呼んでやってくれ」

無骨な外見に似合わない、しんみりとした口調で霜月がいわれを告げると、祐子の肩が微かに震えました。全身で共感をあらわしている風情です。

「悲しい話ね。生きる意味を失った者の気持ちがよく分かるから、きっと私に青酸カリを送ってくださったのね。失礼だけれど、こんな寂しい海岸に閉じこもってしまった霜月には、生きる希望があるの」

大胆なことを尋ねました。話の行きがかりなのですが、余裕を失いかけた祐子の態度が、僕をはらはらさせます。沈黙が落ちました。間近に聞こえていた波の音が遠く去っていくような気がします。引き潮の響きなのでしょう。

ようやく、霜月の声がこぼれ落ちました。

「祐子は昔、心を閉じてしまった時期があったと俺に言った。俺は自閉症ではないが、同じように心を閉じてしまったんだ。五年の刑期が終わった後、ここに来ないでMや祐子、極月たちのいる市を訪ねる道もあった。だが、刑務所にいた五年間、俺が思い描いていたのは弥生の姿だった。幸運にも俺は、弥生の死に立ち会わないで済んだから、死を信じないこともできる。市に戻れば、嫌でも弥生の死を目の前に突き付けられただろう。だから、俺は海炭市に来た。校長の好意で漁師の真似事を始めてから十年経つが、校長と毎日交わす弥生の話題はまだ事欠かない。俺には弥生と一緒に生きる希望がある」

断定の声が響きました。隣りに座った晋介が身を乗り出します。

「ずいぶんレトロだね。夕べ見た路面電車みたいだ」

今度は晋介が大胆なことを口にしました。即座に身体を硬くした霜月の動きが伝わってきます。

「ガキに何が分かる。将来をなくした三十七歳の男には、それなりの生き方があるんだ」

吐き出すように霜月がつぶやきました。声と同時に、身体から抜けていく力が悲しみの深さをあらわしているようです。息が詰まります。

「たった五年を、懲役に行っただけじゃないか。貴重な体験だぜ」

やけに明るい声で晋介が応じました。センチメンタルな感情を心底嫌っている響きです。

「やめてよ、もう黙って。事情も知らないあなたに、かき混ぜられたくないわ。それより、霜月が弥生のことをそれほど思っていたなんて、私には新鮮だった。ここまで来た甲斐があったわ。校長さんにも早く会いたい」

センチメンタル派の筆頭のような祐子が晋介を叱責して、感嘆の言葉を口にしました。僕は晋介の気持ちも、大人二人の気持ちもそれぞれに理解できます。コウモリのような、中途半端な態度がやり切れなくなります。性を話題にして、霜月の真意を探ってみることにしました。

「Mに聞いた話では、弥生はピアニストとのセックスを契機にして、生きる希望を育んでいったそうです。その死も、ピアニストに殉じたものでした。あなたが知らないわけがないでしょう。レトロと言うより、創作した希望に寄り掛かっているとしか思えません。そして祐子は、現実の希望を捨て、創作した死を求めている。二人とも不自然ですよ」

思いがけず強い言葉がでました。横にいる晋介を意識したのかも知れません。二人の大人を誹謗した言葉が波間を漂って、沖に流されていきます。長い沈黙が続きました。

「せっかく海炭市まで来てくれたんだ。俺が、とっておきのイカ料理をごちそうするよ。みんなに食べさせたくて、生け簀のイカを確保しておいたんだ。朝飯を済ませてから校長の家に行こう」

疲れた声で言って、霜月が立ち上がりました。僕たちはホテルの朝食を食べていません。改めて空腹感が襲ってきました。上手に答えをはぐらかされてしまったようです。

イカ釣り船に戻っていく霜月の後を祐子が追いました。几帳面な祐子が調理をサポートするのですから、衛生の心配がなくて済みそうです。晋介が、うんざりした顔で僕を睨みました。

「退屈なら、コンテストの会場に行ってくれていいよ」

弱々しく声をかけました。とたんに晋介が吹き出します。大きな声で笑いました。

「進太さんが気にすることはないよ。時代遅れの万年青年をいたぶるのは、結構おもしろい。写真展は午後八時までやっているんだ。一日は長い」

大人びた声で答えて、また笑いました。

Mが話してくれた、友愛という言葉が脳裏に浮かびました。Mが弥生に友愛を抱いたように、僕は晋介に友情を感じています。Mが最もはつらつとしていた時代の空気が、ちょっぴり分かったような気がしました。何よりも躍動してくる感覚に手応えがあります。祐子の話も、霜月の話も、これから聞かされるはずの弥生の父の話も、みんな嘘だと直感しました。

おためごかしの希望が真実であるはずがありません。いささか破壊的ですが、晋介の言葉を実践しようと思いました。

霜月が作ってくれたイカ料理は最高の味でした。昨夜食べたイカ・ソーメンとは雲泥の違いです。

「うまい、このイカは白くないよ。生臭くない」

一口食べた後の、晋介の率直な感想でした。

「ハハハッハハ、生きているイカは透明なんだ。海の中には白いイカなんて泳いでいない。それは死んだイカだ」

得意満面な表情で言って、霜月が大笑いしました。確かに生け簀に入れてあった、とりたてのイカは新鮮です。生まれて初めて味わう美味に舌鼓を打ってしまいました。

「それに、だし汁が違う。校長の家に保存してあった、最高級の昆布を使ったんだ。さすがに網元だっただけのことはある。ストレートに味にでるんだ」

いささか自慢が鼻に付きますが、霜月には調理人の才能があるようです。発散されたエネルギーも一直線に伝わってきました。今の霜月は透明なイカになっています。これが本当の希望だと思わずにはいられません。祐子も珍しく目を細めて霜月を見ています。楽しい食事の時間が続きました。霜月は、ウイスキーの大瓶を持ち出して陽気に飲んでいます。

僕は、このままの気分で帰りたくなります。

「おい、進太、さっきの問いに答えてやるよ。セックスの話だ」

酔いの回ってきた霜月が、絡みつく声で言い寄ってきました。とたんに気分が落ち込んでしまいます。またもや創作の世界が繰り広げられるのです。おまけに酔っていては、もううんざりです。

「もういいですよ。忘れてください」

両手を振って答えましたが、霜月は取り合いません。オートマチックに話しを続けます。

「まあ、聞けよ。俺は十五、十六の小僧と違って、セックスなんかに興味はないんだ。大人は心だよ。父も心だ。俺と校長は、毎日弥生の話をする。その度に弥生は美しくなり、偉大になる。弥生は、肉体を失ったおかげで女神になった。女神といっても君臨し、あがめ奉られるんじゃない。俺と校長を優しく包み込んでくれる、身近な女性なんだ。一過性のセックスなんかに代えられるもんじゃない。俺は、永遠の恍惚を弥生と共有している。ピアニストとセックスしたから、なんだというんだ。もう弥生はそんな世界にいない。ピアニストだって死んだ。弥生は、俺たちの世界にいるんだ」

口から唾を飛ばして、霜月が息巻きました。再び白いイカに変わってしまったようです。

創作を通り越した、盲信の世界が開かれてしまいました。僕も感想を直截に言うしかありません。

「十分納得できる話ですね。しかし、僕の見方は違う。弥生もピアニストも死んで彼岸にいます。正常な想像力で考えれば、二人はその彼岸で結ばれてセックスを続けているはずですよ。けして、あなたや、校長さんの世界に帰ることはない」

「やめてよ。進太、やめなさい。あなたに霜月を貶める権利はないわ」

怒りで顔を真っ赤にした霜月が僕を殴りつける前に、祐子が割って入りました。いささかホッとしましたが、大きな不満が込み上げてきます。いつも祐子は最終の局面で逃げるのです。僕の勇気を見ようとはしません。

「霜月も、飲み過ぎだわ。さあ、校長さんの家に案内してちょうだい」

取りなしの言葉を言って、祐子が立ち上がります。足下をふらつかせながら、霜月も立ち上がりました。二人で、浜に向かって歩き出します。僕と晋介は座ったままです。

「一緒に来ないと、置いて行くわよ」

振り返った祐子が、子供に呼び掛ける口調で叫びました。もどかしい怒りが喉元まで込み上げてきました。

「進太さん、次のラウンドがあるよ」

晋介が声をかけて立ち上がりました。僕も歯を食いしばって後に続きます。確かに、機会は何度でもあるはずです。その機会を見送り続けてきた大人たちと違い、僕は今度こそ機会の首根っこを捕まえてやるつもりです。

全身に勇気がみなぎってきました。

砂丘と山に挟まれた高台に、校長さんの屋敷はありました。弥生の生家です。桟橋から歩いて、十分の距離しかありません。浜から見通せる位置にありますが、海に向かって植えられた樹木が平屋の屋敷を山に紛れさせていたのです。

縁側からは、樹幹越しに入り江が望めました。雪に覆われた冬の海炭市を知らない僕には快適な住居に思えます。案内してきた霜月は、夕方の出航まで一眠りすると言い残して裏の離れへ去って行ってしまいました。足がふらつくほどの酔いでは文句も言えません。

広い座敷に、僕たち三人が取り残されました。しっかりした建材を使った豪奢な造りの部屋ですが、山地の屋敷に比べると天井が低く、窓も狭いような気がします。きっと、冬の寒冷が、その様な造りを強いているのでしょう。過酷な風土がしのばれます。

部屋の中央に、どっしりした樫材の座卓が置いてありました。卓の上には大きなクリスタルの灰皿と卓上ライターが載っています。晋介が煙草を吸い出しそうで心配です。

床の間の席を開けて、三人で座りました。古い屋敷は人に緊張を強います。三人とも背筋を正して、じっと襖が開くのを待っていました。しかし、弥生のお父さんは、意に反して海の方からやってきました。

縁側の前に立った校長さんは背が高く、知性的な物腰の人です。七十歳近いとは、とても思えません。端正で柔和な表情をしていました。祐子に青酸カリを売った人物のイメージからは、遠く外れています。

「皆さん、遠くからよくおいでになった。弥生の父です。娘が喜ぶので、校長と呼んでください。さあ、堅苦しい挨拶は抜きにして、さっそく弥生の生地をご案内しますよ。十分しのんでやってください」

縁先に立ったまま、校長さんが呼び掛けました。長年教師を務めてきただけあって、人を逸らさない、よく通るバリトンです。しかし、初対面です。座敷に座った僕たちの方が面食らってしまいました。

膝をただして、丁寧に頭を下げて名乗りを上げる祐子をまねて、僕と晋介もぎこちなく挨拶しました。校長さんは笑顔でうなずいて庭に誘います。さすがにネクタイはしていませんが、薄茶の背広を着た長身は貫禄があります。右手に持った、赤い灯油缶が不似合いでした。

「お言葉に甘えさせていただきます」

校長さんのペースに巻き込まれたように祐子が答え、立ち上がって庭に下りました。どことなく慌ただしい雰囲気が気に掛かりましたが、僕たちも後に続きました。

「重そうですから、お持ちしましょう」

僕は、十八リットルの灯油缶に手を伸ばして、声をかけました。夏に向かって、まだ灯油が必要なのかと思いましたが、老人に重い荷物を持たしておくわけにいきません。

「いや、これは必要になったら使うものだよ。持ち歩くことはないんだ」

笑顔で答えた校長さんが、灯油缶を縁側に置きました。

「さあ、出掛けましょう。狭い地域だから、すぐ回れますよ」

校長さんの号令と共に、三人で後に従います。まるで小学校の遠足のような雰囲気です。でもこれは、弥生の生地を訪ねる巡礼の旅なのです。足が重くなってきます。

弥生が生まれ育った集落は、完璧に荒廃していました。昆布漁の網元をしていた分限者

の生家だけが、かろうじて残ったと言っても過言ではありません。細道の辻々に廃屋が取り残されていました。山地や鉱山の町で見慣れた光景と同じでした。失われてしまった暮らしのにおいだけが、通り過ぎる者の心を圧迫するのです。そんな僕たちの気持ちにお構いなく、校長さんはユーモアたっぷりに、弥生の幼少時のエピソードを解説します。

春を待って裸足で遊び回ったという海浜、名もない草花を愛でて摘んだという草原、そして吹雪かれたあげくにたどり着いたという社。集落から続く通学路を僕たちは歩きました。長い長い道のりです。岬に連なる低い山並みの頂上に出てしまいました。

「ほら、あれが弥生の通う学校だよ」

校長さんの声が響きました。

目の下に広大なキャンパスが広がっています。十一階建ての鉄筋コンクリートの校舎が目を圧しました。もう、説明など要りません。霜月の言っていた、私立の工業大学に相違ありません。木造の小学校を予想していた僕たちの期待は、見事に裏切られました。幼い弥生が唐突に消え失せ、あり得たかも知れない校長さんの夢が立ちあらわれたのです。全身に疲労が立ちこめます。

「弥生が生きていたら、教授になっていたかも知れないのね」

しんみりした声で、祐子がつぶやきました。

「そう、夕方にならないと帰らない。屋敷に戻りましょう」

校長さんが自慢そうな声で答えて、僕たちを促しました。

正午を回った日の光がまぶしいくらいですが、まるで白日夢を見ているようです。背筋がぞっとしました。夕日に染まって大学から帰ってくる、血のように真っ赤な弥生の姿が目に浮かびました。

屋敷に戻ってからも、校長さんの思い出話は続きました。

霜月が、十年間続けても尽きない話題だと言っていたのは、本当のようです。穏やかな表情で語る話は、聴く者を惹きつけます。さすがに長年の教諭生活で磨いた話術でした。けれど、僕たちが一番聞きたい青酸カリの話が始まるまでには、百年も待たなくてはならないような感じです。しきりに苛立ちが募ってきました。いつの間にか、日も傾きかけています。

堪えきれなくなった祐子が、切羽詰まった声で口を挟みました。

「校長さん、あなたに送っていただいた薬を、五錠飲みました。でも、運悪く、死ぬこと

ができません」

いきなり核心に迫ったのです。しかし、校長さんはたじろぎません。なに食わぬ顔で僕たち三人の顔を見回しました。大きくうなずいてから、さり気なく口を開きました。

「皆さん、遠くからよくおいでになった。あいにく弥生が留守で申し訳ない。駅まで見送りに行くこともできません」

あっさりと、僕たちに辞去を促したのです。これでは子供の使いにもなりません。僕は慌てて身を乗り出しました。

「校長さんの思いは、もう十分分かりました。次は、祐子に青酸カリを売ったときの気持ちを聞かせてください。僕たちは、現実の話をお聞きしたいのです」

思わず声が高くなっていました。校長さんが大きく目を見開きました。穏やかだった表情が消え失せ、剣呑な色が浮かんでいます。

「これまで話したことが現実だよ。皆さんは、なぜ納得して帰ろうとしないのだろう。弥生の美しい思い出だけを抱いて帰ることもできるのに、押し殺していた憎しみに、わざわざ油を注ごうとする。因果な人たちだ。それなら、敢えて答えてやろう。薬を売ったのは、死に急ぎたいという馬鹿者を殺したかったからだ。当然、代価はいただく。あいにく弱虫すぎて死に損なったらしいから、もう一錠売ってやってもいい」

苦い物を吐き出すように、校長さんが答えました。見開いた目に憎しみが溢れています。隣りに座っている祐子の肩が、ぶるぶると震えだします。

「でも、でも、私の悲しみを理解してくださったから、だから、薬を譲ってくれたのでしょう」

校長さんの変身を認めたくないように、祐子が未練たっぷりの声で言いつのりました。上擦った声です。

「何を言う。お前ごときに、一人娘に先立たれた親の悲しみが分かるか。死にたいのは私で、けして、お前ではない。死ぬに死ねずに、悲しみの極まりに沈んだ私に、勝手な世迷いごとを送り付けて死を願うとは、何様のつもりだ。有り余る憎しみを抑圧し、やっと弥生と生きられるようになった私の平穏を乱すことなど、だれにも許さぬ」

祐子を睨み付けて答えた声は、冷え冷えとしていました。校長さんの心の中で保たれていた平穏と憎しみのバランスが、一挙に崩壊していく予感がしました。ひょっとすると、この日が来るのをひそかに待ち望んでいたのかも知れません。凍てついた声の底に、暗い喜びの響きが混じっています。

僕の喉元に、祐子に警告しようとする、声にならない叫びが込み上げてきました。しかし祐子は、なおも声を振り絞って、校長さんに理解を求めました。

「分かるわ。分かります。私も、大切なものを失い続けてきたのです。愛をなくし、友情をなくし、自分の分身として夢を繋いだMさえ、私を置いてどこかへ行ってしまいました。もう、生きる希望がない。だから、だから青酸カリを送ってくださったお父さんに会いに来たのです。どうぞ、死の希望を与えてください」

縋り付かんばかりに訴えた祐子を、校長さんは蔑んだ目で見据えました。腹の底に溜まっていた言葉を吐き出すように、背筋を伸ばして口を開きます。

「どうやら、十五年間耐えてきた憎しみを解き放つ日が来たらしい。だが、こんな愚か者が私を救いに来るとは皮肉なものだ。私はお前が話していたMも、ピアニストのこともよく知っている。死の直前に弥生が送ってきた手紙に、すべてが書かれていた。弥生はMの友情と、ピアニストの愛に包まれて幸福だと告げていた。その幸せに殉じたいと、希望を書き連ねていたんだ。残酷なことだ。父を捨て、よこしまな希望に殉じるというのだ。何が幸せだ。そんなものはこの世にない。ひたすら生きる、人の営みの異称が幸せという言葉だ。この海炭市で、私と二人で生きる限りは無縁なものだ。死の知らせを聞いた私の全身を、憎しみが覆った。そう、悲しみや悲哀でなく憎悪だった。憎い、本当に憎い。幸せという絵空事が、弥生の生を奪い去った。私も死にたかった。しかし、溢れんばかりの憎しみを抱いては、とても人は死ねるものではない。私は弥生の元へ行くこともできず、憎しみを圧殺して追憶と共に生きる道を選んだ。いや、それしか道がなかったのだ。十五年を経て、平穏を装いきったと思ったとき、愚かしい便りが届いた。安っぽい死への感傷を訴える、お前の言葉が引き金を引いた。封印してきた憎悪の琴線を切断したんだ。死にたい奴は殺してやる。だから、金を取って青酸カリを送ってやった。ひと思いに死ねばいいのだ。それが、死に損なったあげくに、今度は私に会いに来るという。とんだ大馬鹿者だ。それでも、平穏に帰ってもらおうと努めていたのに、お前たちは、積もり積もった私の憎悪を足蹴にした。絶対に許さん」

全身から放射された憎悪が、僕たちを凍り付かせました。祐子の顔面が蒼白になり、唇がわなないています。

「どうして、私が憎まれるの。死にたいくらい空虚な気持ちを理解してくれるのは、弥生のお父さんしかいないと思っただけだわ。薬をいただいて、本当にうれしかった。ぜひお会いして、勇気を持って死にたいと言いたかった。お願いです。お父さんに憎まれたくな

い。お父さんが死を望むのなら、ぜひ、ご一緒させてください」

祐子の叫びが部屋に満ちました。校長さんとは対照的に、熱に取り付かれたように震えています。けれど、全体がピントのはずれた写真のようで、リアルな迫力がありません。過剰な感情だけが空回りしているみたいです。晋介が、大きくあくびをしました。

「お願い、私も、死なせて」

再び、祐子の声が響き渡りました。夕暮れが迫った座敷に狂気が溢れ出ます。

「望むところだ。一緒に来なさい」

低い声で唸って、校長さんが庭に飛び降りました。祐子も立ち上がります。

校長さんが、縁側に置いてあった石油缶を持ち上げ、頭から液体を降り注ぎます。後に続いた祐子にも、液体を振りまきました。ガソリンのにおいが鼻を突きます。

「さあ、望み通りにしてやる」

庭先で仁王立ちになった校長さんが大声で叫び、右手で握った卓上ライターを高々と振りかぶりました。カチッという音と共に、ターボ・ライターの先に青い炎が灯ります。

「何をするんだ」

一声叫んだ晋介の声が、妙に間が抜けて響きました。

「みんな、みんな、死んでしまえ」

憎々しい声で叫んだ校長さんが、縁側にライターを投げ付けました。足下で炎が上がり、祐子のカーディガンが燃え立ちます。

「ヒッー」

祐子の悲鳴が轟きました。

僕は素早く、祐子を地面に突き飛ばしました。後を追って庭に飛び降り、カーディガンを引きむしって砂をかけます。ウールの焦げる嫌なにおいが立ちこめました。祐子の長い髪も焼けたようです。パープルのワンピースが裂けて、白い素肌が露出しました。しかし、危ういところで火を消し止めました。

「弱虫め、また生き残ったか。恥を知れ」

校長さんが毒々しい声で罵りました。再び石油缶を大きく振って、残ったガソリンを僕と祐子に浴びせかけます。揮発性の甘いにおいが庭中に満ちます。

縁側に落ちているライターに、校長さんが手を伸ばしました。

「クソジジイ、死にたけりゃ、一人で死ね」

晋介が叫ぶと同時に、右手に持ったジッポーから赤い火が上がりました。無造作に校長

さんに向かってジッポーを投げ付けます。

「ウワッー」

絶叫と共に、校長さんの身体が火だるまになります。

赤黒い煙が宙に舞い上がりました。人型に燃え上がった炎の中からひときわ高く声が響きました。ヤヨイ、と叫んだように聞こえましたが、ゴウゴウと鳴る炎の音に掻き消されてしまいました。オレンジ色の火の中で、一瞬伸び上がった校長さんが無惨に地面に倒れ伏します。

黒こげになった死体を目にした祐子が、再び悲鳴を上げました。半裸のまま立ち上がって泣き叫びます。両手で耳を覆って叫び続け、突然、すごい速さで浜に向かって駆け出しました。僕と晋介も慌てて後を追います。

「レトロジジイが死んだ。スカッとしたね」

並んで走る耳元で、晋介が叫びました。僕も同感です。ライターを投げ付けた晋介の行為を責める気にもなりません。

かなり前方で、祐子が海に走り込んでいきました。満ち潮が唸る荒々しい海です。今日は大潮だと言っていた、霜月の言葉を思い出しました。僕たちの足が止まりました。死への希望を押し止める術は、僕も晋介も持っていません。

8　海辺の情景

今朝見たときと、海はまるで変わっていました。

連続して沖から押し寄せる波で、狭い入り江はラッシュアワーのようです。斜光を浴びた波頭が海面の至るところで重なり合い、黄金色にきらめいています。次々に波が砕け、潮の飛沫が虹色に染まりました。桟橋の先にもやった霜月のイカ釣り船が、激しく上下動を繰り返しています。

浜に立つと、絶対的な潮の圧力が怒濤となって打ち寄せて来るようで、めまいがしそうになります。汀から沖に向かって続いている杭の列は、既に半数が水没してしまっていました。

日の光が乱反射する波間に、小さい人影が見えます。死を求めて海に入っていった祐子の姿です。人影といっても、かろうじて肩から先が海面から露出しているだけです。大波が押し寄せる度に、逆光になった頭が波間に沈みます。砂浜に立つ僕たちから、三十メートルほど沖に出た地点でした。

「本当に死ぬ気みたいだ。入水自殺の方が彼女にはぴったりだ」

横に並んだ晋介が感動の声を上げました。まぶしさに眉をひそめてライカを構えます。剥き出しの夕日を浴びた全身が、オレンジ色に輝いています。

「死ねやしないさ。僕にも経験がある」

思わずつぶやいてしまいました。意識したわけではないのですが、晋介の感動に水を浴びせるのに十分なほど、乾ききった声になっていました。横顔に張り付いてくる視線を妙に意識してしまいます。でも、今は恥ずかしい体験を話すシーンではありません。死のうと決意したときは、だれでも真剣なのです。たとえ知っていても、結果を告げるのは祐子への冒涜のような気がしました。僕は沈黙に耐えます。

「なぜ、死ねないのさ」

晋介が大きな声で問い掛けてきました。答えざるを得ません。

「生への本能だよ。いくら海中に潜っても、息苦しさのあまり浮かび上がってしまうんだ。何回試みても同じさ。やがて心も身体もぼろぼろに疲れ切って、虚しく水から上がってくる。その後が勝負だ。僕は改めてチャレンジできなかった。人間には、死へ向かう本能なんかないんだよ。見ていれば分かるさ」

突き放した声で答えましたが、晋介の返事はありません。神妙な顔をして打ち寄せる大波の先を見つめています。祐子の全身が水中に没しました。僕たちは息を呑んで海原を注視します。しばらく経つと、波間に裸の尻が浮き上がりました。激しい潮の流れが、破れた衣服も剥ぎ取ってしまったようです。苦しそうに身悶えした尻が再び海中に没します。すぐさま肩まで浮上して、大きく息を吸い込みました。後は、何度試みても、無惨な事実を繰り返すだけでした。残酷な眺めです。

「かわいそうだね。生きている方がよっぽど楽だ。滑稽だよ」

吐き出すように晋介が言って、視線を沖に移しました。盛り上がった水平線のすぐ上に大きな夕日が燃えています。

「でっかい夕日だ。負けたね。俺の街の夕日よりスケールが大きい。でも、一色だけだよ。変化したって、赤以外は、オレンジとパープルくらいしかないんだよ。海辺は単純なんだ。俺の夕日は違うぜ。ねえ、進太さん、違うんだよ」

賞賛の声が侮蔑に変わり、協賛を求めてきました。目の前で、必死に死に至る道を模索している祐子が聞いたら、目を丸くするでしょう。しかし、人の生き死になど、こんなものなのかも知れません。だれもが一つのことに関心を持っているわけではないのです。すぐ側で繰り広げられている生死の格闘を、簡単に相対化してしまう晋介の想像力は強靱なものです。

「あれ、もう上がってきたよ」

晋介の視線は目まぐるしく変わるようです。僕も巨大な夕日から目を落としました。オレンジ一色に染め上げられた海をバックに、黒い人影が歩いてきます。虹色の潮の泡を蹴って海から上がってきた祐子は、まるで疲れ果てたビーナスのようです。よろよろとした歩みが均整のとれた裸身に似合いません。逆光になった黒い顔の中で、見開かれた目だけが妖しく燃えています。

僕は引き寄せられるように汀に進みました。輝く後光を背負った裸身が目の前で悽愴な美を放射しています。轟々と鳴り響く波の音に混じってライカのシャッター音が連続しました。晋介の貪欲な目が一瞬のきらめきをフィルムに焼き付けたのです。

「お願い。殺して。死にたいのよ」

耳に飛び込んできた祐子の声は、たどたどしく聞こえました。でも、甘えは感じられません。言葉を選んで発声した理性の裏側に、絶望がかいま見えます。得られなかった死を乞う、執念が悲惨でした。

「進太、お願い」

もう一度訴えた裸身が、汀にうずくまりました。

「帰ろう。辛くても、生きろっていうことだよ」

陳腐なせりふが口を突きましたが、他に言葉を思い付きませんでした。三歩前に進んで、うずくまった肩に手を置きました。氷のような素肌の冷たさが掌から胸の底に伝わってきます。打ち寄せる波が足を濡らしました。祐子の脇に手を差し込んで立ち上がらせます。豊かな乳房が手の中で弾みました。突然、胸がきゅんとなりました。祐子の肉体に無関心だったことに気が付きました。とたんに頬が熱くなります。視線を落とすと、剃り上げた股間で可愛らしい性器が光っていました。死など必要ない肉体です。抑圧した性を解放しろと怒鳴りたくなります。

僕の手の温もりが、冷え切った祐子の心に伝わることを念じて抱き締めました。

「いやっ、死にたいの」

一声叫んだ祐子が手をふりほどき、身を翻しました。驚くほどの感覚の鋭さです。僕を一瞥した目の底に黒い炎が揺れていました。

ふらつく足で波を蹴って、祐子は晋介に迫ります。後ずさる晋介を追って砂浜に身を投げ出し、足元に縋り付きました。なりふり構わぬ取り乱しようです。砂にまみれた裸身が醜く見えます。

「お願い。殺して。死にたいのよ」

同じ言葉で訴えました。玩具をねだって泣きわめく幼児にだって、それなりの自制があります。素っ裸で子供にねだる祐子は論外です。最悪の展開でした。ずぶ濡れの裸身に縋り付かれた晋介の顔に当惑の色が浮かび、瞬時に怒りの色に変わりました。

「よせよ、汚いな。スニーカーもパンツも潮でべとべとだよ。迷惑かけずに一人で死んでくれ。殺したくなるぜ」

叱声が飛びました。尊厳を無くした祐子を完璧に見下した言い振りです。

「殺してよ」

即座に祐子が答えました。売り言葉に買い言葉です。夕日を浴びた晋介の赤い顔が、怒りでなお一層赤く染まりました。

「大層な騒ぎはみっともねえよ。茶番は終わりだ。すぐ望みどおりにしてやる。でも、死ぬってことは苦しいことだ。後悔の声は聞かないよ」

最後通牒のように、ゆっくり言った晋介の顔を祐子が見上げました。見開いた目が、挑

戦的に輝いています。
「いつだって、私は苦しいのよ。心の苦しさに比べれば、肉体の苦痛なんて何ほどのことはない。死の希望さえかなえられれば、私はいい」
「上等だよ。売れるほどの希望を俺が背負わせてやる。進太さん、カメラを頼むよ」
やけに明るい声で言って、晋介が祐子を蹴りつけました。白い裸身が濡れた砂浜にうつ伏せに倒れました。砂まみれの丸い尻が、淫らにうごめいています。目を反らせた僕にライカＭ２を預け、晋介はゴミの山に歩いていきます。黒く汚れた太い麻縄の束を拾い上げ、片手にぶら下げて戻ってきました。
「さあ、過酷な死を楽しませてやるよ」
横たわった祐子に声をかけて両腕を掴みました。そのまま裸身を引きずって、満ち潮が打ち寄せる汀へ入っていきます。
二メートルの間隔で横に並んだ杭の前で晋介が足を止めました。打ち寄せる波が絶え間なく杭の根元を洗っています。晋介が祐子の前に屈み込みました。左右の手首を二本の麻縄で厳重に縛り上げます。両手を横に広げさせ、それぞれの縄尻を左右の杭の根元に縛り付けてしまいました。祐子はもはや、どう足掻いても砂浜から身体を起こすことはできません。汀にうつ伏せになった顔を、寄せては返す波が洗っていきます。
「さあ、どうだ。これで満足だろう。もう、逃げられないぜ。確実に死ねる」
陽気な声で、晋介が捨てぜりふを投げ掛けました。
「満足よ。私の死をよく見ているがいいわ」
大きな声で答えた祐子の語尾が、寄せる波に打ち消されました。恐ろしい光景を前にして、僕の足は小刻みに震え続けています。ボタンを掛け違えてしまったような、ちぐはぐな思いが頭の中を交錯していきます。美しい夕日の中で始まった残虐な事態が、まるで幻のように思えてしまいます。けれど、わずか五メートル前方に、縛られた裸身がうつ伏せになっているのです。祐子の両手を縛った杭の高さは一メートル以上あります。その半分の高さまで無数の貝がへばりついているのです。満ち潮の位置です。祐子の全身はいずれ、確実に海中に没してしまいます。逃れようもない死が襲い掛かってくるのです。これは殺人でしょうか、それとも自殺幇助なのでしょうか。僕にはよく分かりません。残虐な死を受容しようとする、祐子の確固とした意志だけが波の中に屹立しています。
「息が止まるまでの時間は、思いの外早いよ。頭まで潮が満ちればいいんだ」
砂浜に戻ってきた晋介がつぶやきました。さすがに緊張した声です。僕は答えることが

できません。預かっていたライカを黙ったまま手渡しました。
「死にたいくらいだから、恐怖もない。意外に楽な死に方かも知れないね」
また晋介が声を掛けてきました。僕の答えを待っているのが痛い程よく分かります。暴力的な行為への評価を求めているのです。
「進太さんは、縄を解くこともできる」
沈黙している僕に、言葉の矢が打ち込まれました。晋介の言うとおりです。祐子を縛り付けたのは晋介ですが、僕には縄を解くことができます。瞬時に様々な感情が脳裏に渦巻きます。最後に祐子のことを考えました。一瞬の苦痛の先に平安が待つなら、死も希望の一つに違いないと信じたくなります。
目を大きく見開き、うつ伏せに横たわる祐子を見つめました。波が引くと両手を広げた裸身があらわになります。続けて、次の波が打ち寄せます。白い裸身を波飛沫が覆いつくします。僕は立ち尽くしたまま、祈祷のように晋介の言葉を繰り返しました。
「楽な死を、楽な死を、楽な死を」

海面も空も真っ赤に染まっていきます。
晋介が軽蔑したように、赤一色に染め上げられた血のような夕焼けです。打ち寄せる潮の響きが高まります。身動き一つしなかった祐子の裸身が苦しそうに動きました。だいぶ潮が満ちたのでしょう。波が退いた後でも、呼吸がしにくくなったようです。また波が打ち寄せました。波間から突き出た尻が苦悶に打ち振られます。生への本能は、やはり残酷でした。呼吸の苦しさに耐えかねた祐子が、自由になる下半身で悶えたあげく、立て膝になって腰を持ち上げました。僕たちの目に、大きく開いた尻の割れ目を晒したのです。
海中から突き出た豊かな尻は、残酷なほど滑稽に見えます。寄せる波が尻を越えて浜辺に打ち寄せてきます。呼吸ができない苦悶の時間を、祐子は尻を打ち振って耐え続けます。引いていく波が股間を流れ去る瞬間、縛られた両手を振り絞って鋭く息を吸い込みます。まるで波の動きが肉体を弄んでいるような、卑猥な眺めです。海が祐子を犯し、死へ誘っているのです。しかも、苦悶の時間は着実に長く、呼吸できる瞬間は確実に短くなっていきます。
再び大波が襲い掛かりました。一瞬こわばった尻が苦悶にうごめきます。大きく開いた股間で収縮する陰部が、快楽を追っているようにさえ見えます。波が引き始めると陰部が弛緩して、次の緊張に備えます。じっと見つめている僕の股間が熱くなってきました。波

のリズムは祐子の官能のリズムです。他愛なく勃起してしまいました。
「進太さん、今生の名残だ。波だけに犯させているいわれはない。やってやりなよ」
晋介が声を掛けてきました。慌てて横を見るとライカを構えたままです。膨らんだ股間を見られたわけではありませんでした。でも、図星を突かれた僕は全身が真っ赤になってしまいました。黙ってジーンズを脱ぎ捨てます。この海岸には男は二人しかいないのです。そのうちの一人がセックスを勧めたのです。断るには理由が要りますが、僕に理由はありません。何よりも、ぼう然と祐子の死を観察するより、僕のペニスで、はなむけを捧げる方が、よっぽど情にかなっています。黒いビキニパンツを脱ぎ捨てると、上を向いたペニスが夕日を浴びて真っ赤に染まりました。
僕は、悶える尻に向かって一散に駆け出しました。
「進太さん、見直したよ」
朗らかな声が背に響きました。不覚の涙が目からこぼれ落ちます。祐子の肉体だけを求め、波を蹴立てて走りました。

僕を待っていたように、突き出された尻に抱き付きました。中腰になって股間にペニスを押し当てます。熱く燃え立ったペニスが冷え切った粘膜に包まれていきます。苦しさに打ち振られる尻が、呑み込んだペニスを振り切ろうとしているようです。
両手で冷え切った尻を抱え、燃えたぎった熱のすべてを祐子に放出しようと、全神経を股間に集中しました。とたんにペニスの先端に熱い感触が伝わってきました。僕の全身が喜びに震えます。死に直面した祐子が、官能を求め始めた予感がしました。打ち寄せた高波が顔を掠めていきます。呼吸を断たれた祐子が、僕の肉の下で苦悶します。陰部が収縮し、すごい力でペニスが圧迫されました。もう、僕の頭の中は真っ白です。祐子は全身を硬くして苦痛に耐えます。まるで、死を踏み越える官能を待っているかのようです。
ゆっくりと波が引いていきますが、全身で踏ん張っても、祐子の口は水の外に出ません。たまらず海中で咳き込むと同時に脱糞したようです。波が洗うペニスの根元が熱い物体に覆われました。僕はもう射精の一歩手前にいます。
ピュー
長く尾を引いた、かん高い音響が耳元を掠めていきます。ぎょっとして下を見ました。僅かに潮の引いた瞬間を捉えて、祐子が鋭く息を吸い込んだ音でした。あまりに凄惨な姿に僕の全身が戦きます。急にペニスが萎えて、抜けそうになってしまいました。

「何をするか」

突然、大音声が響き渡ると同時に、強い力で突き飛ばされました。尻餅をついた僕の目の前に、霜月の巨体がありました。真っ赤な鬼のような形相です。殺されるのかと思いました。でも、霜月は波間にしゃがみ込んで大きく息を吸い込みます。そのまま祐子の顔がある辺りに首を突っ込みました。海中で、祐子に口移しで空気を送っているのです。続けて三回、同じ行為を繰り返してから、まだ波に浸かっている僕を怒鳴りつけました。

「進太、縄を解け。急げ、ポケッとしていると殴り殺すぞ」

オシッコをちびりそうなほど恐ろしい剣幕でしたが、僕はなぜかホッとしました。縮み上がっていたペニスが再び勃起してきます。

「急げっ」

もう一度霜月が怒鳴り、大きく息を吸い込んで海中に潜りました。急に霜月が主役になってしまいましたが、仕方ありません。僕は左右の杭を回って手首を縛った縄を解きました。

霜月が祐子を抱き上げて海岸に向かいます。二人の向こうにライカを構えた晋介が見えました。祐子を犯している僕の姿を、カメラに収めたに違いありません。なんのことはない、僕はモデルに使われてしまったようです。

「あっ、まずい、祐子は水を飲んでる。呼吸も弱いし、身体が冷え切ってしまっているぞ。すぐに温める用意をするんだ。このままでは死んでしまうぞ」

砂浜に上がった霜月が、晋介を怒鳴りつけました。晋介は平然とシャッターを切り続けています。

「そりゃあ、死ぬ気でいたんだから、当然だよ。ゴミの山の向こうにマットレスがあった。勝手に温めればいいさ。でも、あいにくシーツはなかったようだよ」

ライカを構えた晋介が大声で答えました。相当人を食った態度です。祐子を抱いた霜月は、一瞬向きを変えましたが、結局、砂を蹴り飛ばしてゴミの山に向かって歩き出しました。

僕は、股間から海水を滴らせて砂浜に上がっていきます。まじまじと僕を見た晋介が大笑いしました。

「あれ、進太さんは、まだ勃起している。せっかく男らしく海に飛び込んだのに、中途半端じゃ、その男もすたるよ」

晋介が言い捨てて、元気に霜月と祐子の後を追っていきます。僕には気の利いた答えを返す気力もありません。うつむいて、砂の上に脱ぎ捨てたビキニショーツとジーンズを拾い、濡れた肌の上から穿きました。情けなさで最悪の気分です。このまま回れ右をして帰りたくなる気持ちを抑え、ゴミの山を見下ろす砂丘の中段に陣取った晋介を追っていきました。スニーカーに入った砂粒が不快で、歩みが乱れます。砂に足を取られて二回も転んでしまいました。お陰で濡れたラガーシャツも砂まみれです。

「大きな身体に似ず、霜月は意外に小心だね。冷え切った祐子を、濡れた服を着たまま温めようとしても無駄だよ。逆に熱を奪ってしまうと思うよ」

晋介の横に座ると同時に、霜月の行動を解説されてしまいました。三メートル下の砂浜の隅に黒いマットレスが投棄されています。祐子の白い裸身を横たえた霜月が、太い両手で祐子の素肌をマッサージしています。時折、濡れた服が祐子の裸身に絡みつきます。夕日の残光を浴びた祐子の裸身は、ここからでも蒼白に見えます。手足が微かに動くので、命に別状はなかったようです。幾分ホッとした気持ちと、妙な虚脱感が胸の奥を吹き抜けました。空しさが込み上げてきたとき、霜月が立ち上がりました。

見下ろしている僕たちに気付いた霜月は、怖い顔で睨み付けてから濡れた作業服を脱ぎ捨てました。十年間を潮風に吹かれた逞しい裸身があらわれました。堂々とした体躯が再び横たわります。潮焼けした黒い肌が、祐子の白い肌の上を力強く全身でマッサージします。躍動する尻の筋肉が見事でした。シャッターの音が連続して響きます。張り詰めた呼吸を通して、晋介の緊張が伝わってきます。

「結構暗いから、絞り開放で八分の一秒のシャッターなんだ。手持ちに強いライカならではの芸当だよ」

得意そうな声が響きました。自分の表現に熱中できる晋介が、つい羨ましくなってしまいます。何もせずに座っている自分が情けなくなりますが、無理をして見ることに専念します。

「バイク、私を抱いて」

突然、女の声が聞こえました。祐子の声です。それも、心の底に圧殺してきたバイクを求めたのです。僕は耳を疑ってしまいました。全身を緊張させてマットレスを見下ろします。

「さあバイク、さっきのように、私の中に入ってきてちょうだい。いつかみたいに、私の身体を官能の喜びで震えさせて欲しいの。ねえバイク、お願い」

はっきりした言葉が聞き取れました。間違いありません。祐子は官能を求めているのです。僕が波間で感じた予感に間違いはなかったのです。頬が熱く燃え上がり、ペニスがまた勃起してきました。

「俺は、バイクじゃないよ。霜月だ。祐子は、死にかけて混乱しているだけだ」

霜月が答えました。馬鹿な男です。言葉だけに反応して、祐子の気持ちを推し量ろうともしません。

「いいえ、バイクでなくていいの。私も弥生じゃない。でも、一緒に官能を追うことはできるはずよ。私たちには肉体がある」

凛とした声が響き、横たわっていた祐子が霜月に抱き付いていきます。身を硬くした霜月の首にむしゃぶりついて、うなじに舌を這わせました。両足を大きく開き、霜月の太い両足を股間に絡め取ります。

「スゲーヤ」

晋介が感嘆の声を上げて、ライカを構え直しました。断続してシャッター音が響きます。スロー・シャッターの余韻に乗って、祐子と霜月の裸身が絡み合います。

仰向けになった霜月の股間で大きなペニスが勃起しました。裸身を跨いでうずくまった祐子が、一息にペニスを口にくわえます。喉の奥深く迎え入れたペニスを数回しごき上げた後、舌で亀頭を愛おしむように舐め回します。たまらず喘ぐ霜月の口許に、祐子が尻を下ろしました。首をもたげた霜月が両手で尻の割れ目を押し開きます。剥き出しになった股間で陰門の襞がうごめいています。霜月が太い指先で股間を責めました。陰門と肛門にそれぞれ指を挿入された祐子の口から、歓喜の呻き声が溢れます。霜月の豪快な喘ぎと、祐子のあられもない呻きが波の音に交じり合いました。

「もう、やってられないや」

横から声が響き、晋介が立ち上がりました。さすがに辺りは暗くなっています。ほのかに白い水平線の上に、真ん丸な月が上がっています。大潮の絶頂なのでしょう。相変わらず波の音が轟き、男女の睦み合う声が混じってきます。月の光を浴びた二人は、重なり合って腰を使っています。もう三回も絶頂を極めたのに、その度に体位を変えて挑み合っています。僕も晋介の言葉に同感でした。

「まったく、大層な騒ぎで恐れ入ったよ。死にたかった連中が打って代わって乱痴気騒ぎだ。もう俺は、コンテストの会場に行くよ。進太さんはどうする」

晋介の嫌みな言葉にも、もう笑って答えられます。今日一日で一切が変わったのです。

最高の宵でした。
「僕は、最後まで見届けてから祐子と帰る。服も着替えなきゃならない。明日の朝一番に会場で会おう。僕も晋介の作品が見たい。約束するよ」
明るい声で答えました。晋介の苦笑が帰ってきます。コンテストの会場は午後八時まで開いていますが、この調子では、祐子と霜月のセックスは閉会近くまで続きそうです。焼け死んだ校長さんの始末もありました。僕は残るしかありません。
「じゃあね、進太さん、明日はきっとだよ。会場は、午前十時に開くからね」
念を押した晋介が、ライカを揺すりながら砂丘を登っていきます。白い月の光がスリムな身体を大きく見せていました。

闇が海岸を覆い、白々とした月の光が波に反射しています。
濡れた服から、さすがに肌寒さが伝わってきました。眼下のマットレスに寝そべっていた二つの裸身が、ようやく起き上がります。二人とも足を投げ出して寄り添って座り、霜月が左手で祐子の肩を抱きます。祐子の細い首が霜月の逞しい肩にもたれ掛かりました。二人とも無言のままです。素っ裸でいても、寒さを感じない様子です。見下ろしている僕は、風景に溶け込んでしまったような気がしました。いい加減で審判の役回りを演じようと思います。寒さに身体を揺すってから、小さく咳払いをしました。
「祐子、風邪を引くよ。もう帰ろう」
月並みな言葉で呼び掛けてみました。二つの裸身が一斉に振り返り、僕を見上げました。二人とも満ち足りて、落ち着いた顔をしています。セックスが痴呆を誘発する症例を見る思いがしてしまいました。
「あら、進太。まだいたのね。私は帰らないわ」
祐子が答えました。波の音に乗った、歌うような響きでした。しかし、内容は衝撃的です。真意を問いたださなければなりません。
「だって、ホテルをリザーブしたままだよ」
「いいえ、ホテルに帰らないだけじゃなくて、市にも帰らないのよ。私は霜月と一緒に、海炭市に住む」
ゆるぎない答えが返ってきました。祐子の横で霜月の裸身がビクッと震えました。すかさず僕は切り込みます。
「よしなよ。霜月は弥生を忘れられない。今だってきっと、弥生を思い浮かべながら、祐

子を抱いたんだ」

口を突いた言葉は残酷でした。霜月が祐子の肩から腕を外しました。どうやら図星だったようです。沈黙が落ちます。月の光が二つの裸身を照らしています。巨大な体躯の横にある祐子の裸身が、やけに小さく見えました。目頭が熱くなってきました。

首を振って立ち上がった祐子が、僕を睨み付けます。

「それが、なんだって言うの。私の身体の中で、霜月は四回も絶頂を極めたのよ。進太も一部始終を、そこで見ていたでしょう。だいじょうぶ、私がきっと、弥生を忘れさせてみせるわ」

断言した祐子は、もう死を求めていた祐子ではありません。大きく開いた股間から精液が滲み出ています。月光に光る粘液は太股を伝い、ふくらはぎへと回っていきます。性のエネルギーを充填した肉体が、更なる官能を求めているように見えます。死への願望を断ち切らせた程のエネルギーなのです。僕は思わずたじろいでしまいました。霜月が、祐子の裸身を見上げて立ち上がりました。

「祐子の言うとおりかも知れない。妄想を追うのは校長一人でたくさんだ。焼死した校長の遺体を、屋敷の庭で見付けたよ。俺はびっくりして、足跡を追ってきたんだ。済んだことは仕方がない。後始末は俺がするよ。この辺は人気もないから、まだ間に合う。祐子はひとまずホテルに戻っていた方がいい。後で必ず迎えに行く」

しっかりした声で呼び掛けました。常識が甦りました。

「そうだよ。ホテルに帰って風呂に入ろう。服を着るんだ」

素早く僕が口を挟みました。祐子が大きく首を左右に振ります。

「いいえ、私は、生まれたままの姿で霜月の所へ行きたいのよ。持ってきた荷物はすべて要らない。さあ、霜月、行きましょう」

霜月の大きな手を握った祐子がマットレスを下ります。さすがの霜月も現実の官能に未練があるのでしょう。逞しい裸身が従っていきます。

僕は慌てて砂丘を駆け下りました。遠ざかっていく二つの裸身に大きな声で呼び掛けます。

「色キチガイ、セックスするのが、そんなにいいのか」

悲痛な声を出したつもりでしたが、耳に届いた叫びはごく軽い響きでした。歩みに連れて揺れていた悩ましい尻の動きが止まり、祐子が振り返ります。

「ええ、とってもいいわ。Mの気持ちがやっと分かった。ねえ、進太、Mがいなくても生

きていけそうだわ」

明るい声が戻ってきました。僕の口許に苦笑が浮かびます。死んでしまうより、官能を求める方がいいに決まっています。でも、Mの気持ちが分かったなどと言って欲しくありません。抑圧してきた性を解放したくらいで舞い上がってしまった祐子に、はっきり言ってやることにしました。

僕は、大きく一歩を踏み出しました。

「祐子が官能を求めるのは勝手だ。でも、Mは、希望のために官能を追ったんだ。死ねないから官能を求めたんじゃない」

聞いていた祐子の顔が、見る間に泣き顔に変わりました。けれど、すんでの所で踏みとどまります。奥歯を噛みしめて僕を睨みました。どうやら、泣き虫の祐子は消え失せてしまったようです。

「そんなことは、百も承知よ。私は今、過去から一歩を踏み出したところなの。Mに代わって自分を祝福したくらいで、目くじらをたてる進太が子供なのよ。私は、進太の方が心配よ。あなた一人で、Mを捜し出せるの。ねえ、自分の戸籍を見たことがあるの」

静かに答えた祐子が、最後に突飛なことを口にしました。僕は反射的に首を左右に振ります。

「海炭市に来る前に、Mの戸籍を取ってみたのよ。当然進太の戸籍でもあるわ。Mの両親も分かったし、生まれ故郷も分かった。Mは晋介が住む、夕日のきれいな街で生まれたのよ。私の代わりに、晋介に連れていってもらいなさい。Mを捜す手掛かりが掴めるかも知れないわ」

耳の底で祐子の声が反響しました。僕はぼう然と砂浜に立ち尽くしたまま、手を振って去っていく二つの裸身を見送りました。

未来に一歩を踏み出したという祐子が、いつもの説教の代わりに、奇妙な事実を告げたのです。まるで波間で揺れていた祐子のように、あやふやな置きみやげでした。

9　旅立ちの予感

ホテルのツインルームで、僕は一人で目覚めました。隣のベッドはメイクされたままです。晋介はホテルに戻らなかったようです。

手荷物一つない晋介は、どこに泊まっても不自由はありません。けれど、始めからいなかったような雰囲気もあります。ツインルームに一人で泊まっていて、怖い夢にうなされてしまった。目覚めてみたら夢と分かり、当惑して辺りを見回している。そんな気分になる寝覚めでした。

寝ぼけ眼に映る無人のベッドが、不審と不安で揺れています。海炭市に着いた夜から続いた異常な出来事は果たして、僕が実際に体験したことだったのでしょうか。

衝撃的な疑念が脳裏を走りました。慌てて毛布をはね除け、起き上がります。厚手のカーテンの隙間から日の光が射し込んでいました。テレビの上の時計の針は午前八時を回っています。改めて隣のベッドを見下ろしました。背筋を肌寒さが掠めていきます。晋介の不在がもたらした不安に、全身が震撼しました。ブルッと身体が震えます。思わず裸の背を丸くして腕を組み、うなだれてしまいました。温かな素肌の感触が手に伝わってきます。股間で勃起したペニスが僕を見つめています。てらてらと光る亀頭の先を見つめていると、過激な性の感触が甦りました。

打ち寄せる波が、白い尻の割れ目で砕け散ります。海水に呼吸を断たれた祐子が、全身を震わせて苦悶します。陰部が強い力で収縮し、このペニスを強烈に締め付けたのです。その瞬間、祐子が官能を求めたと、僕は信じました。

死を踏み越えて再生した祐子。そして、人型に燃え上がって死んだ校長さん。そのすべての光景が脳裏に渦巻きました。でも、あれほどの事実の集積が、一日のうちに本当に起こったのでしょうか。

圧縮された記憶がツインルームに流れ出していきます。身体全体ががらんどうになってしまう恐怖が、喉元まで込み上げてきました。

素っ裸でシャワールームに跳んでいって、扉を開きました。真っ先に脱ぎ散らかした服が目に入りました。汚れたスニーカーに素足を入れると、濡れた感触が不快でした。海水が染み込み、砂にまみれた布地が事実の存在を実感させてくれます。

夕べ、疲れ果ててホテルに帰り着いた僕は、シャワーを使うやいなや、ベッドに潜り込

んでしまったのです。なにかしらホッとした気持ちになりましたが、まだ安心はできません。証人となる祐子も晋介もいないのです。デイバッグに入れてきたジーンズと白いトレーナーに袖を通して、部屋を出ました。

フロント係の老人は、くどくどと理由をこじつける僕に、笑顔で祐子の部屋の鍵を差し出しました。やはり、部屋はリザーブしてあったのです。はやる気持ちを抑えて、慎重に祐子の部屋のドアを開きました。一目で見て取れる狭いシングルルームは完璧にメイクされていて、使われた形跡がありません。急いでクロゼットを開けると、見慣れたボストンバッグが置いてありました。祐子が海炭市にいたことは間違いありません。圧縮された記憶はすべて真実でした。新しい朝が始まっていたのです。

約束どおりに写真コンテストの会場に行けば、晋介に会えると確信できました。午前十時が待ち遠しくなります。

安心すると同時に、今度は祐子に腹が立ってきました。校長さんの死体の始末はできたのでしょうか。目の前のボストンバッグの処理も考えなくてはなりません。異常な記憶の集積した海炭市で、再び祐子を訪ねる気には到底なれません。散々思案したあげくに、宅配便で山地のドーム館に送ることにしました。

ようやく気が晴れた僕は、一切の荷物を持って食堂に向かいました。晋介が泊まらなかった部屋を見たくなかったし、スクランブル・エッグと温かいパンを、たらふく食べたかったのです。

海炭市のメインストリートの角に、写真コンテストの会場がある百貨店がありました。ビルの側面に設置された電光掲示板が、写真展の開催を赤い文字で流し続けています。

会場は、九階の催事場です。僕は、エレベーター係の制服を着た女性に階数を告げました。他に客はいません。開店早々の、平日の十時では無理のないことでしょう。エレベーターは真っ直ぐ会場に直行しました。

会場の入口にしつらえられた派手なアーチに「日本一の夕日・写真コンテスト」と大書した看板がかかっていました。文字の色は昨日海岸で見た夕日と同様、血のような赤です。肩をすくめて会場に入った瞬間、圧倒的な数の夕日に迎えられました。百点近い写真があるのでしょうか。暖色系の色彩のオンパレードです。鮮やかすぎる色合いが目にしみます。けれど、最初の迫力に慣れてしまうと、夕日にそれほどの違いはありません。ゆっくり鑑賞する気もなくなり、周囲を見回してみました。

だれ一人いない会場の奥まった位置に、黒々とした作品が展示してあります。赤・黄・オレンジが氾濫する会場の中で、その作品はひときわ異彩を放って見えました。晋介の写真に違いありません。足早に、作品に近寄っていきました。

モノクロームの作品は、ワイド四つのサイズでした。

画面前方に向かって、大きな川が流れ下っています。左サイドはススキが生い茂る葦原です。遠景には小さな山並みがあり、空全体にちぎれ雲が流れていました。遠い山並みの上にかかった雲間から夕日の残光が一条、スポットライトの光束のように川面を貫き、葦原に向かって延びています。折しも風が渡っていったのでしょう。川面とススキの原に風の道筋があらわれています。夕日を浴びて白く輝く穂先が風にそよぎ、さざ波立った川面で光が乱反射しています。その幻想的な夕方の一瞬を、晋介が写真に切り取って永遠に昇華させたのです。

さざ波と、ススキの穂を繋ぐ風の道が白いハイライトになっています。遠景から前景にかけては、絶妙のグラデーションで真っ黒なシャドウが落ち込んでいます。白と黒の単調な色合いですが、その階調を通して無限の色彩が乱舞していました。

傑作です。僕は思わず、声に出して唸ってしまいました。

「気に入ってもらえたかな」

急に、背中から声がかかりました。晋介です。ちょっぴりシャイな響きがこもっていました。当然、賞賛のうなり声を聞いたはずです。僕も晋介に劣らずシャイなので、答える気にもなれません。振り返らずに作品のタイトルを見直しました。

「夕日のきれいな街」に続いて「渡良瀬橋から」と小さなコメントが書かれてあります。

「ワタラセバシと読むのかな。きれいな語感だね」

そっとつぶやいてから、後ろを振り向きました。晋介が最高の笑顔でうなづいています。いつの間に買ったのか、新しいジーンズの上にサマーウールのブレザーを着ています。インナーは白いシルクのモックタートルでした。相変わらず首からライカＭ２をぶら下げた姿は、背伸びをして芸術家を気取った子供以外の何者でもありません。せっかくの傑作写真が台無しです。

「変な格好に見えるかな。このデパートで最高の品なんだけどな」

僕の顔色を見て、心細そうにつぶやきました。自信たっぷりだった肩が、すとんと落ちます。僕は堪えきれずに吹き出してしまいました。確かに、紺色のブレザーは高校の制服にも見えます。しかし、晋介が言ったように、バーバリーのブレザーでは高級にすぎたよ

うです。嫌味が鼻につきます。
「いや、よく似合っているけれど、晋介らしくないよ。バーバリーとシルクでは余りにも決まりすぎだ」
笑って答えると、晋介が鼻を鳴らしました。成金趣味と思われたと誤解したようです。
「十万円の商品券をもらったから仕方ないんだ。この店でしか使えないから、思い切って高いものを選んだ。でも、考えてみると貧乏くさいね」
晋介が訳の分からないことを言いました。ホテルに戻らなかった晋介に、何があったか僕は知らないのです。思い切り怪訝な顔をして晋介の目を見つめてやりました。
「ごめん、進太さん。俺、ホテルに帰らなかったもんね。じつは、この百貨店の会長さんの家に泊まったんだ。その親父が大の写真好きで、俺の作品を譲ってくれと言ってせがむんだよ。まだプロじゃないと言ったら、金でなく商品券をくれた。オリジナル・プリントを手放すのは嫌だったけど、その親父がすごく作品を気に入ってくれたので、うれしさに負けて手を打ってやった」
すまなそうな声を出したのは、最初の謝りの言葉だけでした。後の言い訳を話す晋介は、得意そうに小鼻を膨らませていました。しかし、たとえ自社限定の商品券とはいえ、一枚の写真が十万円で売れたのです。自慢するのも無理ないことです。僕も、晋介の写真が認められたことを喜ぶのにやぶさかでありません。
「すごいね。もう熱烈なファンがついたんだ。僕も晋介のカメラワークを見て、よく勉強させてもらうよ」
心の底から賞賛の声を出しました。誠意はよく伝わるものです。とたんに晋介の頬が真っ赤に染まりました。
「いや、俺は夕日しか撮ったことがないから、スナップは苦手なんだ。これからが勉強だよ」
珍しく謙遜した声で答えました。けれど、何となくうなずけません。晋介は昨日も嫌になるほどライカを構え、真剣にシャッターを切っていたのです。あの異常な出来事の連続した時間をフィルムに焼き付けたはずなのです。僕は慌てて問い返しました。
「そんなことはないだろう。昨日だって、ずいぶん写真を撮っていたよ。現像したら、僕にもぜひ見せてくれよ」
「だめだよ。フィルムが入ってない。カメラワークの練習をしただけなんだ」
即座に返ってきた答えを聞いて、僕はぼう然としてしまいました。腹の底から笑いが込

み上げてきます。幸い会場はまだ無人です。遠慮なく、高らかに、声を上げて笑ってしまいました。

「進太さん、何がおかしいんだよ。俺は、あんな薄汚いものは写真にしない。ずっと先のテーマだよ」

当惑した晋介が大声で宣言しました。僕は再び笑ってしまいます。確かに晋介の言うとおりです。祐子の死に狂いも、校長さんの盲信も、霜月の恋愛ごっこも、僕のセックスすら薄汚いものなのでしょう。

渡良瀬橋の夕日を、傑作写真に昇華させた晋介の目が正解です。祐子ではありませんが、僕も生まれ変わりたい心境になりました。

目の前のモノクロームの夕景が、頭の中で大きく拡がります。その瞬間、祐子が残していった奇妙な情報に、次の旅路を賭けてみることを決心しました。

笑いを納め、じっと晋介の目を見つめます。

「渡良瀬橋に連れていってくれないか。僕が捜している、Mの本籍地が晋介の街なんだそうだ。もう、海炭市に用はないよ。晋介と一緒に渡良瀬橋の夕日が見たい」

晋介の目に喜びの色が浮かびました。でも、念を押すような目で僕を見返しました。

「すぐにでも、進太さんを連れていきたいけれど、祐子はどうするのさ。あんなヒステリー女は、一人にしておけないよ」

不安そうに問い掛けてきました。連れの祐子を心配する優しさが晋介にはあります。血のように真っ赤な夕日を浴びて、祐子を死なせようとした者と同一人物の言葉ですから不思議です。晋介が胸の内に確固として持っている規範がまだよく分かりませんが、僕は笑顔で答えました。

「祐子の心配は要らないよ。ここで霜月と暮らすことになった」

「へー、祐子は漁師の女房になるのかい。そりゃあいいや、何よりも健康的だ。あのイカ釣り船の甲板で、真っ昼間からセックスに励めばいい」

頓狂な声で言っておどけました。僕も同感です。

「まったくだ。腰が抜けるほど励んで、二人して透明なイカになればいいんだ」

僕もひょうきんに答え、二人で大笑いしました。けれど、少しも軽薄な気分になりません。祐子の門出を祝福し、僕たちの新しい世界の展開を予感する気持ちでいっぱいでした。

「それで、進太さんどうする。すぐ空港に行こうか」

晋介が身を乗り出して問い掛けてきました。

「いや、まず味噌ラーメン。せっかくだから、もう一度本場物を食おう。それから夜景だ。ゆっくり観光もしてみよう。空港に行くのは明日の朝でいい」

明るい声で答えました。

「賛成だね。カニも食おうよ。二人とも金はあるんだ」

晋介が陽気な声で応じて、出口に向かいます。バーバリーのブレザーを着た後ろ姿がやけに立派に見えました。

僕も紳士服売場に寄ってみたくなります。

１０　夕日のきれいな街

晋介の住む街は、都会から私鉄の急行に乗って一時間三十分の所にあります。座席指定の電車はエアコンがきいて快適でしたが、あいにくの梅雨空から細い雨脚が、絶え間なく車窓を濡らしています。

「残念だね。夕日を見てもらえそうにないよ」

二つ並んだ座席の通路側に座った晋介が、外を眺めながら溜息をつきました。

夕暮れ間近な時刻にも関わらず、窓の外は薄闇に覆われています。真っ青に晴れ上がっていた海炭市の空が嘘のようです。僕は、流れ去る灰色の景色に目をやったまま小さくうなずきました。陰鬱な空模様がやり切れません。なにかしら重苦しい気持ちが胸中に去来し、外の風景に溶け込んでいきます。

電車が鉄橋に差し掛かりました。長い長い鉄橋です。何本も続く橋脚を見下ろしていると、ようやくあらわれた岸辺の杭にゴイサギがとまっていました。雄大な河岸が目の前に広がっていきます。

「渡良瀬川かな」

思わずつぶやいていました。びっくりするほどナーバスな声です。

「いや、これは利根川。渡良瀬川は三キロほど上流で合流してしまっている。後二十分で駅に着くよ」

静かに答えた晋介が右手を伸ばしました。

膝の上に置いた僕の左手にさり気なく手を重ねます。温かな感触が素肌を刺激しました。

僕は右手で頬杖を着いた姿勢のまま、僅かに首を回して晋介を見ました。晋介の目が微笑んでいます。僕の様子を心配しているのでしょう。密着した手のあいまいさが不快になります。

意識して首を左右に振り、手を握りました。晋介の笑顔が消えます。唇を引き締め、大きく見開いた目で僕の目の底を見つめました。不作法と呼べるほど無防備な仕草です。僕は晋介の視線をしっかりと受け止めました。晋介が強い力で手を握り返してきます。二つの手の間でじっとりとした汗が解け合います。

「進太さん、好きだよ」

辺り構わぬ声で晋介が呼び掛けました。僕も大きくうなずきます。友情を越えた感情が、

窓の外の薄闇に流れ出ていきます。解き放たれたエネルギーが隠れ家を求めているのでしょう。微かに性のにおいがしました。

僕も晋介が好きです。情感を交えて手から伝わってくる肉体の息吹は、新鮮であるばかりか生理的な喜びさえ秘めています。二人の身体が同時に震えました。その瞬間、互いの手を放しました。晋介の頬が赤く染まっています。多分、僕の頬も赤くなっているはずです。停車駅を告げる車内アナウンスの声が響きました。

長いプラットホームに横付けになった六両編成の急行電車から、思ったより大勢の乗客が降りていきます。僕と晋介も高架になった下り線のホームに降り立ちました。

「進太さん、発車するまで待ってくれよ」

歩き出したとたんに声を掛けて、晋介が立ち止まりました。目の前で電車の扉が閉まります。発車を告げるチャイムがホームに響きました。静かに走り出した電車が加速します。見る間に赤く塗られた車体が帯になって流れ去りました。急に開けた視界の先に穏やかな山並みが広がっています。

薄明かりの中で紺青のシャドウになってたたずむ山々は、墨絵のような美しさです。僕は思わず息を呑み込んで風景に見とれました。眼下に見える駅前広場の背後に、小高い堤防が広がっています。渡良瀬川の白い流れがほんの少し見えます。半円のアーチを三つ連ねた橋の先に、市街地の甍が連なっていました。

「俺の街だよ」

晋介が誇らしそうに言いました。美しい眺めでした。

僕たちは足を早めて改札口を通り、タクシー乗り場に急ぎました。暮れきってしまう前に、少しでも多く街を見せたいという晋介の高揚した気持ちが伝わってきます。

「伊東病院、本院まで。渡良瀬橋経由でお願いします」

タクシーに乗り込むやいなや、晋介が行き先を告げました。黙ってうなずく中年の運転手の顔に、奇妙な笑みが浮かびます。晋介が不快そうに眉を寄せました。僕は二人の様子をさり気なく観察します。この街特有の暗黙の了解が漂っている様子でした。

「伊東病院は精神病院の老舗なんだ。この街の人は、みんな知ってる」

僕の気持ちを見透かしたように、晋介が言葉を吐き出しました。老舗という言葉が笑えます。地方都市には必ずといってよいほど、古くからの精神病院があります。住民は皆、差別と優越心を剥き出しにして、他者を蔑む場合にその病院名を使うのです。この街でも

「伊東病院」は人間失格の代名詞なのです。その病院の子供として生まれ育った晋介の屈折した感情はよく理解できます。僕はすかさずフォローに回りました。

「へー、晋介の家は名門なんだね」

感嘆の声を聞いて、運転手の表情が急転しました。畏敬と羨望の眼差しで前方を見つめています。伊東病院の財力と、社会的地位を思い出したのです。人の気持ちは目まぐるしく変わります。晋介の表情に自信の色が甦りました。

「ほら、これが渡良瀬橋。でも、こんなに暗くなってしまっては何も見えない。残念だね」

晋介の声で前方を見つめました。闇の中から浮かび上がった鉄橋が見えます。橋脚からライトアップした渡良瀬橋は幻想的に見えました。しかし、バックの風景が見えないのですから、景観も片手落ちです。瞬く間にタクシーは渡りきってしまいました。車で渡る渡良瀬橋は、ただの鉄橋でしかありません。思わず溜息がでました。期待が大きすぎたのです。

タクシーは電線を地中化したメインストリートを快調に走っていきます。

「この先に、日本最古の大学があるんだ。俺の家はその向かいにある」

気を取り直すように晋介が声を高めました。雨に煙る車窓に、古びた木造の門が見えました。重要文化財だという大学の門も、雨の中では煤けて見えます。晋介の指示で右折した先の、コンクリートの門の方がよっぽど立派に見えました。

タクシーは門内に進入し、二階建ての小さな病舎を回り込んでいきます。

「本院といっても、みしめた診療はしていないんだ。糞親父が保険診療外の特別な患者を診ているだけさ。金稼ぎの自由診療だよ。でも、郊外にある別院はいい。院長の壇原先生は尊敬できる。理事長の親父とは大違いだ」

憎々しい声で晋介が解説しました。その糞親父が住んでいるという重厚な母屋の隣りに、二階建ての古い洋風建築が見えました。玄関前の狭い車寄せにタクシーが停車します。

「さあ、着いたよ。この離れが俺の城だ。親父も入れない」

厳しい声で言って晋介が料金を払い、タクシーを降ります。雨の中で両肩を怒らせ、身構えるように立っています。僕もつられて、身体を硬くして降り立ちました。

「お坊っちゃん、お帰りなさい。食事の支度がしてありますよ」

去っていくタクシーの影から黒い傘を差した老婆があらわれ、かん高い声で呼び掛けてきました。老婆をみとめた晋介が、とたんに笑顔に代わります。

「タケさん、ありがとう。車内電話で急だったから迷惑を掛けたね。後はみんな俺がするから、母屋に下がってくれていいよ。こちらは進太さん。俺の先輩だ。しばらく泊まるから、よろしく頼む」

優しさの溢れた声で答え、晋介が僕を紹介しました。僕は慌てて挨拶をして、頭を下げます。タケさんは丁重に頭を下げて、歓迎の言葉を長々と口にしました。晋介が照れたように右手を振ってタケさんを追い払います。やっと年相応の晋介が戻ったように見えます。タケさんは何回も僕に頭を下げてから、名残惜しそうに母屋の方に戻っていきました。晋介はじっと見送っています。後ろ姿が母屋に消えると同時に口を開きました。

「タケさんは、俺が生まれる前から母屋に住み込んでいるんだ。親父が見知らぬ女を連れ込んでからは、もっぱら俺の世話をしてくれている。この家で気の許せる、たった一人の婆さんさ」

問わず語りにタケさんのことを紹介しました。複雑な家庭の事情がかいま見えます。名門の生まれも楽ではないようです。精一杯背伸びして生きているような、晋介がかわいそうになってしまいました。

「さあ、進太さん。中に入ってくれよ。タケさんのつくった飯はうまい。さっそく乾杯しようよ」

明るい声で僕を促しました。玄関に入る前に、僕は晋介の顔を正面から見つめます。

「晋介の両親に挨拶しなくていいのかい。僕は、礼儀知らずだと思われたくない」

率直に尋ねました。一応の筋は通したいと思ったのです。晋介と両親の間の問題は直接僕に関係ないはずです。

「必要ないよ。進太さんは俺の客だ。タケさんも認めてくれた。それで十分だ。ついでに言うと、俺に両親はいない。親父と暮らしているのは見知らぬ女だ」

にべもなく答え、晋介が僕を玄関の中に押し込みます。もう僕に言うことはありません。高価な建材を選んで建てた離れの奥に進んでいきました。

僕たちはタケさんの心尽くしの手料理に舌鼓を打ってから、明日の予定を話し合いました。やはり、朝一番に市役所に行き、祐子が告げたMの本籍地を確認することにします。晋介も一緒に行くと言ってくれました。けれど、晋介は中学生です。ほとんど学校へ行かなかった僕ですが、自分のことを棚に上げて心配になりました。

「明日は月曜日だ。晋介には学校があるんだろう」

おずおずと、学校のことを切り出してみました。

「ああ、そうだよ。学校はある。でも、登校するか、しないかは、俺が決める。進太さんも、自分で決めてたんじゃないの」

平然とした答えが返ってきました。それに、図星を指されてしまったのです。これ以上、異論はありません。街をよく知っている晋介の同行は、大歓迎です。大きくうなずいて、右手を差し出しました。満面に笑みを浮かべた晋介が、力強く手を握り返してきました。

市役所の戸籍係で担当職員に事情を話すと、Mの除籍謄本をあっさり交付してくれました。微かに震える手で料金七百五十円を払い、高ぶる気持ちを抑えてロビーのソファーに腰を下ろしました。白い封筒を開き、謄本を取り出します。横からのぞき込んでいる晋介の息が紙片を広げる手にかかりました。

「全員消されている」

晋介がつぶやきました。除籍謄本ですから当然です。見開きになった紙面に記載された三人の名前が斜線で消されていました。両親はMが五歳の時に揃って亡くなっています。死亡地はアメリカでした。事故に遭ったのかも知れません。天涯孤独と言っていたMの言葉が耳元に甦りました。つい目頭が熱くなります。ぐっと堪えて住所欄の文字を読みます。けれど、見知らぬ地番が書き連ねてあるだけで、何もイメージできません。

「この地番だと、きっと役所の近くだよ。住宅地図を借りてくる」

晋介が言い残して、総合案内所のカウンターに跳んでいきます。土地の住人は頼りになります。心の中で感謝しました。

分厚い地図帳を持って戻ってきた晋介が、慣れた手つきでページを繰ります。

「ほらここだよ。ここは化け物屋敷があった場所だ」

晋介が興奮した声を出しました。Mの本籍地の現況が分かったのです。それも、晋介が知っている場所で、しかも、化け物屋敷だと言うのです。僕は驚きで声も出ません。晋介が指し示す地図上の地点を、食い入るように見つめました。

「近いよ。ここから歩いて二十分。いや、十五分でいける。でも、化け物屋敷は火事で焼けた。ほら、この地図は出たばかりの最新版だから、ただの空き地になっている。去年までは、荒れ果てた屋敷があったんだ」

晋介の言葉が右の耳から左の耳へと通り抜けていきます。僕はまだ判断力が戻りません。晋介が言うほど荒れ果てた屋敷なら、年代的にはMの生家に違いないはずです。急に膝頭が震えてきました。

「行こうよ、進太さん。焼け跡に行ってみよう」

頭上から晋介の声が降ってきました。僕は黙って立ち上がります。目の前に興奮した晋介の顔があります。僕は、どんな顔をしているのでしょう。きっと間抜けな顔をしているに違いありません。Mが見たら嘆くと思った瞬間、ようやく全身がしゃんとしました。

改めて、晋介が知っている事実を問い直しました。しかし、確認できたことは、市役所から歩いて十五分ほどの所にMの本籍地があるということ。晋介が幼いころから、その場にお化け屋敷と呼ばれる古い空き家があったということ。その空き家が去年の火災で消失したということの三点でした。さすがの晋介も、それ以上の事実は知りません。

晋介が提案したとおり、現地に行って確認するのが最善の道です。近所の人が事情を知っているかも知れません。幼かったころのMや、両親と死に別れた後のMの身の振り方など、当時の情報に詳しい古老がいる可能性もあります。しかし、女々しいようですが、Mの墓を暴いてしまうような恐れも感じています。たとえMの来歴を知ったからと言って、これまでのMがどうなるものでもありません。けれど、僕が抱いているMのイメージが変わってしまうような気がして、妙な気後れが後ろ髪を引くのです。それほどMが、僕にとって偉大だったということの証です。同時にまた、まだ見ぬ幽霊を怖れて逡巡しているような、恥ずかしさも感じています。しょせん僕が決断するしかないのです。いまさら山地に逃げ帰るわけにはいきません。

思い切って市役所を後にして、Mの本籍地に向かうことにしました。

僕たちは小高い山に沿った用水路沿いの歩道を、西に向けて歩いていきました。左手は二車線の市道で、車が連なって走り抜けていきます。かろうじて雨は上がっていますが、どんよりと曇った空が頭上を覆っています。並んで歩く晋介は天気にお構いなく、高ぶった気持ちを全身であらわしています。僕をリードする歩みがますます速くなっていきます。

十五分近く歩き続けると、全身から汗が滲み出てきました。湿気の密集した蒸し暑い空気が僕たちを包み込んでいます。

「ほら、もう見えたよ。あのお寺の手前なんだ」

晋介が大きな声で言いました。確かに寺院の真っ黒な甍が曇り空の中に沈んでいます。背後の山の斜面全体を墓地にした壮大な寺院でした。白い塀を巡らせた敷地の隣りが百坪ほどの空き地になっています。

「焼け跡が残っている。ここだよ」

晋介が叫んで、空き地を封鎖した針金を乗り越えて侵入していきます。僕も後に続きま

した。屋敷があったと思われる敷地の北側には、草一本生えていません。黒々とした土に、いまだに焼け落ちた材木や焦げた瓦のかけらが混じっています。褐色に変色した白塀が、火勢の凄まじさを現在に止めています。近所と呼べる家も、お寺以外にありませんでした。

僕たちは靴の先で土をつつきました。この土地にまつわる伝承を掘り起こしているような気分になります。しかし、焼け焦げた土地は何一つ語ろうとしません。僕と晋介は虚しく顔を見合わせました。

「遅いじゃないの。道草はやめてよ」

突然、背後から大声が飛んできました。女性の声です。僕たちはぎょっとして振り向きました。振り向いたとたんに、僕は再びぎょっとしてしまいました。

「私の顔に何かついているの。不作法に見つめないでよ」

叱声が僕に飛びました。白地に牡丹を飛ばした友禅の振り袖を着た女性は、百七十センチメートルほどの長身です。歩道にすっくと立った誇らかな姿を見て、僕はMの出現を幻視してしまったのです。あたかも、若き日のMが出現したようなショックが僕の全身を駆けめぐりました。けれど、女性は当然Mではありません。二十代後半の美しさを振りまく女性は、甘える声で僕に呼び掛けました。

「さあ、遅れるわ。早く行きましょう。コンサートに誘ったのはあなたの方よ」

思わず周囲を見回してみましたが、僕たちの他に人影はありません。横にいる晋介は苦笑を浮かべて素知らぬ顔をしています。やはり、僕が呼び掛けられたようです。答えないわけにもいきません。

「いいえ、僕とあなたは初対面です。僕たちはこの土地を見せてもらっているだけです。人違いではないですか」

しどろもどろの僕の答えを、振り袖の女性は、首を傾けて聞いていました。疑わしさを露骨に表情に出しています。

「今度は観光客の振りをしようというのね。いいわ。付き合ってあげる。一体何を見せて欲しいというの。うちのお寺の本尊でも見せてあげましょうか」

「えっ、あなたは、あのお寺の方なんですか。それなら、ぜひ聴かせて欲しいことがあります。僕は進太、連れは晋介。怪しいものではありません」

うちの寺と聞いて、縋る思いで叫んでいました。晋介の吹き出す声が聞こえましたが、女性から目を反らすことができません。

即座に答えが返ってきました。

「お寺の道子に決まっているでしょう。また、悪い遊びを始めたのね。今度は寺の縁起でも聞き出したいのかしら。そっちの子は、なぜ笑ったの。失礼だわ。謝りなさい」

お寺の道子さんが、初めて晋介を睨んで叱責しました。僕も晋介に小声で問い掛けました。

「道子さんを知っているのかい。この寺の人だと言ってる」

「知らないよ。けれど、その道子さんは病気だ。伊東病院育ちの俺には分かる。進太さん、大概にした方がいいよ」

返ってきた答えは衝撃的でした。でも、僕と道子さんのちぐはぐな会話を説明するには十分な答えです。

「さあ、何が聞きたいのよ。早く言いなさい」

道子さんが追い打ちを掛けてきました。僕は進退窮まってしまいました。仕方なく質問を口にします。

「この焼け跡のいわれを知りたいんです。焼ける前に、だれが住んでいたのか教えてください」

道子さんが大声で笑いました。無造作に針金を潜って焼け跡に入ってきます。晋介がさり気なく身構えました。

「まあ、そんなことが知りたいの。教えてあげるわ。この焼け跡には去年の冬まで、お化け屋敷と呼ばれた空き家があったの。住んでいたのは寺の分家の大学教授一家よ。でも、それは半世紀近い昔の話。夫婦揃って飛行機事故でアメリカで死んでしまった。弟の突然の死に動転した兄の坊主が空き家にしておいたのよ。五年前に死んだ私の祖父。知ってるでしょう。進太にも会わせたわよね」

除籍謄本に記載されていた事実が次々に語られました。僕は名を呼ばれたことも気付きませんでした。慌ててMのことを尋ねます。

「その教授には娘がいたはずです。娘はどうなったのですか」

「Mのことね」

道子さんが素っ気ないくらい簡単に、Mの名を口にしました。僕は一歩前に踏み出して先を促しました。

「Mは幼いころに行方不明になってしまったというわ。祖父もずいぶん捜したけれど、無駄だったらしい。でも、生きているのよ。私は知っている。恐ろしいわ」

僕の背筋を再び衝撃が走りました。すべてが現実に符合しているのです。

「何が恐ろしいのです。生きているMに会ったのですか」

「会ったわ」

不安定な声が落ちました。

「えっ、いつ、どこで、Mは何をしたのです」

道子さんの間近に迫り、大声で畳み掛けていました。道子さんは黙って僕の目を見つめました。吸い込まれてしまいそうなほど澄みきった目をしています。真空の色を見た思いがしました。背筋に寒気を感じると同時に、妙に低い声が耳を打ちました。

「去年の年末。ここで、Mは狂っていた。自分の家に火を点けて焼き尽くしたわ」

「ウソダッ」

反射的に叫んでいました。

「ハハッッハハハハハ、嘘だと思うなら伊東病院に行け。Mが入院している。会って確かめたらいい。コンサートに行くのはその帰りでもいいわ」

狂気を秘めた笑いが僕を打ちのめしました。道子さんは高らかに笑いながら身を翻し、振り袖の裾を乱して寺の方に駆け去っていきます。真っ白なふくらはぎが目の底に焼き付きました。若いMの姿がダブって見えます。

「進太さん、俺の言ったとおりだろう。あの人は病気だ。みんな嘘っぱちさ」

晋介が僕の肩を叩いて、慰めるように言いました。しかし、道子さんの話は僕の知っている事実と符合しすぎています。何よりも、Mは道子さんの言った時期に僕たちから身を隠したのです。確かめないわけにはいきません。

「伊東病院に案内してくれよ。Mが入院していなければそれでいいんだ」

晋介を振り返って力無く頼みました。不安そうな顔で晋介がうなずきます。

「よし。まず、壇原先生に電話してみる。無駄足になるのもしゃくだろう。ちょっと待っていてよ」

再び元気な声で答えた晋介が、百メートル先にある公衆電話に走っていきます。僕は焼け跡に立ち尽くしたまま、後ろ姿を見送りました。

電話ボックスに入った晋介がしばらくして出てきました。肩が落ちた力無い様子が事実を告げています。

「いたよ。入院していた。Mという名の中年の女性は、壇原先生の患者だ。しかも、身寄りがない。家族がいるなら、すぐに会うと先生は言った。進太さん、どうする。行ってみるかい」

晋介の声が、いつになく陰鬱に聞こえました。Mは伊東病院に入院しているのです。事実を聞いたとたんに、膝ががくっと折れてしまいました。全身の力を振り絞って立ち上がります。

「行くしかないよ。Mに会うんだ」

喉を振り絞って答えた声が、やけに悲壮に響きました。晋介が眉をひそめて僕を見ます。僕は無理に笑顔を作り、晋介と自分自身に答えました。

「だいじょうぶ。心配は要らないよ。火事が絡んでいたって、海炭市の時みたいに殺し合いが始まるわけじゃない」

陳腐なことを言って笑ってみましたが、笑い声がでません。人型に燃え上がった校長さんの死の姿と、紅蓮の炎を上げて焼け落ちるお化け屋敷のイメージが目の前に広がります。

一瞬、晋介の顔が、苦悩でゆがんだように見えました。しかし、晋介はすぐ横を向いてしまい、市道を走るタクシーに両手を振って乗車の合図を送りました。

僕はMと、再会します。

１１　心を病む人

僕と晋介を乗せたタクシーは、四車線の道路を真っ直ぐ西に向かっていきます。二十分ほど走り続けても、道の両側に見える家並みが途絶えません。もう、郊外に出たのでしょうが、田園風景が広がりそうな気配もありません。右手前方に続いている小高い山並みがゆっくりと近付いてくるだけです。

「ここからは見えないけれど、この道は渡良瀬川に並行して走ってるんだ。もうじき右折して山裾に向かうと病院が見えるよ」

隣りに座った晋介が口を開きました。タクシーに乗ってから初めて口にする言葉です。伊東病院に入院しているというＭに思いを馳せていた僕は、ずっと無言でいたことに気付きました。返事を考えながら改めて晋介を見ました。

晋介は僕に背を向けて左手の車窓を見つめています。背中を丸めた姿が、小学生のように小さく見えました。先ほどまでの頼もしい姿が嘘みたいです。

僕は面食らってしまいました。晋介の変化に気付かなかった自分が情けなくなります。気が動転している証拠でした。けれど、晋介の様子は、物思いに耽っていた僕を責めている風には見えません。晋介自身が、自らの壁の中に閉じこもってしまったように見えます。僕に呼び掛けた言葉がＳＯＳの合図のような気がしました。直截に尋ねるのが一番のようです。

「僕が沈んでいるのは仕方がないが、晋介にもナーバスな気持ちを伝染させてしまったのかな」

狭い車内に声が響くと同時に、晋介の背中がピクッと動きました。素早く僕を振り返りました。口許に笑いが浮かんでいますが、へたくそな作り笑いです。見咎めた僕の表情を察して笑いを納めました。

「ごめん。大変なときに気を使ってもらってありがとう。俺のことは気にせずに、進太さんは壇原先生と納得するまで話してよ」

晋介の答えは、僕の耳の外で立ち往生してしまいました。額面どおりに受け取ることはできません。晋介がボディ・ランゲージで語っていたことを、僕は肉声で聞きたいのです。一人で呑み込んでしまっている言葉がきっとあるはずです。問い返すしかありません。

「いや、謝るのは僕の方だ。僕の神経は、晋介が省略した言葉を補えるほど細やかじゃな

いんだ。はっきり言ってくれないと分からないよ。僕を病院に案内したくないのかい」
「違うよ、俺が言いたいのは、病院に着くと俺の態度が少し変わるってこと。俺は壇原先生を尊敬しているけれど、苦手でもある。後ろめたさもあるんだよ。だから、これまでのように突っ張っていられないかも知れない。それを知っておいて欲しかったんだ」
早口で晋介が答えました。僕も了解できました。やはり晋介は強がりです。年相応におとなしくなってしまうことの弁解を、事前にしたかったのです。安心して、笑いが込み上げてきましたが、後ろめたさという言葉が気に掛かりました。
「何が後ろめたいのさ。晋介らしくないね」
気安い問い掛けに、晋介の表情が硬くなりました。
「個人的なことさ。進太さんに関係ないよ」
冷たい声が返ってきました。言葉の底に苛立ちが見えます。無神経を指摘されたようで頬が赤くなってしまいました。

伊東病院別院は広葉樹の茂る山の中腹にありました。
二階建ての病棟を地形に応じて広々と展開させた建築は、精神病院の持つ暗いイメージの対局にある、開放的な雰囲気を漂わせています。晋介の父の理事長に代わって現場を指導してきたという、壇原院長の考えが偲ばれます。ガラス張りになった玄関ホールを入ると、正面が受付カウンターになっていました。
急に消極的になってしまった晋介に代わって、僕が来意を伝えました。晋介の電話で事情が通じているらしく、待つほどもなくクリーム色の白衣を着た看護婦がやってきました。
「晋介さんが来るのは久しぶりね。壇原先生が喜ぶわよ」
三十代半ばの看護婦が親しみのこもった声で言いました。
晋介は小さくうなずいて、そっぽを向いてしまいます。照れ性で過敏な性格が、病院での晋介の役回りのようです。幼いころに張られたレッテルを剥がすことができないのでしょう。十四歳の少年にとっては当たり前のことです。でも、晋介には帰る場所があるのです。役回りに甘んじているような、晋介の態度が羨ましくなりました。
「先生は二階の閉鎖病棟でお待ちです。私がご案内します」
看護婦が僕に言って、右手の階段に向かいました。閉鎖病棟という独特の言葉が僕を緊張させます。もうじきMに会えるのです。しかし、階段を一段上がる度に、脅えに似た感情が全身に広がっていきます。精神を病んだMに会うのです。なんと言って呼び掛けたら

いいか、必死で考えました。

二階に上がると、狭いホールの先全体が病棟になっていました。入口の大きなガラス扉には錠が下りています。看護婦が腰に吊した鍵で錠を開きます。扉を入った先は小さな体育館ほどもあるフラットが広がっていました。三つの大テーブルと多数の椅子が不規則に置かれています。

南に開いた大きな窓からは、曇り空の下に広がる山林が望めます。リゾートホテルのラウンジのような景観です。思い思いの格好をして、座ったり、ぶらついたりしている十人ほどの患者さえ、宿泊客のように見えます。

北側の壁面にもガラスが張られていました。けれど、ガラス越しに見えるのは風景ではありません。医局と書いたラベルが貼られ、数人の看護婦と医師が立ち働いている姿が見えました。

医局の隣が院長室です。正面の大きな机の前に白衣を着た中年の男が座っています。ガラス越しに晋介に手を振って、笑い掛けてきました。壇原先生です。看護婦が大きくドアを開けて、僕たちを院長室に通しました。

「いらっしゃい、晋介と会うのは久しぶりだね。さあ、ソファーに掛けなさい」

椅子から立ち上がった壇原先生が、満面に笑みを浮かべて僕たちを迎えてくれました。髪に白いものが混じっていますが、逞しい身体つきをして長身です。全体に疲れた雰囲気が感じられます。でも、僕たちを心から歓迎しているのは明らかで、優しそうな目がなごんでいました。僕と晋介は、勧められるままソファーに腰を下ろしました。

看護婦が病棟に面した窓にブラインドを下ろしてから部屋を出ていきます。僕は立ち上がって自己紹介しました。焦りを顔に出さないように注意しながら、病院に来るまでの事情を話します。笑顔で聞いている壇原先生の表情が、道子さんの話になると引き締まりました。真剣な顔で最後まで聞き終わると、目を閉じて腕組みをしました。沈黙が僕を不安にさせます。先生の閉じた目をじっと見つめました。

「進太さんの話はよく分かりました。養母のＭさんの事件を、この街に着く早々聞かされれば、気が動転して当然です。大変な思いをしましたね」

目を開いた先生が、腕組みを解いて静かな声で言いました。落ち着いた、理解溢れる言葉が安心感を与えます。安心ついでに、頼み事をしてみます。

「先生、僕を進太と呼んでください。晋介とは、一つしか歳が違いません」

「ああ、構いません、進太と呼びましょう。でも、進太が知りたい事柄は、あなた自身に

関することです。晋介が同席しても構わないのかな」

さりげなく言ってくれた注意が身に染みました。医療技術者の誠意を感じました。思わず隣りに座る晋介の横顔を見ました。すぐにも立ち上がり、部屋を立ち去る意志が伝わってきます。僕は反射的に口を開きました。

「はい、一緒にいて欲しいんです。万一僕が動揺したときは、きっと晋介が制御してくれます」

答えを聞いた晋介が、自信を持って座り直す気配がしました。目の前の壇原先生が苦笑しました。

「分かりました。晋介のためには席を外して欲しいのだが、晋介を信頼してくれる進太の気持ちもうれしい。話を進めましょう」

何気ない答えの中に先生の苦渋を見る思いがしました。僕はひやっとして、隣の晋介を盗み見したくなりました。

信頼という言葉を借りて、僕は、個人的な問題を晋介に共有させようとしている。Mが繰り返し言っていた、自立した責任と人格を見失ってしまったようです。心の底に冷え冷えとしたものが広がりました。眉をしかめた壇原先生の顔に、悲しそうなMの表情が重なりました。声にならない悲鳴が喉元まで込み上げてきたとき、先生の声が聞こえてきました。

「進太が、ここへ来た目的は一つです。真っ先にMさんと会ってもらおう。それで、いいですね」

重々しい声でした。もう手遅れです。気持ちの整理が着かないまま、Mを捜す旅の最終局面を迎えるのです。震えそうになる身体を押し止めて、大きくうなずいていました。

壇原先生がインターホンのスイッチを押し、Mを連れてくるように指示しました。僕は固唾を呑んでドアが開かれるのを待ち構えます。様々な思いが去来しましたが、別れたときのMの姿を一心に思い浮かべようと努力しました。ドアがノックされます。

「どうぞ」

明るい声で先生が答えました。

僕は目をつむりたくなる気持ちを押し殺して立ち上がり、大きく開かれた入口を見ました。看護婦の後ろに小さな人影があります。Mと少しも似ていない女性が立っていました。しいて言えば、同年齢と思えただけです。一瞬のうちに緊張の糸が切れてしまいました。崩れるようにソファーに座り込んだ僕に、先生が穏やかな声で尋ねました。

「納得したかね」

すぐに返事ができず、ぼう然としていた僕の心に空しさが込み上げてきました。力なく先生を見ます。

「はい、僕が捜しているMとは別人です」

答えた声が上擦っていました。迷い道に踏み込んでしまったような気がしました。Mの本籍地にMがいて、そのMは別人なのです。頭を抱えたくなります。

「ご苦労様、戻っていいですよ」

先生が、別人のMと看護婦に声を掛けました。ドアを閉めて二人が去っていきます。壇原先生が僕の目を見て口を開きます。憐憫という言葉が僕の脳裏に浮かび上がりました。

「やはり、別人でしたね。でも、あの女性は、ここではMと呼ばれています。火災のショックで記憶を喪失し、失語症になってしまったのです。警察の調べでは、火事の一週間前から寺の境内に住み着いていたホームレスらしい。通報者の道子さんの証言のとおり、Mと呼んで、伊東病院で医療保護をしています。ついでに言っておくと、火災の原因はMの放火だと、道子さんは言っています」

僕を慰めるように、壇原先生が去っていった小柄な女性の立場を説明してくれました。しかし、事件の起きた場所はMの本当の本籍地なのです。どうして別人のMがあらわれてしまったのでしょう。幾分冷静になった僕の脳裏に、衝撃がもたらした様々な疑問が浮かび上がってきました。

「僕たちの市に、Mのことを問い合わせなかったのでしょうか。放火の容疑は重大でしょう。市役所で見た除籍には、結婚したMの新戸籍が記載されていました。Mと僕が暮らしていた蔵屋敷と同じ地番です」

身近な疑問を真っ先に尋ねてみました。

「そう、今となっては問い合わせた方がよかったと思います。でも、道子さんの父が、あの女性をMと認めたのです。警察は容疑者をMさんと確定し、処分保留のまま入院させることに決めました。放火といっても、お化け屋敷と呼ばれた空き家が燃えただけで、被害届も出ていない。証人は道子さんだけです。他に目撃者はいません。正直に言うと、実際にMさんが放火したかどうかも、疑わしいものです」

答えはすぐ返ってきました。

僕の養母である、本物のMは、完璧に無視されていたのです。そして、別人のMを創り上げたのは、目撃者として証言した道子さんに他なりません。その道子さんの証言を、壇

原先生は疑っているのです。道子さんを病気だと断言した、晋介の言葉が甦りました。慌てて問い返します。

「先生、晋介は道子さんが病気だと言うのですが、先生の患者なのですか。そうなら、詳しいことをぜひ聴かせてください」

僕の問いにすぐ返事は帰ってきません。再び腕組みをして、しばらく考えていた先生が、ようやく重い口を開きました。

「患者のプライバシーが問題になりますが、今朝方、進太に道子さんが話したという、焼けたお化け屋敷の歴史は真実です。進太は道子さんと面識があるし、二人は戸籍上の親戚にあたります。Mを巡る問題の当事者同士なのだから、知る権利もあることにして、簡単に話すことにしましょう。道子さんの父にあたる、坊主の義寛は私が高校生の時の同級生です。娘の奇矯な言動に手を焼いた義寛に頼まれて道子さんの診療を始めたのですが、残念ながら、道子さんは古い発病の精神病でした。道子さんの無意識は、なんらかの契機で幼児期以前に分裂してしまっています。引き裂かれた無意識は、日常的な意識の領域に強烈な衝撃を与えるのです。絶え間ない緊張に耐えかねて、無意識に連動して分裂しようとする意識の平衡を維持するために、妄想が生まれました」

「待ってください。道子さんの妄想とMの間に、どんな関係があるのですか」

難解な説明についていけず、口を挟んでしまいました。先生が柔和な笑みを浮かべて僕の目を見ました。小さくうなずいてから、ゆっくり、噛み砕くようにして話を続けます。

「Mという存在が妄想なのです。私は、五歳以降のMが生存しているとは思いもしなかった。道子さんが産まれたのは、Mが行方不明になってから二十年も後のことです。当然、Mというのは、道子さんが創り出した妄想に過ぎない。だから、進太の話してくれた現実のMさんのことを聞いて、正直言って、今日は驚きました」

壇原先生は僕が困惑する事実を口にしました。Mと呼ばれる別人がいたことさえショックなのに、妄想のMがいるというのです。何がなんだか分からなくなってしまいます。一瞬、僕が捜しているMも、妄想の産物ではないかと思ってしまいました。

「道子さんは、どんな物語を創り出したのですか」

先を促した声が震えてしまいました。先生がまた優しい目で僕を見ます。

「自分は、行方不明になってしまったMの隠し子だという妄想です。道子さんは、その妄想を思春期のころに創り出しました。恐らく祖父から聞いた昔話がヒントになったのでしょう。出自に関係した妄想の症例は、実に多いのです。天皇陛下の隠し子だと訴える患者

は、大勢いますよ。この病院にもいます。道子さんの場合は、祖父が心配し尽くした弟夫婦の長女に、強い共感と嫉妬を持ったのでしょう。悪いことに、義寛は妻帯していません。道子さんには母がいない。行方不明のMを母に見なして、実際の母に見捨てられた悲しみと憎悪の妄想を育てていったのです」

僕の背筋を冷たい感情が走り去りました。悲しみはMにぴったりの言葉ですが、憎悪は不似合いです。

「Mに対する道子さんの憎悪が、先ほど会った女性を放火犯にさせたのですか」

聞きたくはありませんでしたが、恐る恐る尋ねてみました。

「そう。ここからは全くの想像で話しますが、あのお化け屋敷に放火したのは道子さんかも知れません。たまたま行き会ったホームレスをMになぞらえ、生まれる前から廃屋として残されていた、Mの象徴としての屋敷を焼き捨てたとも考えられます。Mに生家を焼かせることで、自分を見捨てた母に謝罪させたのでしょう。そして、今日、進太の話でMさんの実在が証明されました。今となっては、道子さんが、本当にMさんの隠し子だった可能性も、なくはありません」

壇原先生が恐ろしい仮説を提出しました。もし事実なら、道子さんの妄想は真実に変わってしまいます。僕は道子さんの義理の弟で、Mに向けられた道子さんの憎悪の正当性も証明されるかも知れないのです。喉元まで焦燥が込み上げてきました。

「僕は事実が知りたい。先生、真偽を確かめる方法はないのでしょうか」

居たたまれなくなった僕は、叫ぶように先生に縋っていました。僕を見つめる先生の目が一瞬、悲しい色に染まりました。でも、壇原先生は医師です。科学者の目に戻ってうなずきました。

「義寛が真実を知っています。義寛に会って事実を確かめるといいでしょう。Mを妄想の産物と確信していた私にも責任がある。義寛には、私から電話をしておきます」

決定が下りました。ここまで来ては断る道理がありません。全身に闘志がみなぎりました。別世界に住むMを捜し出してやりたいと思いました。若いころのMを彷彿とさせた道子さんの振り袖姿が目に浮かびました。異常な言動に振り回された、今朝方の情景が甦ります。しかし、義寛師と会えば、再び道子さんと会わないわけにはいかないような気がしました。

「先生、義寛師に電話する前に、道子さんと話す方法を教えてください。今朝会った印象では、言葉が通じそうにありません」

「ハッハハハハハ」

恐る恐る尋ねた問いに、先生が大笑いしました。

「精神病の患者を、むやみに怖がる必要はありません。道子さんの症状は薬でコントロールできます。きっと、薬を飲むのをサボっていたのでしょう。向精神薬と精神安定剤を規則正しく服用すれば、意識の緊張状態が軽減して、妄想の昂進を抑止できます。道子さんは、もう半年近く外来に来ていません。話が通じなかったのはそのせいですよ。義寛に会ったら、通院させるように言ってください」

自信に溢れた声で答えた先生が、ホッと一息ついて深々と椅子に座りました。落ち着きを取り戻した僕の様子を確認すると、隣りに座った晋介に声を掛けました。

「晋介、やけに神妙にしてるじゃないか。このくらいの話に恐れ入る晋介ではないだろう」

先生の言葉を待っていたように、晋介が飛び付きます。

「当たり前だよ。そんな、訳の分からない話じゃ動じないね。俺は、進太さんと海炭市から帰ってきたばかりなんだ。結構、冒険もしてきた」

晋介の答えを、先生はうれしそうな表情で聞いています。

「ああ、私がプレゼントしたライカで撮った、夕日の写真コンテストね。冒険というと、あちらでも何か、いい写真が撮れたのかな」

「撮れやしないよ。海炭市では、俺、人を殺してしまった」

さりげなく言った晋介の言葉が、僕を打ちのめしました。

人型の炎になって燃え上がる、校長さんの姿が目の前に広がりました。全身から血の引いていく感触がします。

壇原先生が、真っ直ぐ僕の顔を見つめました。僕の青白くこわばった表情を見て、先生は晋介の言った言葉が真実だと認識したはずです。

確かに、ガソリンを被った校長さんに、火の点いたジッポーを投げて焼死させたのは晋介です。たとえ、僕と祐子の危機を救うためだったとしても、晋介が罪障感に責め苛まれていて当然です。それを思いやれなかった僕の想像力が貧困に過ぎたのです。つい先ほど、晋介を個人的な問題に巻き込むことを怖れた自分が、滑稽に見えてしまいました。

全身を硬くして先生の言葉を待ちます。

「そうか、晋介にはいい薬だ。勉強になっただろう」

先生の言葉が落ちました。苦渋に満ちた響きですが、はっきりした声です。

「うん、すごく勉強になったよ。壇原先生、いつもありがとう。また来るね」

元気溢れる大きな声で晋介が答えました。先生の返事も待たないで立ち上がります。僕も立ち上がって晋介と並びました。ドアを開けたところで、二人して振り返りました。

先生は疲れ切った表情で椅子に座っています。かろうじて笑顔を浮かべ、僕たちに手を振りました。

壇原先生が晋介の殺人の告白を受容した背景には、殺人現場に晋介と一緒にいたはずの、僕の人格に対する鋭い観察と分析・評価もあったはずです。先生は一瞬のうちに、事件の偶発性と、事件に遭遇せざるをえなかった晋介と僕の運命を認めたのです。そして、罪を告げた晋介の一切を受容しました。

僕は、壇原先生の持つ、疲れきった雰囲気の意味が分かったような気がしました。罪人の懺悔を聴く、カトリックの司祭そのままなのです。心を病む人と接する医師の仕事は、神の仕事とイコールになってしまうのでしょう。

壇原先生は、人の良心を越えた水準の医療を自らに強いているようです。晋介が病院に来る途中で、先生を苦手と言い、後ろめたいと言った言葉も、初めて得心がいきました。

足取り軽く院長室を出る晋介に続いて、僕も深く頭を下げて、先生に別れを告げました。

「腹が減ったね。進太さん、ファミレスに寄ろうよ」

タクシーが走り初めてしばらく経つと、晋介が甘えるような声を出しました。時刻はとうに正午を回っています。目まぐるしく変わる事態に対応するのが精一杯で、僕は食事のことなど忘れていました。けれど、晋介の声を聞いてお腹が鳴り出しました。聞きつけた晋介が、無邪気な声で笑います。

僕たちは、最初に目に入ったファミリーレストランで遅い昼食を食べることにしました。

ステーキ定食の大盛りを軽く平らげた晋介は、デザートにクレープまで注文しました。僕はスパゲッティ・ミートソースで満腹です。

晋介は、もういつものペースに戻っています。図太さと効率のよさにはついていけません。

「進太さん、本当に寺の坊主に会う気なの」

真顔で問い掛けてきました。口にくわえたショートピースに使い捨てのライターで火を点け、深々と吸い込みます。怪訝な表情をして答えようとしない僕に、白い煙を吹きかけました。黒い長袖のＴシャツが大人びて見えます。決まってしまった予定に難癖を付ける

晋介が小憎らしくなりました。

「俺、寺の坊主を思い出したよ。小学校の道徳の時間に説教に来たことがあるんだ。変なやつだった。今朝会った道子も変なやつだ。あんなやつらに何回会っても、らちはあかないと思うよ。M捜しはもういいんじゃないの」

答えようとしない僕に追い打ちを掛けてきました。僕もむっとします。

「別に晋介が一緒に来なくてもいいよ。せっかく壇原先生が電話をしてくれるんだから、僕は義寛師に会いに行く。ひょっとすると、あの道子さんは姉になるのかも知れないし」

答えてしまってからぎょっとしました。姉という言葉に、多分に感情がこもってしまったような気がします。すかさず晋介が突いてきました。

「ほら、進太さんまで妄想に取り付かれている。これだからやばいんだよ。素人が病人と対決すると、必ず影響されてしまうんだ。一人でなんか行かせられない。俺も付き合う。さっさと済ませてしまおう」

したり顔で言った晋介が、煙草をもみ消してレシートを手に取りました。

椅子を鳴らして立ち上がります。

取り残された僕は形無しです。でも、これで冷静になれそうです。急いで晋介の後を追いました。

１２　物語の始まり

僕たちは再び、Ｍの本籍地の隣りにある寺院にやってきました。大きな山門には浄真寺と書いてあります。広い境内の奥まった位置に建つ、二階建ての庫裏に向かいました。玄関に設置されたインターホンのボタンを押します。

何回押してもチャイムの音が響くだけです。いくら呼び掛けても返事がありません。待ちきれなくなった晋介が引き戸を引くと、簡単に開きました。

「ほらね、寺や教会は入る者を拒んではいけないんだ。さあ、勝手に入らせてもらおう。どこかに坊主がいるはずだよ」

屁理屈を言って靴を脱ぎ捨て、晋介はズカズカと屋内に入っていきます。僕も苦笑して後に続きました。しかし、庫裏は無人でした。

「本堂に行ってみようよ」

晋介が憮然とした表情で言い放ちました。

本堂に続く回廊の扉を開き、大きな足音を立てて、殴り込みに行くみたいに廊下を渡っていきます。晋介の傍若無人な態度に、僕は冷や冷やしてしまいます。

「いたよ、坊主がいた。進太さん、やっぱり本堂だよ」

大声で叫ぶ晋介を追っていくと、薄暗い本堂の巨大な仏壇の前で紫色の僧服を着た僧侶が読経をしています。

「坊さん、伊東病院の壇原先生から電話があったろう。さっそく訪ねてきたよ」

晋介が立ったまま、不作法に声を掛けました。

「黙りなさい。今は昼のお勤めの最中だ。大人しく待っておれ」

低い叱声が天井の高い本堂に響き渡りました。義寛師の声はなかなか迫力があります。

「へん、もったいつけやがって」

さすがの晋介も憎まれ口を吐き捨てただけで、大きく開け放たれた本堂のきざはしに腰を下ろしました。ちゃっかり義寛師に尻を向けています。僕は本堂の隅の畳で神妙に正座して待ちます。

「進太さん、坊主のお経は日が暮れるほど長い。足が痺れてしまうよ」

さもおかしそうに晋介が冷やかしましたが、黙って正座を続けました。忠告どおり、お経は延々と続きます。すっかり足が痺れてしまいました。義寛師に意地悪をされているの

かと疑念が芽生えたころになって、ようやくお経が終わりました。

「さて、なんのご用かな」

本堂の隅にかしこまって控えている僕を振り返って、義寛師が鷹揚に尋ねました。右手の畳に寝そべっている晋介が、くすっと笑います。僕は、晋介を無視して義寛師に頭を下げました。

「僕は進太。Mの養子です。お嬢さんの道子さんとMの関係を聞かせてください」

率直に問い掛けました。壇原先生がどの程度話してくれたか分からないので、直截に尋ねるのが一番だと思ったのです。

「関係はない」

ぶっきらぼうな答えが返ってきました。僕たちが歓迎されていないことは明白です。

「いえ、続柄という意味です」

重ねて尋ねました。

「会ったことはないが、Mは私の従妹に当たる。道子はMにとっては従兄の子になるのだろう。だが、Mは半世紀近くも行方不明だ。本寺とは関係がない」

素っ気ない声で答えました。生徒手帳の付録の、親族関係の一覧表を参照しているような内容です。晋介が言っていたように、このままでは、らちがあきません。僧職者への礼を失しますが、はっきり問いただしてみることに決めました。

「三十年も昔のことですが、都会で暮らしていたMが道子さんを産み、育てられなくなって本家の浄真寺に預けたという噂があります。その話が事実なら、道子さんは僕の姉になります」

「愚か者め、仏前で何を言うか。戯けたことをほざくと、仏罰が当たるぞ。道子は私の子だ」

怒声が返ってきました。義寛師が動揺した証拠かも知れませんし、道子さんの妄想を知られたことへの怒りかも知れません。

踏み止まって問い返します。

「義寛師は妻帯しなかったと聞いています。道子さんの母はだれなのです」

無礼な問い掛けに義寛師が絶句しました。口を一文字に結んで睨み付けてきます。冷たい沈黙が本堂に満ちました。僕は、焦って行き過ぎてしまったようです。これといった打開策も思い付きません。面会を打ち切らなくてはならないようです。

「ほら見ろ、糞坊主は答えられまい」

突然、金切り声が響き渡りました。

ぎょっとして声がした方を見ると、仏壇の裏の暗がりから白い影が躍り出てきました。振り袖姿の道子さんが素早く木魚を叩く棒を拾い上げます。そのまま振りかぶって二発、義寛師の禿頭を、当然といった仕草で叩きました。深閑とした本堂に響く乾いた音が、なぜかユーモラスです。

「欺瞞と偽善に満ちた寺は燃してやりたい。でも、Mは寺を焼かずに生家を焼いた。もう私に行き場はない。糞坊主め、今日という今日は是が非でも死ぬ。死んで私も、お祖父さんの所に行くのだ。お前はMとつるんで娘を産ませろ。隠し子の私が生まれ変われる絶好のチャンスだ。さあ、進太。弟ならば、私の死ぬところを目を見開いてきっちり見ろ」

立ちはだかった道子さんが、棒を振りかぶったまま大声で叫びました。大柄な身体から放射される狂ったエネルギーが、僕に向かってきたのです。背筋を寒気が掠めました。道子さんが振りかぶった手を一閃しました。僕の肩先に痛みが走ります。木魚の棒が畳に落ちて転がっていきます。

「ハハハッッッハハハハハ」

長く尾を引いた笑いを発して、道子さんが跳び上がりました。

「死んでやる。死んでやる。死んでやる」

呪文のように唱え続けながら、本堂を練り歩きます。突然、向きを変え、境内の方に向かいました。すっくと立ち上がった義寛師が押しとどめようとしますが、いっこうに聞き入れません。踊るような歩みにつれて着物の裾が乱れました。露になった白いふくらはぎが、またしても僕の視覚を悩ませます。Mの幻影が脳裏に浮かび上がってきました。

「道子、いい加減に目を覚ませ」

境内に下りるきざはしのすぐ手前で、仁王立ちになった義寛師が絶叫しました。道子さんを外に出すまいとする気迫が伝わってきます。さすがに、跳び歩いていた道子さんの足が止まりました。怒らせていた肩が落ち、しょんぼりした足取りで義寛師に近寄っていきます。

聞き分けたような仕草に全員がホッとした瞬間、道子さんは振り袖の裾を翻して、義寛師に向かって突進しました。不意をつかれた義寛師が、道子さんと重なって後ろに倒れていきます。

二人の身体が高さ二メートルのきざはしから、境内に投げ出されました。紫の僧衣と白い振り袖が重なって落下します。真っ逆さまになった義寛師の禿頭が敷石に激突しました。

頭蓋が砕ける凄まじい響きと、肉体が着地する鈍い音が耳を打ちます。

よろよろと義寛師の身体の上から起き上がった道子さんが、無惨に砕けた義寛師の頭部を見下ろしました。満面に恐怖の色を浮かべて笑い出します。

「ハハッハハハハハ、糞坊主が死んだ。Mが復讐に来たんだ。次はきっと私の番だ」

憎々しく叫んだ後、ぼう然と見下ろしている僕たちを睨み付けます。全身が激しく震えていました。

「負けだ、私の負けだ。Mに殺される前に自分で死んでやる。進太、歴代の墓所に行って姉の死を見守れ」

厳しい声で命令した道子さんが、墓地の方向に走り出します。野獣のようにエネルギッシュな走りが妄想の昂進を証していました。

「放って置いていいのかい。少しやばそうだよ」

晋介がのんきな声で呼び掛けてきました。僕は事態の陰惨な展開と、真実を知る義寛師の死のショックで口もきけません。かろうじて晋介の声で道子さんの危機を理解しました。人の死はもう懲り懲りです。晋介と一緒に裸足のまま、道子さんの後を追って、歴代の墓所を探しに走り出しました。

古びた墓石が延々と続く、墓地の奥まった位置に浄真寺の墓所がありました。

いかにも日当たりがよさそうな場所で、広さは普通の墓地の十倍もあります。頭部が丸くなった、大小十基の僧職者の墓が整然と並んでいます。右端にある大きな黒御影の墓石の後ろに道子さんがいました。墓所の入口に立つ僕たちから四メートルの距離です。

道子さんは、墓石の後ろに巡らせた石の柵の上に立っていました。端正に着こなしていた白地の振り袖の前が、すっかりはだけてしまっています。剥き出しになった豊かな乳房が怒ったように上を向いています。腰を覆った薄桃色の湯文字が、不思議な艶めかしさをかもし出していました。

一メートルの高みにすっくと立ち上がった姿はまるで、天界から堕ちてきた菩薩のようです。ねじ曲がって頭上に張り出したサルスベリの枝が天蓋に見えます。地面に敷き詰めた細かい玉砂利の上に、朱色の帯や色とりどりの紐が乱れ落ちていました。

「遅いじゃないの。道草はやめてよ」

なぜか、会ったときと同じ言葉で呼び掛けてきました。改めて異様な光景が目に焼き付きます。道子さんがMの分身になって出現したような幻覚が、再び襲ってきました。

「やばいな、首を吊る気だ」

晋介の覚めた声が耳を打ちます。慌てて観察すると、細い首に銀色の組み紐が巻かれていました。紐の先を手にした道子さんは晋介を見向きもせず、真っ直ぐ僕を見据えています。

「進太、姉の死に立ち会えるなんて最高でしょう」

呻くような声で呼び掛けて、両手を高々と上げました。張り出したサルスベリの枝に首から延びた組み紐を慎重に結わえ付けます。まるで、迫り来るMを牽制しているような身動きでした。見えない手で制止されたように、僕たちは動きが取れません。

「参ったな、セット完了だよ。あの紐は細いけど、丈夫だろうね。あの高さから飛び下りれば、頸椎が折れる。最悪だね」

晋介の声が響きました。細い絹糸を無数に合わせて組んだ紐は強靱なはずです。道子さんの体重くらいで切れる道理がありません。僕の首筋を冷気が掠めます。残った勇気を振り絞って一歩を踏み出しました。

「道子さんやめなよ。死なないでくれ」

悲壮な声で訴えました。僕を見下ろした道子さんの口許に妖艶な笑みが浮かびます。

「いくら弟の頼みでも、そればかりはだめね。私はMに殺される前に死ぬ」

「いやだ、僕は道子さんの弟だ。見捨てないでくれ」

反射的に答えていました。言ってしまってから、妄想に同調してしまったことを悔いましたが、もはや手遅れです。道子さんの身体が一回り大きくなったように見えました。

「進太は殊勝なことを言ってくれるね。縁薄かった弟に、私の誠を見せてあげる。しっかり目に焼き付けるといいわ。私は死んでも、進太の中で生きる」

厳かな声が高みから落ちてきました。すでに前がはだけている振り袖を、一気に肩から脱ぎ落としました。薄桃色の湯文字一つで腰を覆った半裸の姿があらわれました。もう完璧に菩薩像です。思わず息を呑んでしまいました。

背後にいる晋介が、大きく舌打ちをしました。

「道子さん、もっと自分を大事にしなよ。俺たちはストリップを見に来たんじゃないぜ。下りてくれば、壇原先生に会わせてやるよ」

冷たい声で呼び掛けました。あまりの展開に、晋介も居たたまれなくなったようです。道子さんが怖い顔で一瞥しました。

「連れの子供は、いつもゴチャゴチャとうるさい。私と進太は姉弟なのよ。弟に誠を見せ

てどこが悪い」

道子さんが怒声を発し、晋介を無視するように臍の下で結んだ紐を解き去りました。薄桃色の布が地上に落ちます。素っ裸になった股間で漆黒の陰毛が天を突いています。さすがの晋介がたじろいだ気配が伝わってきました。

道子さんが無造作に足を左右に開きました。陰毛の陰りからのぞいた性器が僕たちを笑っています。口許にも薄笑いが浮かんでいました。なんとも凄艶な笑みが僕たちを打ちのめします。迂闊なことにペニスが勃起してきました。頬がカッと熱くなります。首を左右に振って、もう一歩を踏み出しました。道子さんまで二メートルの距離ですが、頭の中が真っ白になって何も目に入りません。

「姉さん、もういいよ。Mに姉さんを殺させはしない。僕が代わりになんでもする。一緒に暮らそう」

思ってもいない言葉がすらっと口を突きました。はっとして意識が鮮明になります。上目遣いに見た道子さんの目は据わっています。裸身を吊り下げた銀色の組み紐が妖しく光りました。重く垂れ下がった雲が薄れ、薄日が射したようです。蒸し暑さが立ちこめてきました。僕の股間を見つめた道子さんが、ゆっくり口を開きます。

「姉の裸を見て勃起するとは、見上げたものだ。死を思いとどまってもいい。なんでもしてくれるというなら、お前の真心をくれ」

僕は耳を疑ってしまいました。思いがけないレトロな言葉です。胸がホッとしました。あまりの微笑ましさに目を細め、大きくうなずき返しました。

「うん、いいよ。姉さんに僕の真心をあげる」

答えると同時に、不安定な裸身が柵の上で回れ右をしました。頑丈な石柵ですが、石の幅は二十センチメートルしかありません。危なくて見ていられずに目をつむってしまいました。

恐る恐る目を開くと、突き出された尻が見えました。大きく開いた尻の割れ目の奥で、愛液に濡れた陰部がうごめいています。

「さあ、進太の真心をくれ」

組み紐を巻いた首をねじ曲げて催促しました。道子さんが欲しがった真心とはセックスのことなのです。でも、こんな状況で応じられるはずがありません。

「だめだよ、今はあげられない」

「嘘つきめ。急がないとMに殺されてしまう。真心がだめなら一千万円くれ。さあ、一千

万円出すんだ」

僕の弱々しい答えに、叱責と無心の声が返ってきました。もう無茶苦茶です。何が一千万円の対価なのか考える気にもなれません。狂気が頂点まで達してしまったのでしょう。僕を睨み付けた目が空洞のようです。ねじ曲げた首もそのままに、今にも後ろ向きに飛び降りてしまいそうな恐怖が立ちこめました。

「進太さん、俺たちはだまされた。両足にしがみつけ。紐は、すぐに解ける」

進退窮まった僕の耳に、晋介の声が飛び込みました。反射的に裸身を見上げます。首の後ろで縛った紐は、なんのことはない花結びでした。

思い切って地面を蹴って道子さんに飛び掛かります。同時に、裸身が後ろに倒れました。首に巻いた組み紐が解けます。僕は大きく両手を開き、落ちてきた尻を抱き留めました。道子さんの全体重を支えきれず、あお向けにひっくり返ります。柔らかな肉体の重量を全身で受け止めました。

「ギャー、殺せ、早く殺せ」

嬌声を上げて、道子さんが僕にしがみついてきます。恐ろしい迫力と力に、仰向けに倒れた僕は為す術がありません。僕をMと勘違いしているようですが、道子さんは裸の陰部を僕の腰に擦り付けてきます。姉に犯される恐怖が喉元まで込み上げてきました。

「よせっ。いい加減にしないと、ぶっ叩いてやる」

怒声を発した晋介が走り寄って、道子さんの頬を二回、平手で叩きました。皮膚を打つ音と、けたたましい悲鳴が耳のすぐ側で交錯します。

僕にしがみついた道子さんの両手を、晋介が背中にねじ上げました。ひときわ高い悲鳴が上がります。晋介は素知らぬ顔で地面に落ちていた紐を拾い上げ、道子さんを後ろ手に縛り上げてしまいました。

やっとのことで、僕は立ち上がれました。

玉砂利の上では白い裸身が暴れ回っています。後ろ手に縛られた道子さんが自由になる両足を蹴り上げて晋介に抵抗しているのです。晋介が裸身を蹴り、数本の紐を拾い上げました。荒れ狂う長い足を交互に掴んで胡座を組ませ、足首を縛り上げます。続いて後ろ手に緊縛した裸身を足蹴にして上体を前屈させました。その姿のまま、足首から伸びた紐を後ろ手に縛り付けます。伸びやかだった裸身が、まるで荷造りされたような窮屈な姿で転がってしまいました。

「やっと静かになった。手間を掛ける女だ」

大きく息を吸い込んだ晋介が、満足そうにうそぶきました。足下では素っ裸で胡座縛りにされた道子さんが呻いています。両の乳房が足首に密着するほど裸身が前屈しています。江戸時代の海老責めの拷問を受けているのと同じ姿でした。大きく開いた両膝を震わせて呻き、苦痛に呻吟する裸身が小さく見えました。晋介の暴力の前では、妄想も急速に漸減していくようです。左右に尻を動かして喘ぐ姿が痛ましくなります。

「道子さん、苦しいのかい」

苦痛を案じて声を掛けてみました。

窮屈な格好でうなだれていた道子さんが声に反応し、即座に顔を上げました。僕の視線を正面から受け止めます。真空のようだった道子さんの目に光が甦っていました。

ホッとしたとたんに、僕の心は凍り付いてしまいました。道子さんの目の底で燃えている、官能の炎が見えたのです。減退した妄想が露出させた分裂した無意識の隙間から、官能の炎が揺らめき立っていたのです。道子さんの無防備な意識がかいま見せた性が、僕を震撼させます。股間が熱く燃え上がり、再びペニスが勃起してきました。

「壇原先生に電話してくるよ。ここへ来てもらうことにする。もう、通院じゃ済まない。入院が必要だよ」

晋介が言い捨てて、去っていきます。僕は答えることができません。遠ざかっていく足音が合図のように、道子さんが不自由な身体で仰向けに倒れました。

大きく露出した股間を宙に掲げて尻を振り、妖しく身悶えを始めます。苦痛の呻きが、僕を誘っているように聞こえました。殺風景な墓地の中で、官能の炎がメラメラと燃え立っているようです。Mの幻影がしきりに脳裏を去来しました。

僕は、猛り立ったペニスを、道子さんの股間に突き立てることはできません。しかし、これまでたどってきた「Mの物語」のヒロインであるMなら、きっと、道子さんの求めを受け入れているはずです。Mは道子さんと共に、官能の極まりを追い、悲しさを共有するでしょう。それがMの生き方でした。求めに応じきれない自分が歯がゆくなります。

目を閉じると、微笑んでいるMの顔がまぶたに浮かびました。でも、その顔はけして、慈愛に溢れているようには見えません。今の僕には、どことなく恐ろしい顔でした。狂者の顔のようにも見えます。Mは、心を病む人と一緒に病むことを厭わなかったのでしょう。それどころか、自ら進んで、その場に身を置いたのです。行き着く場所を決めずに、果てのない修羅の道に踏み込んだMが、今、僕に向かって微笑んだのです。

僕の背筋を、恐怖が掠めました。

自らの責任と人格に基づき、自由に生きるということは、終わりのない修羅の道に踏み込んで行くことでした。とうてい、僕にできることではありません。

そう思った瞬間、急にMが遠ざかっていきました。僕を置き去りにして遠ざかっていくのです。

一瞬、悲しさが僕の胸に満ちました。でも、ほんの瞬間です。

目を開くと、悩ましく悶える道子さんの裸身が見えました。Mと同様、申し分のないほど美しい肉体です。僕は道子さんを、Mの隠し子、Mの分身として認めようと思います。

この三か月の間、様々な事実に立ち向かい、真剣に見つめてきた視線が、僕の被写体を見る目を鍛えてくれたようです。写真家になる自信が湧いてきました。

これから生きていく時間の集積がきっと、Mが求めた官能の秘密を僕に明かしてくれるでしょう。

淫らにうごめく道子さんの尻が、折からの斜光で赤く染まりました。カメラを持っていないことが悔やまれますが、今日はどうやら渡良瀬橋の夕日が見られそうです。

メール

僕は晋介の家の離れに泊まっています。

ひっきりなしに続いた異様な出来事で、まだ気持ちが高ぶっているのでしょう。目が冴えきって眠れません。襖一枚隔てた隣室からは、晋介の寝息が聞こえてきます。細やかで逞しい神経が羨ましくなります。「Mの物語」をたどる、僕の最後の旅は晋介との二人三脚でした。

自らの責任と人格で自立したMと異なり、僕には友人がいます。Mと比べて甘いと言われれば、黙ってうなずくしかありません。しかし、僕は胸を張ってうなずきます。限りない悲しさに立ち向かっていったMと同様、果てしない希望を被写体として追っていきたい僕にとって、共感できる同行者がいることは恥ではないからです。少なくとも、僕がもう少し大人になり、性の迷い道に踏み惑うまでは、晋介が代表する少年たちがMが知らなかった伴侶なのです。

もうじき午前〇時になります。

道子さんは伊東病院に入院しました。壇原先生の話では、一か月ほどの短期入院で済むそうです。結局、渡良瀬橋の夕日は見られませんでした。入院の説得までに思いの外時間がかかり、墓地にいる間に日が暮れてしまったのです。

眠れぬままに短い手紙を書いてみます。でも、今回の手紙はMに宛てたものではありません。これからMに出会うかも知れない、まだ見たことのない、僕の分身に宛てたものです。

前略

僕は進太。十五歳になる無業者です。

「Mの物語」を巡る旅を続けてきましたが、今日でおしまいにします。結局、Mを捜し出すことはできませんでした。

旅を始めたとき以上に、Mは遠ざかってしまったような気がしています。きっと、僕の踏み出した道が、Mと異なってしまったことの証なのでしょう。でも、いつかMに会えると信じています。

なぜなら、僕も自由に生きたいと思っているからです。しかし、Mのように、終わりのない道に踏み込む勇気がまだ湧いてきません。ゴールの見えないレースは悲しすぎます。僕は、やっと、うっすらと見えてきた視線で、なんとか僕のゴールを見据えてみようと思っています。まだ、時間はたっぷりとあるのですから、闇雲に駆け出す必要はありません。Mは、短距離ランナーのダッシュで、マラソンを走り続け、ちょっぴり疲れて休憩しているのでしょう。

Ｍは、限りない自由の道を進んでいきます。

ひょっとすると、Ｍを必要とする皆さんの街にいるのかも知れませんね。

あなたの街にＭは行きましたか。あなたはＭに会いましたか。

Ｍに会った人がいたら、Ｍに内緒で手紙をください。多分そのころ、まったく新しい暮らしを始めている僕にとって、その便りは心の安らぎになるでしょう。どうぞ、僕に手紙をください。

あなたの街にＭはいますか。

あなたはＭに会ったことがありますか。

進太

完